IS《インフィニット・ストラトス》―install　memory―

さんぱい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ―ｉｎｓｔａｌｌ　ｍｅｍｏｒｙ―（インフィニット・ストラトス）

【Ｎコード】

Ｎ０３０８Ｓ

【作者名】

さんぱい

【あらすじ】

記憶喪失になった織斑一夏が皆に支えられながら日々を過ごしていく物語。※キャラ崩壊、オリジナル設定を多々含むと思います。ここはこうしろーなどの意見がありましたらぜひ教えてください。

はじまりはじまり

俺が目を覚ましたとき、目の前には見慣れぬ天井があった。
ここは・・・どこだ？
何で俺こんなところに・・・いや、そもそも俺・・・誰だ？
もしかして、これが噂に聞く記憶喪失というやつだろうか。もちろん聞いた記憶なんかないが。

ベットに寝かされていた上体を起こして周囲を確認する。うん、普通の部屋だな。
とりあえず今の状況を思い出そうとするも、肝心の記憶が殆ど無い。
特に自分の経験に関する記憶が殆ど無い。
自分のことを思い出そうと必死になって考えていると、部屋の扉が開いた。

「あれ、一夏起きてたんだ？もう身体は大丈夫なの？」

そう言ってこっちに子犬のような笑顔を向けてくる金髪の女子。
ずいぶんと親しい人に接するかのような笑顔を向けてくれているが、残念ながら名前も自分との関係もわからない。いちか、って言うのは俺の名前だろうか。
とりあえず会話しないことには始まらない。自分が記憶喪失気味なことを伝えなくては。
・・・うう、でもこの子めちゃくちゃ可愛くて初対面（自分的には）の俺にはどんな感じで声をかけていいのかわからない、緊張する！

「っておーい、いちかー？きいてるー？」
「うおおおおぉぉぉぉぅぅわああ！」

そう言って顔をこっちにグッと近づけてきた金髪子。どうやら自分の世界に入ってたときにも話しかけてたっぽいが、まあ熟考モードで聞き流してたんだろう。
そんなことより急に目の前に顔を突き出されたものだから驚いて頭を思い切り後に下げて壁にぶつけてしまった。痛い。やばい、頭が熱い。顔も熱い。

「急に大声出してどうしたの・・・顔が赤いけどやっぱり治ってないんじゃない？まだ安静にしてなきゃだめだよ？」
「だ、だいじょうぶ！へーきだから、さがって！顔が近い！」

ベットに倒れこんで毛布で顔を隠す俺。初心な中学生かって感じだが、そういう女性免疫みたいのも記憶とともにどっかに行ってしまったのだろう。
ちょっといちかどうしたのさー、なんて言いながら布団を揺らしてくる。
安静にさせてくれるんじゃないのかよ、なんて突っ込みたいがまあやめておこう。
とにかく彼女の誤解を解かなくては。彼女は今記憶を無くす前の俺と会話してると思ってるんだろう。それを正してあげなくては。
・・・もしかして彼女は以前の俺と付き合っていたのだろうか。こうして寝ていた俺を甲斐甲斐しく起こしに来てくれて、男の俺と接触することにあまりに無防備だ。馬鹿な中学生かって感じだが、現実問題記憶を失ってる自分には彼女にそうかと尋ねない限りはその妄想を否定出来ない。もし付き合ってたんだとしたら彼女には申し訳ないけれど、こればっかしはどうしようも無い。毛布から顔を出していまだにゆすり続けている彼女に声をかけた。

「あの・・・お嬢さん？」
「ん？なに、あらたまって」

彼女の名前も知らないので変な呼び方になってしまったがそれはしょうがない。

「えっと、実は俺、記憶喪失気味で、自分が誰かも、君が誰かもわからないんだよね・・・」

「なにそれー」

俺の大告白は愉快そうに笑って受け流された。冗談と思われたらしい。いや、本当なんだけど。まあそりゃすんなりとは信じらんないよね。逆に今の一言だけで信じられたらどれだけ純真なんだ。周りの友人に絶対色々からかわれるタイプの人間だよね。まあ俺のこれは冗談でもなんでもないから信じてもらうまで言い続けるしかない。

「いや、本当なんだよ。自分の名前も君の名前もわからないし、何でここにいるのかもわからないんだよ。えっと、俺の名前はいちかってことでいいの？」

「え？」

ピタっと彼女の動きが止まった。こっちを凝視している。信じてくれたんだろうか。普通の感性ならまだ冗談だと疑っててもいいとおもうんだけど。以前の俺がそんな冗談をいうタイプではなかったということだろうか。まあ記憶喪失になったなんて悪趣味な冗談をつくような人間ではなかったんなら信じてくれるだろう。以前の俺に信用があってよかったよかった。

「ほんとに一夏、私のこと・・・忘れちゃったの？」

「いや、まあうん。君のことだけじゃなくて自分のことも他の人のこともなんだけど」

「そんな・・・うそでしょ？」

「申し訳ないんですが、本当」
「私だよ・・・シャルだよ？シャルロットだよ・・・」
「・・・ごめん」
「うっ、ぐすっ、う、うわあああああああああん」
こらえきれなかったかのように彼女（シャルロットというらしい）が泣き出した。
・・・困った。何も悪いことはしていないはずなのに悪いことをした気分になってくる。俺が被害者のはずなのに加害者の気分だ。残念なことに彼女と自分の関係すらわからない俺には慰めることができない。その資格はない、と思う。
泣いてるシャルロットを前にして呆然としていると、扉がすごい勢いであけられた。
「一夏！まだねてんの、ってシャルロット！？あんた何で泣いてんのよ！？・・・ちょっと一夏ぁ！あんたシャルロットに何したのよ！」
入ってきたツインテールの女の子はこっちに来て俺の胸ぐらを掴み上げた。
うわあ、以前の俺信用ねえなあ・・・。と、なにやら彼女の左腕がゴツイ機械みたいなもので覆われだした。それがなんなのかは分かった。ＩＳだ。今やこの世界の中心となっているもの。なくなったのは思い出だけなのでそう言った常識みたいなものはきちんと記憶しているのだ。でもあれってそんな簡単に個人が持ち出せるものだっけ？女性にしか使えないらしいけど女性だってＩＳが自由に使えるわけじゃないだろう。そんなことが出来る人って言ったら・・・
「・・・国家代表の人？」
そう、個人で自由にＩＳを使えるってことは専用機持ちってことだ

ろう。それはつまり国家代表かそれに準ずる人ってことで。

「って超エリートじゃん！そんな人と俺はかかわりがあったのか！？」

すげー。以前の俺ちょうすげー。国家代表の方とこんな身近で会えるなんて、しかもこの子もめちゃくちゃ可愛いし。以前の俺何者だよ。

「はあ？あんた何言ってんの？そりゃあたしは代表候補生だけど、別にあんたにエリートとか思って欲しいわけじゃないわよ。んなことより、何でシャルロットが泣いてるのか聞いてんのよ！返事次第では・・・」

そう言って武装された左手を持ち上げる目の前の女の子。目が笑ってない笑顔が超怖いです。早いとこ弁明しないと命がないかもしれん。

「いや、あの実は俺、記憶喪失でして！それを起こしに来てくれた彼女に告げたら急に泣き出してしまいまして！どうしようかと悩んでいたところであります！」

目の前にいるＩＳ武装中の代表候補生様に対しつい背筋を伸ばして敬語で応答。以前の関係こそ分からないが現に脅されている以上あまり好ましい関係ではなかったのだろう。胸倉掴まれてるし、ＩＳ怖いし。

目の前にいる少女は、は？とか言って固まっている。金髪の子（シャルロットだっけ？）の方はだいぶ落ち着いてきたらしく目をこすって顔を上げた。

「よく聞いて一夏！あなたの名前は織斑一夏！僕の名前はシャルロット・デュノア！僕は一夏のおかげで平和な毎日が過ごせるようになったんだよ？」

すごいことしてるな俺。美少女を悪人から守りでもしたのか？どんなヒーローだよ。

そういってキリっとした表情でこっちを見るその子はすこし、いやかなり可愛くてなんか和んでしまった。

ただまあ金髪美人さんからは正式に名乗ってもらったので気兼ねなくシャルロットさんと呼ばせてもらおう。外国だとこっちのほうが名前になるんだろうけどまあシャルロットさんも俺のことを名前で呼んでいるので多分名前で呼び合う関係なんだろう。と、ここで気にかかるのは以前の俺との関係ですよやはり。こんな美少女と俺は付き合っていたのか？でもそんな恥ずかしいし相手にとっても失礼なことは面と向かっては聞けないのでちょっと遠まわしに聞いてみる。

「あ、これはどうもシャルロットさん。えっと、ところで、以前の俺とシャルロットさんはどんな関係で？」

「え！？いや・・・どんな関係って・・・それは・・・」

なんだかどもってうつむき出すシャルロットさん。心なし顔も赤い気がする。

・・・これは、もしかするともしかするか？普通に友人とかクラスメイトなら言うのをためらうことはないだろうし、親戚だとするならなおさらだ。だがもし恋人だったなら？自分は相手のことを恋人だと思っているのに相手はそれを覚えてない。しかもそんな説明を自分がしなくてはならない。これは悲しい。そりゃ泣きたくもなるしどもりもするし俯いてしまうだろうさ。

そこまで考えて俺は結論を出す。

シャルロットさんと俺、織斑一夏は恋人同士だったのだ！
だとすればこんな失礼極まりない質問は即刻取り下げて以前の関係を取り戻そう。彼女が望む以前の俺に戻ろうではないか！

「ごめんよシャルロット、変なことを聞いた。昔のことは確かに記憶にない。でもそんなことは関係ない！俺がシャルロットを好きな気持ちは今も昔も変わらないんだ！シャルロット！記憶をなくした俺だけど・・・そんな俺でも、シャルロットは好きでいてくれるか？」

もう俺の中ではシャルロット＝俺の恋人なので呼び捨て。そしてまた新たに生まれ変わった自分としてもう一度告白を。
シャルロットの目を見て、手を取り自分の気持を伝え、そして彼女の言葉を待った。
シャルロットは最初ぼーっとしていたが、何を言っているのか理解すると、顔を真っ赤にして小声でブツブツ言い出した。なんか、どうして急に、だとか、なんでいまなの、だとか聞こえる。
なかなか返事をしてくれないのでさすがの俺の心にも・・・モシカシテ、チガッタ？という不安がでてきたが、それが表面に出てくる前に、

「ちょおおおおおおおっとまちなさいよ！！！！一夏が記憶喪失で！何でシャルロットに告白することになるのよおおおおお！！！！」

と、今だに右手で俺の胸ぐらを掴みあげてる女の子が吠えた。右手で俺をぐらんぐらん揺らしながら。左手に武装されてるＩＳをこっちに向けながら。
だが俺も男だ。女尊男卑だからって関係ない。恋人（おそらく）の前で無様な真似はできない。

おれは相手の右手を掴んで、その子の目を見てきっぱりと告げる。

「俺がシャルロットを好きなのは事実だ！ＩＳで相手を脅すようなやつに文句を言われる筋合いはないし、君が代表候補性だからって関係ない。これは俺とシャルロットの問題だ」

「んなっ！？・・・でもあんた、記憶ないんでしょ？だったら何でシャルロットのことが好きだって言えるのよ！」

「記憶は消えても魂は消えてない。俺にはわかる。記憶を失う前に、彼女を守る、幸せにすると誓ったことを。記憶を無くしても、その誓いは守る」

そこまで言って右手を振りほどき、シャルロットの方を見る。残念ながらツインテールの子とは仲良くできそうもないし、とりあえずは無視の方向でいこう。

シャルロットはさっきの俺の本心だが嘘という矛盾した言葉で更に顔を赤くしていたが、俺の視線を受けてビクっとした後、静かに語りだした。

「あのね、別に僕と一夏は付き合ってたわけではないんだよ。でも、だからってそういう感情が僕になかったわけじゃなくてね、僕は一夏のことが好きだったんだよ。一夏は僕を守るっていってくれたから、僕に居場所をくれたから。一夏のおかげで凄く凄く救われたから。でもその思い出が一夏の中から消えてしまったのかと思って、僕すごい悲しかったんだ。でもそうじゃないんだね。記憶が無くなっても、一夏はそれを覚えていてくれた。すごく嬉しいよ。僕が好きになった一夏は、記憶が無くなっても一夏だったんだ、ってね。」

そう言ってにこっと笑ったシャルロットは、すごく魅力的で、思わず見惚れてしまった。天使の笑顔とはこう言うことを言うんだろう。

「――――でもね、僕が今ここで一夏の告白を受けたら、皆に顔向けできないよ。多分一夏がこんなこと言う理由って、記憶がなくって不安だったところで最初に顔を見せたのが僕だったからっていう理由だと思うんだよね。刷り込みみたいなものかな？」

一転して少し暗い雰囲気でいうシャルロットに対して俺は何もできなかった。

違うと言いたかった。俺が好きなのは本心だって言いたかった。でも言えるわけがない。だって記憶がないんだから。記憶のない俺が何を言ったところで、記憶のある俺を観てきた彼女に、それは違う、記憶がないが故の思い込みだ、と断ずられてしまえばそれを否定出来ない。

「だから、その言葉はあとに取っておいてよ。そうじゃないと他の一夏のことが好きな子がかわいそうだよ。僕もそんな理由で一夏と恋人にはなりたくない。記憶がなくたって僕は一夏のことが好きだよ、大好きだ。だって僕は覚えてるからね、一夏がどんなに素敵な人か。でもこの恋が実るのは今じゃないと思うんだ。今までさんざん競い合ってきたのにこんなことで上手く行かれちゃったらフェアじゃないよ。だからね一夏、他の皆ともよく話して、周りが落ち着いて、それでも僕のことが好きだと思っててくれるなら、その時にもう一度その言葉を僕にいってほしいな」

そしてシャルロットは、ふうっと一息入れると

「じゃあ僕は他の皆に一夏が目を覚ましたこと、それと、記憶喪失になっちゃったってことを伝えておくね。そ、それじゃあ・・・またね！」

といって急いで部屋から出ていってしまった。あとに残された俺と

ツインテの子は呆然とその姿を見送って、しばらく無言で過ごした後、どちらからともなく向きあった。

「えと・・・さっきのは本気だったの？」
「いやまあそりゃもちろんそのつもりだったけど・・・あれって遠まわしにふられたのかな？」
「あんたそれ本気で言ってんの？だとしたら本物の馬鹿よ」
「そうだよなあ・・・でもさっきの言葉を信じるとすると記憶を無くす前の俺は結構もててたのか？」
「それをあたしに聞くとこがあんたらしいっていうかなんていうか・・・ホント記憶を無くしても一夏なんだなあって思うわ」
「そういえばまだ名前を聞いてないからわからないんだけど」
「ああそうだったわね。まさか今さら一夏に名乗らなきゃいけなくなるとは思わなかったわ」
「申し訳ない。いや俺悪く無いと思うけど」
「そりゃ一番の被害者はあんただしね。まあいいわ、凰・鈴音よ。あんたの幼なじみ。あんたは私のことは鈴って呼んでたわ」
「そうか。じゃあ俺も鈴って呼ばせてもらうよ」

こうして、記憶をなくした俺の新しい日々が始まった。

はじまりはじまり（後書き）

小説処女作なので文章が拙いですが頑張っていきたいです

なかよしきょうだい

シャルロット・デュノアはあまりの恥ずかしさに死にたくなった。

（はぁ～、勢いですごいこと言っちゃったよぉ～）

本人的にはため息を付いて悩んでいるつもりなのだが、周りから見れば顔を真っ赤にしながらニヤニヤとしてる怪しい人である。その上俯いたままぶつぶつとひとりごとを呟いているのだから完全に不審者だ。尤も彼女が歩いているのはＩＳ学園の廊下で、しかも彼女は校内では有名人なので知らない人はほとんどいないので不審者扱いされることはなかったが。

（でもあんな事言い出すってことは、やっぱり一夏は僕のことが好きってことだよね。魂が覚えてる、なんて言ってたし！）

自分で言ったはずの刷り込み、なんてことは彼女の頭から抜け落ちていた。どころか記憶喪失という重大事件すら今の彼女の前では些事に過ぎない。とにかく今の彼女の頭の中には一夏から告白された、という事実だけがいっぱいにつまっていた。

（一夏には今度にして、なんて言っちゃったけど、一夏なら分かってくれるよね！あ～楽しみだなぁ）

一夏の唐変木っぷりを忘れたかのような彼女の浮かれっぷり。今回のことに一段落ついたら間違い無く一夏は自分に告白しなおしてくれると信じて疑ってない。まあそれも無理は無い。だれにでも優しくて、でも誰か一人を特別にはしてこなかった一夏が、自分だけを好意の対象としてみてくれたのだ。これではしゃぐなという方が無

理だろう。
・・・まあ本来なら一夏の記憶喪失ということにこそ気を向けるべきなのだが。

（どこにデート行こうかなぁ。臨海学校の時は皆がいたから、今度は二人っきりで海とか行ってみたよね。ショッピングとかも行って、服とか・・・指輪とか・・・）
「おお、シャルロット、嫁はどうだった？」
「うひゃあああ！！！」

突然声をかけてきたルームメイトのラウラ。ほんとは向こうから普通に歩いてきて普通に声をかけただけなのだが、さっきまでトリップしていたシャルロットはそのことに気づかず情けない声を上げてしまった。

「ラ、ラウラ・・・脅かさないでよ・・・」
「そんなつもりはなかったのだがな。むしろお前の悲鳴にこっちが驚いたぞ。で、嫁の調子はどうだったのだ？」

その言葉にシャルロットは我に返る。この子って一夏のことを嫁とか呼んでるけどもうやめさせるか、なんてったって一夏は僕に告白してきたからね、もう僕のものだよ、なんて考えてるわけではない。一夏の記憶喪失という重大事件を報告しなくてはならないのだ

「ラウラ！大変なんだよ！実は――――」

あの後、鈴と記憶喪失になった直後とは思えないような普通の世間話をした。鈴の得意料理の話とか今度酢豚をおごってくれるとかそんな話だ。今度の約束はちゃんと覚えててよね！とか言ってたからきっと以前にご飯を食べに行く約束でもしてたんだろう。最初は脅してきたから怖い人かと思ったけどどうやら違ったらしいな、酢豚おごってくれるっていうし、いい人だ。――――実は鈴は先程のシャルロットの言葉を聞いてかなり動揺していて冷静に一夏に現状を説明できないと思ったので、世間話をしながら以前の約束をもう一度取り付け、すべてを忘れてしまった一夏に再度アピールしようと思ったわけだが、一夏的には既にシャルロットが恋人なわけでただいい人だなあぐらいにしか思われなかった。

そんな話をしていると扉が開かれ、そこから４人の女性がやってきた。

先頭を歩いているのはスーツを着こなした凛々しい女性。鈴やシャルロットより年上だろう。

後ろには緑髪のほんわかした女性。全体的に小柄な人だが一部分だけ不自然にでかい。同い年ぐらいだろうにあの大きさはすごいな。

その後ろにいるのは美しい銀髪で眼帯をした女の子。身長的には一番小柄だが、なんというか先頭の人と同じような凛々しい雰囲気が感じられる。

そして最後にひっついているのが我らが天使シャルロットである。

どうやら言ったとおり皆に伝えてきてくれたようだ。この場合の皆がどのくらいの関係者なのか、シャルロットを除いて3人というのは多いのか少ないのか、何で皆女性なのかはこの際無視しよう。自分の一大事に駆けつけてくれる人がいるというだけでも恵まれているのだろう。みんな美人だしな。

「一夏！お前記憶喪失になったというのは本当か！」

「あ、はい。正直あんまり実感わかないんですけど自分の記憶とか

周りの人が誰かとかがわからないんです」

スーツの女性が怒鳴ってきた。多分目上の人だろうし失礼の無いようにしなければ。

「そう・・・か。私のことも覚えていないのか？」

「すいません・・・」

「ああいい、気にするな。お前が悪いわけではない。私は織斑千冬。お前の姉だ」

「お姉さんですか！？」

うぇえ、こんな美人の姉がいたのかよ、羨ましいな、俺。

「お前らも自己紹介をしておけ。名前も分からんやつと会話するのでは疲れるだろう」

「あ、はい。私は山田真耶です。織斑先生と一緒に、ここＩＳ学園で教師を務めいてます」

「あ、どうも山田さん。いや、山田先生・・・？」

うん？ＩＳ学園の教師？高校生ぐらいに見えるのに・・・ってそうじゃない。姉である千冬さんはいいとして何でそんな人か俺の病室に？しかも『ここ』って言ってた。今の言葉を含めて推理すると・・・。

「ここってＩＳ学園なんですか！？」

だとすれば代表候補生の人がいるのも頷ける。問題があるとすれば女人の園であるＩＳ学園に男である俺がなんでいるかということだ。

「ああ、その話は後だ。ラウラ、お前も名乗っておけ」

「はい教官。私はラウラ・ボーデヴィッヒ。お前の婿だ」
「なんですと！？」
俺は既婚者だったのか！？しかも自分のことを婿って言った！美少女だと思っていたが実は男の娘だったのか！そして実は俺は女の子だったのか！？
思わず股間に手を当てるが、うん、生えてる。
「記憶喪失の者を相手にややこしくなるようなことを言うな。一夏が混乱するだろう」
そう言ってため息をついた千冬さん。きっと苦労人なんだろうなあ。まあ今現在一番彼女に苦労をかけてるのは俺なんだろうけどさ。
「とりあえず、お前には自分の立場を教えておく。心して聞けよ？」
そう言って千冬さんはまるで漫画かライトノベルかと思うような色々なことを話し始めた。まあ自分の過去の経験らしいが。
どうやら俺は女にしか使えないはずのＩＳを世界で唯一使える男らしい。そのことが世界的に問題になり、俺を数多の研究機関から保護するためにＩＳ学園へと強制的に入学させたそうだ。そして専用機である白式をもらってからは、専用機持ちとして、世界で唯一の男として色々頑張っていたらしい。だがそんな俺を快く思わない人や悪用しようとした人たちも大勢いて、事あるごとにテロリストからの襲撃を受けていたらしい。
が、今回のこれはそんなテロリスト（亡国機業というらしい）とは（多分）一切関係がなくて、いつも通りにＩＳの実践訓練を終え、授業が終わり放課後というところで俺が体調不良を訴えたらしい。測ってみると熱があったので部屋で横になり、かわるがわる来てくれたお見舞いの人も眠いということで追いだして、まあ大した熱で

もないので寝てれば大丈夫だろうと放置していたようだ。しかし朝一でシャルロットがお見舞いに行ったところ記憶喪失になっていて今に至る、ということだそうだ。
え？つまり俺は頭を打ったとかそういうのじゃなくてただ熱が出たって理由で記憶喪失になったのか？あり得るのか、そんなこと。

「まあおそらくは一時的なものだろう。とりあえず病院だ。たてるか？」

立つことぐらいなら余裕なので普通に立ち上がって先に進む姉についていく。
鈴とラウラとシャルロットが側に来て話しかけてくれた。

「嫁よ。頭では覚えていなくとも身体では覚えているだろう、寝床を共にした私のことを」
「な！そ、それはマジか！？」
「ああ、あの時のお前は激しかったぞ。裸だった私を抱きしめてだな・・・」
「ちょっとちょっと！それあんたが勝手に布団に入って一夏の抱き枕にされてただけじゃない！完全に無意識よ！ノーカンだわ！」
「そうだよラウラ！記憶喪失の人相手に適当なこと言っちゃだめだよ！事実だけを話さないと」
「ふむ、だが一緒に寝たことも裸の私が抱きしめられたことも共に寝技の練習をしたのも全て事実だぞ」
「ね、寝技！？」

別に普通の言葉なのに淫靡な香りがするのはなぜだろう。もちろん一緒に寝たとか直前に言われたからなのだろうが。

「ちょっとまってくれよ！そもそも何で嫁なんだ、せめて俺が婿で

お前が嫁だろ！」
「ふむ、だが日本では好きな人を呼ぶときには『俺の嫁』と呼ぶと聞いたぞ？」
「そんな間違った知識を教え込んだのは誰だ！」

だがまあ納得した。ってことは彼女が一方的にそう呼んでいただけなのだろう。だが堂々と「好き」と言われてしまった。この子はなんか純粋そうだから恋愛の好きなのか友人としての好きなのかははっきりしないが、それでも照れる。
ただまあ俺はシャルロットが好きなのだ。好意を持たれていることに悪い気はしないがはっきりと告げておくべきか？だけど本人からはまた今度にして、と言われてしまった。あまり言わないほうがいいのかな？
そんな感じで適当に三人と話していると、一夏！と後ろで俺を呼ぶ声が聞こえた。振り向くとそこにはポニーテールの似合ういかにも大和撫子！みたいな女子がいた。

「心配をして見舞いに行ってみれば、お前の姿はなく。当の本人はすっかり良くなって女とおしゃべりか？いい身分だなぁ！」

と、殺気をばらまきながら彼女が持っているものは・・・真剣！？しかも構えながらこっちに走ってきてるし！俺は直感で理解した。こいつは俺を殺そうとしている。先の話にでてきた亡国機業というやつだろうか。
あまりの殺気に固まっていると、ラウラが俺の前に立ちふさがってくれた。

「ふん。人の現状を理解しようともせず襲いかかってくるとは。器が知れるぞ、箒」

そういって部分展開されたのはラウラの専用機＜シュヴァルツェア・レーゲン＞。彼女が右手を前に出したとたん、襲いかかってきた人の動きが止まった。
これがさっきの話にあったＡＩＣというやつだろうか、引くことも押すこともできないらしい。これはすごいな。

「頭を冷やすんだな」
「な！・・・ぐっ、くう！」

俺も今がチャンスとばかりに話しかける。早いとこ説明しないと視線だけで殺されそうだ。

「えっと、あの、箒さん？俺、実は今記憶喪失で今から病院に行くところなんだ。皆はその付き添いだよ」
「なに！記憶喪失だと！？」

突然の言葉に驚愕したのか殺気がなくなった。ラウラもＡＩＣを解いて４人で箒に説明を始めた。箒さんは説明を聞いてる最中はずっと無言だったが、徐々にこっちを睨みつける視線が弱々しくなってきた。彼女なりにショックを受けているのだろう。
その途中で後ろから突然頭を叩かれた。いってえ！
振り向くと、そこには我らがお姉さま、織斑千冬さんの姿があった。

「いつまでくっちゃべっているか！とっとと歩け！」
「「「「「はい！！！！」」」」」

その返事に納得したのか千冬姉さんは歩き始める。俺達も後ろについていって話し声は出来る限り小声でだ。にしても頭の異常を抱えている弟に対し頭をぶん殴るというのはいかがなものでしょうか。
今ので記憶がもどるとでも思ってるのだろうか。

と、そこに金髪のきれいないかにもお嬢様然とした女の子が現れた。
「あら一夏さん。もう具合はいいんですの？」
「セシリア、しー」
話しかけてきた女の子を鈴がたしなめる。まあもうヘッドアタックを食らうのは勘弁して欲しいからな。だれ？という疑問の視線でシャルロットを見る。シャルロットも俺の視線を理解したのか、
「セシリア・オルコットさん、イギリスの代表候補生だよ」
と紹介してくれた。なるほど、本当にこの学年には代表候補生がたくさんいるらしい。さっきの説明の時名前だけは出てきた代表候補生のセシリアさんを見る。
「？なんですのシャルロットさん。急に私の紹介だなんて」
「いやね、セシリア。実は一夏が記憶喪失になっちゃったらしくて」
「はあ？」
呆然としているセシリアをまた叩かれる前にとこっちに呼び、歩きながら小声で状況説明を始めた。
箒の時とは対照的に結構オーバーなリアクションを返してくれるので見てて楽しい。
そんなこんなでＩＳ学園が誇る（山田先生談）校内病院に到着した。皆を残して俺と千冬姉さんだけで医者のところへ行く。質問をいくつかされて、その時の状況を千冬姉さんが話して、一応ＣＴスキャンもして、最終的な結果は異常なしだった。だんだんと記憶を思い出していって数日もすれば元通りになるだろうとのこと。それが本当ならいいんだけどね。

待っててくれた皆にそのことを話して、とりあえず今日は解散ということになった。

「一夏。お前はとりあえず今日一日体を休めて明日からは学校に来い。篠ノ之、オルコット、凰、デュノア、ボーデヴィッヒ。お前らも今日は一夏の部屋へ行くことを禁止する。他のものにもそう伝えておけ。行くぞ、一夏」

そう言って俺の手を掴むと、千冬姉さんは俺の部屋に向かって歩き始めた。場所なら覚えてるんだけど、まあいいか。されるがままについていくことにした。後ろから不満げな声がいくつか聞こえるが聞こえなかったことにしよう。

「飯は後で私が持って行こう。明日の朝は誰か迎えのものを行かせる。今日は部屋をでるな。・・・すまんな、不自由かけて。だがこれも混乱を避けるためだ。今日中に他の生徒にも今回のことを知らせ、明日はお前に不自由がないようにさせる」

「いいよ、千冬姉さん。こっちこそいろいろ気を使わせてごめんね。記憶が早く戻ればいいんだけど」

姉弟なのだからふたりきりの時ぐらい気を抜いた話し方でいいだろう。姉さんもさっきより雰囲気が柔らかいし。そう思って彼女を見るとやれやれといった感じに苦笑いしていた。

「まったくお前は。こんな時ぐらい私のことなど気にせず自分のことだけかんがえろ。記憶を失ってもお前は変わらんのだな」

「それ言われたのもう3回目だよ」

「褒めているんだ、嬉しそうにしろ」

そうこうしているうちに部屋についた。姉さんはまだ仕事があるとかで何処かへ行こうとしていたが、その前に何かに気づいたのかこちらを振り返り、

「そうだ、一夏よ。教室では私のことは織斑先生と呼べよ？」

そう言ってニヤリと笑って歩き去っていった。いまのはあれだろうか？皆の前ではちゃんとして欲しいけどふたりきりの時は甘えていいよっ！ってことだろうか。

「ほんとにいいお姉さんだな」

心が軽くなった気がする。シャルロットのためにも、皆のためにも、そしてなにより千冬姉さんのためにも早く記憶がもどってほしいと思った。

さて、誰もいなくなってしまった。ひとりで部屋にいてもやることがないし、姉さんが飯持ってきてくれるっていうしそれまで寝てるか。

その後姉さんが持ってきてくれた鯖の塩焼き定食は普通に美味しかった。

なかよしきょうだい（後書き）

メインヒロインを全員登場させようとしたらすごい無理矢理な展開になってしまった
大人数をいっぺんに動かすのは難しいですね

あらたなにちじょう

ＩＳ学園。
女性にしか使えないＩＳの操縦者を育成する世界で唯一の高等学校。
そのため、当たり前だが生徒には女性しか在籍していない。ただ一人の例外、織斑一夏を除いて。

ていうか以前の俺はこんな空間に耐えられたのか？
朝、山田先生が部屋まで来てくれて学食へと案内してくれた時も多くの女子生徒から奇異の目で見られたし、教室に入ってからも遠目でこっちを見てくるだけで誰も話しかけてくれない。正直辛いです。
俺には友達がいなかったのだろうか。女性ばかりの学校で馴染めなかったのだろうか。多分違うだろう。皆昨日のうちに記憶喪失という話を聞き、どう声をかけたらいいか迷っているんだろう。そうだと信じたい。
昨日一緒に病院まで来てくれた５人。シャルロット、鈴、ラウラ、箒さん、セシリアさん、そのうち誰も教室内では見当たらない。鈴は２組らしいから別としても他の４人は何でいないのだろうか。と思っていると千冬姉さん、じゃなかった織斑先生と一緒に件の４人組が入ってきた。見知った顔が入ってきたのでほっと一息付けた。

「お前ら席につけ！・・・よし、今日は朝からＩＳの飛行訓練だ。迅速に着替えて第２アリーナに集合するように。以上！」

そう言って織斑先生は話を切ると、俺を見て手招きした。そのまま廊下へ出ていったので付いて行くと、織斑先生が少し申し訳なさそうに告げた。

「織斑、今週のＩＳ　訓練だが、お前は参加するな」

「え！何でだよ千冬姉さん」
「学校では織斑先生だ！」
スパーンと出席簿で頭を殴られる。昨日の優しかった姉さんはもういないらしい。まあ今のはつい昨日までの呼び方で呼んでしまった自分が悪いのだから文句は言えないが。
「今のお前は不安定だ。ＩＳにのって何があるかわからん。それに記憶がないということは白式の操作についてもまた初めからだろう。既にお前に教えたことをもう一度やるのは時間の無駄だ。ということで今週はＩＳに乗るな。もし来週になっても記憶が戻らなければ、仕方ない。その時はもう一度私自ら教えてやろう」
「たしかにそうかもな。ごめん、迷惑ばっかりかけて」
「昨日も言ったはずだ。病人が他人の迷惑など考えるな」
じゃあ頭叩くのやめてくれよとも思ったが言わないでおこう。
「叩かれたくなかったら叩かれないように普段の生活を改めることだな」
って心が読まれてる！？
「考えてることが顔に出やすいのは記憶がなくても相変わらずらしいな。さて、参加しないとはいえど見学はしてもらうぞ？場所がわからんだろう、案内してやる。ついてこい」
そう言ってニヤリとしながら手をとって歩き出した。この年になって姉と手をつないで歩くというのも恥ずかしいものがあるがそうも言ってられまい。
なんか千冬姉さんに頼りっぱなしだな。以前はどうだったか知らん

がこれからは姉孝行しようと心に決めた。
それにしても、ＩＳに乗るのをちょっと楽しみにしてたんだけどな。
空を飛ぶのって気持よさそうだし。

「いくら何でも織斑先生は一夏に対して過保護すぎじゃないか？」
箒がさっきから感じていたことを漏らす。
朝も迎えに行こうとしたら教員がいくからこなくていいと言われ、朝のＨＲまでの時間は職員室に専用機持ち５人が呼ばれて今の一夏は混乱してるだろうからあまり普段のような馬鹿騒ぎを起こすようなことをするなと釘を刺され、挙句の果てにはＨＲ終了と共に一夏を連れて行かれてしまった。
恋する乙女としては好きな男が苦しんでいるときには傍で支えてやりたいと思っているのだがあの人のせいでなかなかその機会に恵まれない。箒が不満を覚えるのは当然と言えた。
もちろんそのことに対して不満があるのは箒だけでなくみんな一緒だ。

「とりあえず、どうにかして一夏さんと一緒にいる時間を作らなくてはなりませんわ」
「だが、問題はその方法だ。私が一人で嫁に会いに行ってもお前らは邪魔してくるのだろう？」
「当たり前だ！そう安々ふたりきりになんてさせるか！」
「でもそんな事でいつもみたいな騒ぎになったら織斑先生からなんて言われるか・・・」
「ならば決めるしかあるまい。だれが今の一夏のそばにいるにふさ

わしいか」

４人の瞳に炎が映る。彼女たちの心のなかは一つ。

（次のＩＳ飛行訓練、最もうまくいった人が一夏とふたりきりになる！）

全ては愛する男のために。篠ノ之箒は、セシリア・オルコットは、シャルロット・デュノアは、ラウラ・ボーデヴィッヒは、それぞれの専用機を展開し、いざ戦場（アリーナ）へと飛び出した。

ちなみに今回の飛行訓練はクラス別である。よって鈴は２組なのでいない。

俺は素直に驚いていた。専用機持ちではない一般生徒と比べ専用機持ちの訓練が激しいだろうとは思っていたがまさかこれ程とは。今の彼女たちがやっている訓練は決められたコースをいかに速く、いかに正確に走れるかを試すものだが、まるで実戦、いやそれ以上の闘志を持って訓練に挑んでいる。途中に仕掛けられている銃弾の出てくるトラップなんかも一切当たっていない。ムダのない軽やかな動きで回避しているのだ。

やはり訓練でも気を抜かず、全力以上の力でもって挑んできたからこそ今の彼女達があるんだろう。そしておそらくは自分も、本来だったらあの中に入っていたに違いない。自分が今の彼女たちのように必死になって得てきたであろうＩＳの技能が記憶と共にぽっかり無くなってしまっていることが本当に悔しい。ＩＳを自分に教えて

くれた人にも申し訳が立たない。さっきの千冬姉さんとの会話を思うに、教えてくれたのは千冬姉さんだろうか。

「早く記憶、戻さなきゃな」

昨日千冬姉さんが持ってきてくれたご飯を食べながら交わした会話。それだけでいかに千冬姉さんが弟のことを心配しているかがよく分かった。姉孝行したいと言っても今俺にできる一番の姉孝行は記憶を戻すことだろう。それがわかるからこそ早くもどってほしいと思う。

だがもし戻らなかったら？今のままの生活で千冬姉さんに迷惑をかけないように、この暮らしに慣れていくしかない。

「でも記憶の戻し方なんて分かんねーし。とりあえずは今の生活に慣れないとな」

そうと決まれば今日の昼飯はクラスメイトの誰かと食べに行こう。周りの人と仲良くなるのが生活に慣れる一番の近道だろう。誰と行こうかな。やはり恋人（仮）のシャルロットか、それとも他の人にするか。あの5人以外の人を仲良くなるために誘うってのもありだけど朝誰とも話してないからちょっと気まずいよな。とりあえずはあのメンツの中から誘おう。

そんな考え事をしていたら訓練は終了したらしい。後半はぼーっとしてて見れなかった。自業自得とはいえ残念だ。でも、午前いっぱい使った訓練が終わったので次は飯だ。とりあえず更衣室の近くのとこで待ってて一番最初に来た誰かを誘おうかな。

そう考えてクラスメイトが着替えに戻るのを横目に観客席から歩き出した。

更衣室の近くで待つこと数分。何人かの女子生徒が出てきたが皆こっちを見てもビクッとはするが声をかけてはくれない。自分から声を掛けるのもきついものがあるので黙って出てくる人を確認する。と、そこに見覚えのある顔がやっと現れたので声をかけた。

「箒さん」

「ん？ああ、一夏か。何のようだ、とその前に、箒さんなどと他人行儀な呼び方はやめろ。お前は覚えてないだろうが私たちは幼なじみだったのだ。箒と呼び捨てで構わん」

「そうか。じゃあ箒、一緒に飯食いに行かないか？」

「め、飯だと！？」

そういって箒は2，3歩後ずさり、うつむきだしてしまった

「・・・なぜこのタイミングでなんだ・・・あんな勝負などしなければ・・・」

「ん、なんか言ったか？もしかして先約があったか？」

「なんでもない！あ、いや、だが・・・そうだな。先約があったのだ。悪いが一夏、今回は共にできない。だが次回は！次があれば必ず行くから、その時誘ってくれ！」

「お、おう」

別に気にすることないのに。あまりの剣幕に少し引いてしまう。

「では私は先に行くとしよう。・・・最下位だったせいで私が鈴を止める係になってしまったからな・・・」

「おう、じゃあまた後でな」

よくわからんが鈴と飯を食うのだろうか。だったら混ぜてくれてもいいのにと思ったが断られてしまった以上そんなことは言えない。

まあ次出てきた人を誘えばいいさ。

「あれぇ？おりむー振られちゃったの～？」

箒を見送っていた背中に声がかかる。聞き覚えがない声だなと思いながら振り向いてみると、なんかのほほんとした子がいた。袖が少し余っているのが可愛いな。癒し系というやつだろうか。

「ああそっかぁ、私は布仏本音だよ。まあ好きなように呼んでよおりむー」

「ふむ」

俺が記憶喪失だということを思い出したのだろう、自己紹介してくれた。おりむーというのは俺のあだ名だろうか。

それにしても、好きなように呼んで、か。それはあだ名をつけろということだろうか。ならばいいだろう。名前を聞いたとたん思いついた素晴らしいニックネームがあるのだ。

「ならば君のことは、のほほんさんと呼ぼう！」

のほとけほんね、略すとのほほんだし。第一印象とも一致するし。

われながら素晴らしいあだ名じゃないか。

そう思い彼女の様子を伺うと、なんか固まっていた。

「・・・あれ？もしかしてだめだったか？」

「え？あ、いやいやすごくいいとおもうよぉ！ただ、記憶を無くしてもおりむーはおりむーなんだなあって」

「またそれか」

もう何度目だよ。っとそうじゃない。せっかく話しかけてくれたん

だ。このチャンスを活かさない手はないだろう。これをきっかけに他の皆とも仲良くなれるかもしれないし。

「ところでのほほんさん。俺今飯を一緒に食べる相手を探してるんだけど、よかったら一緒にどう？」

「いいけど、もう二人増えるよ？」

「全然構わない。むしろ望むところだ！」

これで3人のクラスメイトと仲良くなることが出来るだろう。そう思ってのほほんさんと軽く雑談（俺がなくした思い出の話とか。どうやら以前の俺も布仏さんのことをのほほんさんと呼んでいたらしい）しながら待っていると、シャルロットが向こうから駆け寄ってきた。

「一夏！もしかして待っててくれたの？」

「ん？のほほんさんと御飯食べる約束して、のほほんさんの連れを待ってたんだけど。シャルロットがそうなのか？」

「え、もう約束しちゃったの？せっかく勝ったのに・・・」

「なんか買ってきてくれたのか？」

「いやいやそうじゃなくてね！はあ、もう。一夏のばか」

「なんでだよ、急に」

「しらない！・・・ねえねえ布仏さん。僕も一緒に御飯食べていいかなあ」

ぷいっとそっぽを向いてしまったシャルロットだが、ふとのほほんさんにそう尋ねた。

俺的には大歓迎だぞ。もともとシャルロットと一緒に食べようと思ってたし、自分で言わなかったらこっちから誘うつもりだったしな。恋人（仮）なのだから当然だろう。

「もちろんいいよぉ」

そう言ってにこにこ笑顔ののほほんさん。癒されるなあ。

「あ、そうだぁ。二人で学食の席とっておいてよ。私は二人を待ってからいくらさ。ちょっと遅くなるかもだけど、気にせずに食べてて」

名案とばかりに手のひらをポンと合わせてそう切り出したのほほんさん。癒されるなあ。

「え、いいの？」

「うん。席がなくなっちゃっても困るし。気にせず行ってきてよぉ」

もしかして気を使ってくれたのだろうか。だったら厚意に甘えよう。

「よし、じゃあ先に行こうぜ、シャルロット」

「うん。ありがとね、布仏さん」

あとでねー、と手を振るのほほんさんをおいて二人で歩き出す。

「うわぁ！」

「あ、すまん！」

無意識に手を握ってしまった。柔らかい女の子の手だ・・・じゃなくて、たしかに黙って手を握られたらビックリするだろう。救いなのはシャルロットに嫌がる様子はなくてただ顔を赤くしているだけということだ。手が離されてないから嫌がられてないのはわかる。

「もう、一夏。急につながないでよ。びっくりするじゃんか」

「ごめんな。はなしたほうがいいか？」
「・・・わかってて言ってるでしょ？」
「もちろん」

ぷすーっと頬を膨らますシャルロットだが本気で拗ねているわけじゃない。ただのじゃれあいだ。その姿が可愛くて俺も幸せな気分になってしまう。
そんなこんなで学食に到着し（もちろん手はつないだままだ）、俺は日替わり定食を、シャルロットはなんとかってスパゲッティ注文して5人分空いている席に座る。いくら二人きりで浮かれているとは言え任された任務はきちんとこなすのだ。

「なあシャルロット」

食べ始める前に、のほほんさんたちが来る前に、言わなくてはいけないことは言っておく。

「ん、なに？一夏」
「今度の週末、空いてるか？」

落ち着いたらもう一度言って、そう言っていたシャルロット。早めに約束は果たしたい。生活に慣れるために友達が必要なのもそうだが、だからといって恋人がいてはいけないこともあるまい。
だからまずは、この俺の気持ちがシャルロットが言ってたように記憶喪失の弊害なのか、それとも本心なのか。それを見極めたい。

「うん、空いてるよ」
「じゃあさ、」

そのためには、俺がシャルロットのことをよく知らなければなるま

い。そしてなにより、彼女に以前の俺ではなく今の俺を知ってもらわねばなるまい。だとすればやはり、

「日曜日、二人であそびにいかないか？」

デートするのが一番だろう。

屋上のテーブルには向い合って座る箒と鈴の姿があった。

「何であんた達私がいないとこでそういう事するわけ！？ほんと信じらんない！」

「だからすまんと言っているだろう。昼飯をおごってやったんだからそれで許せ」

「そんなんじゃ済まないわよ！一夏とシャルロットが二人きりになって、二人の仲が進展したらどうすんのよ！」

「さすがにそれはないんじゃないか。シャルロットだって記憶喪失の一夏相手にそこまで強く迫らないだろう」

「ちがうのよ、箒。今の一夏とシャルロットの組み合わせはまずいの」

「・・・どういうことだ？」

「あのバカ一夏、記憶喪失になった直後に私の目の前でシャルロットに・・・告白してんのよ」

「なん・・・だと・・・」

即座に箒は本来禁止されているはずのプライベート・チャネルを使ってラウラ、セシリアと交信。合流してすぐさま食堂へと向かったが時既に遅し。無事デートの約束を取り付けた一夏とシャルロットはあとから来たのほほんさん達3人と一緒に何事もなかったかのよ

うに仲良く食事していた。

あらたなにちじょう（後書き）

のほほんさんが全然うまく書けません・・・
のほほんさんってシャルとか他のキャラのことをなんて呼んでたっけ？
逆になんて呼ばれてたっけ？
そのあたりのこと、どなたか教えてください。

でーとはせんそう

「二分作戦だ」
「二手に分かれるのか？一体何の意味がある」
「見つかってもまだ別のグループが監視できるってとこじゃない？」
「ですが、尾行に気づかれて2人しかいなかったら疑われませんこと？」
「たしかに、尾行中に見つかったのならば怪しまれるだろう。だが今回の二分作戦にはもっと別の意味がある」
「もったいぶらずに早く教えろ」
「ずばり、嫁と接触し違和感なく混ざるチームと、嫁を監視するチームだ」
「つまり、どっちか二人は偶然会った風にして接触するってこと？」
「そうだ。以前のようにただ乱入するだけだと教官に目をつけられる可能性がある」
「けれど、友人として普通に出会い、その後の行動を共にするだけならば騒動になる心配はない、ということですわね」
「ということは普段から一緒に行動するような関係の二人組がいいだろうな。そうでなくては怪しまれるかもしれん」
「この中で一番仲がいいのはセシリアと鈴だろうな」
「わたくしたちが？」
「でもセシリアってそういう演技下手くそっぽくない？」
「鈴さん、あなたけんかうってますの？」
「だが箒はもっと下手だろうし、私は尾行のスキルには自信があるから尾行側にいたほうがいいだろう。そういう意味でもお前らが適任だ」
「まあ私的には一夏と合流できる方が嬉しいしね。文句ないわ」
「右に同じですわね」
「ならば明日、ボロは出すなよ？箒もせいぜい私の足を引っ張らな

いよう注意しろ。貴様は熱くなるとすぐ飛び出していくからな」
「だ、誰がそんなことをするか！」
「それぞれの健闘を祈る」

４人は手を重ね頷きあう。
（一夏め、記憶がもどるまで我慢もできんのか。おとなしくしていればいいものを）
（シャルロットさんには悪いですけれど、今の一夏さん相手に滅多なことをされては困りますわ）
（部屋での出来事を喋っちゃったのは謝るけど、人前であんな事するほうが悪いんだからね。あれは挑戦状と受け取るわ。絶対に妨害してやるんだから）
（嫁め・・・私というものがありながら他の女に目移りするとは。矯正してやる必要があるな）

「「「「「絶対に告白なんてさせない！！！」」」」」

棚ボタ状態のシャルロットを許すな。彼女らの心は今ひとつになった。

記憶を失って、ＩＳ訓練はなかったが座学はちゃんとあった。けれど習ったことは知識として覚えているので習った記憶はなくてもなんとなくついていけるのだ。よって学業面には問題なし。
クラスメイトとも先日ののほほんさん達との食事がきっかけで結構皆話しかけてくれるようになり、おかげで名前もだいぶ覚えられた。
その反面誰かと二人きりの状態にはなかなかならず、静かな会話は

あまりできなかったが。でもまあ基本的には生活面も問題なし。だが今はそんなことはどうでもいい。なぜなら、明日はとうとうシャルロットとのデートの日なのだ。この話は人前ではしてないし、シャルロットも内緒にしてくれてると思うので誰かに漏れている可能性は多分ないだろう。となれば必然明日は二人きり。楽しいデートをしてシャルロットへの思いを再確認、そして帰り際には、こ、こ・・・告白するのだ。

「おっし、明日はがんばるぞ！」

そうと決まれば早く寝てしまおう。まだ夜の９時ぐらいだが早いぶんには問題あるまい。明日寝不足という最悪の事態は避けたいからな。

布団に潜り込み目を瞑るが、しかし遠足前の小学生のようにドキドキして快適な睡眠はえられなかった。もちろん遠足に行った記憶なんて消し飛んでしまっているのだが。

「今戻ったぞ、シャルロット」

「あ、おかえりラウラ」

夜風に当たってくると言って部屋を出て行ったルームメイトのラウラが帰ってきた。それをちらりと見はするがシャルロットはすぐに目を足元に戻す。明日着ていく服を選んでいるのだ。

「ずいぶんと熱心に選ぶのだな。明日はなにか用事があるのか？」

もちろんラウラは明日のデートのことを知っている。本人から聞いたわけではないがここ数日の二人の挙動を見れば誰でもわかるだろ

う。ただカマをかけただけだ。

「別にそんな大事ってわけじゃないけど、明日はちょっと出かける用事があるからね。僕のことは気にしなくていいよ」

分かっていたことだがシャルロットは親友である自分にもデートのことを教えるつもりはないらしい。それを確認して少し不愉快になるがそれを決して表には出さない。気づいてることに気づかれるのは不都合なのだ。

「明日は何時頃でかけるんだ？」

「部屋を八時前には出るよ」

「そうか、ならば私のことは放っておいていいぞ。今週は少し疲れたからゆっくりと睡眠を取りたい」

「わかった。じゃあ静かに出てくよ」

シャルロットは服を選び終わり、立ち上がる。

「僕今からシャワー浴びようと思うんだけど、ラウラ先に入る？」

「いや、後でいい。途中だった本の続きが読みたいんでな」

「わかった。じゃあちゃちゃっと行ってくるね」

「ゆっくりで構わん。私のことは気にするな」

シャルロットがシャワールームに入ったのを見計らい、シャルロットのクローゼットをこっそり開ける。そこにかかっているのは普段は見当たらない可愛らしいワンピースタイプの洋服だ。おそらく明日はこれを来ていくのだろう。

「すまんなシャルロット。だがこれは真剣勝負だ」

そう言って手に持っている小さな機械をその服の目立たないところにつけた。そしてさっきまでと変わらないようにクローゼットにしまい、机の上の本を取る。クラリッサから薦められた本だがなかなか面白い。特にこの上条という男は一夏と似た部分があるな、好感が持てる。

「でたよー。ラウラも入っちゃえば？」

「ああ、そうさしてもらう」

こうして土曜日の夜は過ぎていった。

待ち合わせ場所へ向かう俺。今現在８時３０分。待ち合わせ時間は９時なので余裕だろう、ってうお！

「ごめん！待ったかシャルロット！」

「あ、一夏。大丈夫だよ、まだまだ時間前じゃない」

「それでもお前より早く着たかったんだよ」

「じゃあ次は頑張ってね」

そう言って微笑むシャルロットは、当然私服で、その、なんというか・・・

「かわいい・・・」

「うぇ！？何かな急に！」

「す、すまん。つい口からポロッと」

「も、もう！一夏ったら！・・・で、今日はどこにつれてってくれるのかな？」

「シャルロットはどっか行きたい場所あるか？」

「どこでもいいよ、一夏と一緒なら」
またこの子はそんな恥ずかしいセリフを・・・。自分の顔が赤くなるのがわかる。
「じゃ、じゃあ服でも見に行くか、って言おうと思ったけど、そんなかわいい服があるんじゃいらないかな？」
「ううん、行くよ。一夏が選んでくれた服がほしいからね」
「よし、じゃあ行こうぜ」
俺とシャルロットは自然と手をつないでショッピングモールの方向へ歩きだした。

その会話を聞きながら、寮内の一室で密談する二人の姿。
「目標はショッピングモール内の服屋へ行くようだ。かわいらしい服といえばあの店だろう。先回りできるか？」
『十分可能ですがあのお店に女子ふたりというのも味気ないものがありますわね』
「いや、服屋なら十分自然だろう。これでこの後遊園地やら映画館なんかに行かれたらその方がよっぽど不自然だ」
『それもそうですわね。では服屋での接触パターンでいきますわ』
セシリアとのプライベート・チャネルによる交信を切り、ラウラは箒に告げる。
「服屋での行動は作戦通りだろう。しばらくは二人に任せて、私たちは待機だな。合流次第、盗聴機で状況を確認しながら二人に指示

を与えなくては」
「本当に私はただのカモフラージュなのだな・・・」
今回の作戦にあたり、箒の役目はコア・ネットワークによる居場所特定の偽装である。最初は箒とラウラは尾行をしようと思っていたのだが、臨海学校前の時に潜伏モードにしていたのがあだとなり尾行にばれるという失敗をしたことがあった。なので今回はそれをせず、ラウラと箒は寮内で待機するという結論になった。実働部隊の二人も普通に遊びに行ってるという設定なので通常モード。今回はあくまで自然に接触するのだ。
もちろん待機の二人にも盗聴や、実働部隊の二人に指示という仕事があるが、それらは全てラウラがやってくれているので今のところ出番はなし。目標に接触してからは自分たちよりはるかに処世術に長けた鈴とセシリアに対し、自分たちができるアドバイスなどたかが知れているだろう。つまり箒は実質的に何もやることがないのだ。
「私は本当に暴れることしか能のない女だったのか・・・」
「いちいちへこむな。食うことしか能のない女より戦える分お前の方がマシだろう」
「それはフォローになっているのか？」
『ねえ一夏、あれって・・・』
『ああ・・・見なかったことにしようぜ』
と、こんな茶番をしている場合ではない。どうやら向こうにも動きがあったようだ。ラウラは再度盗聴機の方に耳を傾けた。

入っていった店の中でよくわからないことが起こっている。というのはさすがに失礼かもしれないが普段のケンカ友達、という雰囲気

からは想像もできない光景だ。
鈴とセシリアが和気藹々と服を選んでいた。幸いそれに夢中でこっちには気づいてないようだし・・・

「ねえ一夏、あれって・・」
「ああ・・・見なかったことにしようぜ」

そう言って急遽Uターン。悪いが今日は二人きりのデート。鈴だろうと誰だろうと邪魔してほしくないのだ。

「ごめんシャルロット、服は違う店で。そうだな、二人で歩きながら穴場的な店でも探してみるか」
「うん、それも楽しそう。いこっか、一夏」

小声で会話を済まして、足早に立ち去る。もし見つかったら絡まれて楽しいデートどころじゃなくなる気がする。さすがに見つかってしまったら邪険にはできないが見つかる前に立ち去るぐらいは許してくれるだろう。

「ん、どうしたシャルロット。ずいぶん嬉しそうだな」
「ううん別に〜。不満だった所だけ変わってくれて嬉しいとか思ってないよぅ」

隣で満面の笑みのシャルロット。俺的には友達を無視というあまり褒められないことをやったつもりなのだが。まあシャルロットも俺と二人きりがいいと思ってくれてるってことだろう。なんか嬉しいな。

二人が店から出ていくのを横目で確認して、鈴は切れる

「な・ん・で！私たちに声かけないのよあのバカ一夏！」
「以前の一夏さんだったら絶対に話しかけてくれましたわよね」
「なんだかあいつの記憶喪失が私たちにとって悪い方悪い方に影響してる気がするわ」
「そしてシャルロットさんには都合のいい方に、ですわね」
「今のは一夏だったら、私たちに声をかけて、シャルロットが不機嫌になって、それで結局私たち三人にパフェかなんかおごる場面じゃないの！？」
『そこまでにしておけ。とりあえず今は今後の計画をたてなおさなくては』
「そうですわね。今一夏さん達はどちらへ？」

プライベート・チャネルで割り込んできたラウラの言葉で冷静さを取り戻す。悔しがるのは帰ってからで十分だ。今はとりあえず二人の動向を知らなくては。

『どうやら、知り合いと会うのを防ぐために自分たちが普段行かないような店を見て回ってるみたいだ。さすがにここからの合流は厳しいだろうな』
「な！？それではどうすることもできませんわ！」
『だから落ち着け。あいつらだっていつまでも歩きまわっているわけじゃないだろう。昼飯もあるしな。二人がひとつの店に落ち着いたらそこで再度アタックだ』
「しかたないですわね。それまでは待機していますわ」

通信を切り、ふと周囲を見ると他の客がこっちを不審げに見ていることに気づいた。あれだけ騒げば当然だろう。あは、あはは・・・と愛想笑いしながら鈴とセシリアは急いで店から逃げ出した。

その後俺たちはしばらく普段行かなかったような道を通って新しい店を探していった。まあ自分にとってはどの道も初めてなので基本シャルロットのリードだが。
あまりいい店は見つからなかったけど楽しい時間が過ごせたと思う。いい服が見つからなかった代わりと言っては何だが露天商でおそろいのブレスレットを買ってプレゼントしたらすごく喜んでくれた。反応がいちいちかわいいなあもう！
そんなこんなでお昼時、俺にはどこが美味いだとかそういった記憶が全く無いので申し訳ないがシャルロットに一任。

「うーん、どうしようかなー」
「シャルロット、別にそんなに悩まなくてもいいんだぞ。文句なんか言わないから」
「いやね、さっきまでの流れで、行ったことがないようなお店に行こうかなあって」
「ああ、それでもいいな。それなら俺だって意見が言えるし」
「それに、なんかいやな予感もするから」
「嫌な予感？」
「ううん、なんでもない。それじゃあどこのお店が美味しそうか、一緒に探そ？」
「おう！」
前言撤回。一任なんかしない。二人でおいしい店探し、頑張ろう。

「く、なんなのだ！シャルロットの危機回避能力の高さは！」

「もしかして、向こうにこちらのことがバレてるんじゃないか？」
「いや多分バレてはいないだろう。盗聴機に気づいたのならともかく、まだ鈴とセシリアにたまたま出会っただけだ。まあおそらく第六感というやつだろうさ」
「しかし、昼飯にまで知らない店に入られたらもう手のだしようがないぞ」
「ああ。次に行くところにもよるが、続けて買い物ではないだろうな」
「それこそデートの定番どころにでも行くんじゃないか？」
「やはり服屋ではこちらから声をかければよかったか」
「こうなれば最後の手段だ。多少無理矢理でも合流するぞ！」
「ほう、面白そうな話をしているな。私も混ぜてくれないか」
「「！？」」

鍵を閉めていたはずの扉を開け、こちらを睨みつけているのは鬼人、織斑千冬だった。

「きょ、教官！なぜここに！？」
「先日記憶喪失になったかわいそうな弟からメールが来てな。今ラウラが何をしているか調べてくれないか、だそうだ。あいつは私に頼みごとなどほとんどしないからな、たまの頼みぐらい聞いてやろうと思ったわけだ。で、お前らは一体何をやっているんだ？」
「こ、これは・・・そう！“じょしかい”というやつです。箒とおしゃべりしていただけです！そもそも鍵が閉まっていたはずですがどうして入ってこれたのですか？」
「お前の部屋に行ったのだが見当たらなくてな。マスターキーを使って心当たりを総当たりしていただけだ。もっとも、一番最初《箒の部屋》で見つけられたがな」
「そ、そうですか。ではもういいでしょう？」
「だが、女子会か。ならば私も参加しよう。条件は満たしているだ

ろう？私も女だからな」

こちらへ近づいてくる千冬に、二人は顔を見合わせ一瞬のアイコンタクト。

（どうする、箒！）

（どうするもこうするもない、こうなってしまった以上何も出来ないだろう。諦めるしかないか）

二人はガックシと肩を落とし、運命を受け入れた。

「あ、電話だ」

小洒落た食事処を見つけて注文し、シャルロットと談笑していると千冬姉さんから電話がかかってきた。さっき頼んだことの報告だろうか。

シャルロットに断ってから電話にでる。

「もしもし」

『一夏か。ラウラだが、箒と共に馬鹿な事をやろうとしていたようだ。無論止めさせたぞ。お前の行動は邪魔させないさ、気兼ねなく遊んでこい』

「ありがとう千冬姉さん。今度お礼になんかプレゼントするよ」

『ふん、期待しないで待っていよう。じゃあお前もせいぜい楽しんでこい』

「ああ、ほんとにありがとう。それじゃまたあとで」

電話を切って、シャルロットと再度向かい合う。

「ラウラ、なんかしようとしてたんだって」
「ああ、やっぱり。何もなさすぎて逆に怪しいなあと思ってたんだよね」
実はシャルロット、席に案内されると同時にメモ帳を取り出して、
『会話はこのまま続けてさっきまでと同じに』
『ラウラがなにか企んでないか織斑先生に聞けないかな？』
『もちろんメールでね』
と、口での会話を続けながら俺に筆談で頼んできたのだ。それくらいお安い御用と千冬姉さんにメールを送り、その後は普通におしゃべり、そして今に至るというわけだ。
「てことはもう盗聴の心配もないわけだね」
「盗聴！？さすがにそんな事しないだろ？」
「うーん、しないとは思うんだけど、万が一ってこともあるし。現在地が寮なのに何かする方法っていったら盗聴ぐらいしかないかなあって」
ＩＳ学園って恐ろしいところだな・・・。でもまあともかくこれでようやく、
「正真正銘、二人きりになれたね。一夏」
二人きりなのだ。乱入の心配も盗聴の心配もなくなった。午後からが本番。そう――――
――――俺たちのデートはこれからだ！

でーとはせんそう（後書き）

もちろん続きます。
今回はシャルとのデートでいちゃラブしようと思ってたんですが、すいません無理でした。
目下の課題は箒とラウラのかき分けですね。
喋り方が似ている上に一緒に行動させてしまったせいでどっちがどっちかわからないような会話になってしまいました。
精進せねば。

でーとのけっかは

電話を終え、千冬はため息をついた。

「まったくお前らは、騒ぎを起こすなと言ったばかりだろうが」
「ですから、騒ぎを起こそうなどというつもりは・・・」
「だったらその妙な機械はなんだ」
「これは・・・その・・・」

ヘットホンが繋がっている謎の機械（盗聴受信機）を指さすと、ラウラは明らかにうろたえ始めた。

「言えないのか？とりあえずそれは没収だな」
「そんな、せっかく部隊から取り寄せたのに・・・」
「しばらくおとなしくしていろ」

そう言い放って、その機械（盗聴受信機）を持ち去り、千冬は帰っていった。

「まいったな、あれがないとこっちじゃどうしようもないぞ」
「あとは鈴とセシリアが上手く合流してくれることを祈ろう」

「だめですわね。ステルスモードになってしまってますわ」
「どうする？ラウラたちももう何も出来ないし、適当に歩いて本当に偶然会えるのを祈る？」
「そんな事する気力がありませんわ・・・」
「でもいますぐ帰っても織斑先生に叱られるだけだろうしなあ」

「もうどうにでもなれ・・・ですわ」

普段よく行く喫茶店で紅茶を飲んでいた鈴とセシリアはラウラから作戦失敗の報告を受け、思わず机の上に突っ伏してしまった。

「ていうかなんで私たちこんな事やってたんだっけ・・・」

「本当に一夏さんがシャルロットさんのことを好きなんでしたら、私たちに邪魔する権利なんてありませんわよね・・・」

「帰ったらシャルロットに謝らないとね」

「でも報告ぐらいはしてもらいますわ。今までさんざん奪いあってきたんですから、それくらいの権利はあるはずですわ」

「そうね。じゃあもうちょっと気力が回復したら帰りましょ・・・」

このあと二人は紅茶一杯で2時間ほど居座り、テーブルに突っ伏し続けていた。

「うわー、きれー。あ、一夏、こっちの魚は可愛いよ」

「おーたしかになー。お、こっちの魚はなんかムスッとしてて箒みたいだな」

「・・・・・・・」

「え？何でシャルロットがムスッとしてるんだよ」

いや、普通に考えて女の子とデート中に他の女の子の名前を出すのはまずいか。これは俺のミスだ。

「ご、ごめんシャルロット。別に深い意味はなくてだな・・・お、このめちゃくちゃ綺麗な魚なんかシャルロットみたいじゃないか？」

「もう、今回だけだからね。それで誤魔化されてあげるの」

「いやいやそんなんじゃないって。ほらほら見てみ、きれーだなー」
「ほんとにね。何でこんな目立つ色してるんだろう」

シャルロットの機嫌も治ってくれたようだ。よかったよかった。

俺達は今、3ヶ月前にオープンした（シャルロット談）結構大きめの水族館に来ている。ご飯が食べ終わってどこに行こうかという話になったとき、シャルロットが行ってみたいと言ってきたのだ。俺が記憶喪失なせいでこのあたりにどんな店があるのか知らない事を考えて自分から言い出してくれたんだろう。すごいいい子だ・・・。俺は水族館に行った記憶は当然ながらないので見ていて新鮮で楽しいが、それ以上にシャルのはしゃぐ姿を見てるのが楽しい。もちろん嫌な意味じゃないぞ。

「ほら見てあっち、クラゲコーナーだって」
「あー、クラゲってなんか見てて癒されるよなぁ」
「そうだねえ」
「あと、亀とか見てると落ち着くよな」
「それはなんかジジくさいよ、一夏」
「なんですと！そういうシャルロットは何が好きなんだよ」
「僕はペンギンかなあ。ペチペチ歩きなのがかわいいよね」
「ああ、たしかになあ」

そんな感じで俺たちは充実した時間を過ごすことができた。
イルカショーを見に行ってシャルロットはイルカに触ることができたのに俺が触ろうとしたら逃げられたりとか（イルカのはねた水しぶきがかかって俺の服が透けるというハプニングが起きた。普通逆だろ！）。
館内にある喫茶店で魚を模した砂糖菓子がデコレーションされてるケーキを食べたり（伝説の『はい、あーん』までしてしまった。勿

論緊張で味なんかわからなかったさ）。
多分寮内でふてくされているであろうラウラとさっき無視してしまった鈴とセシリア、色々お世話になっている千冬姉さん、ついでに箒や他のクラスメイトのためにおみやげを買って行ったり（最初にシャルロットに提案したら複雑そうな顔をされた。まあ確かにデートでおみやげってのはどうなんだろうな）。
そんなふうに水族館を満喫していると、気づけば寮の門限が近づいていた。

「もうちょっと遊んでたいけど、そろそろ帰ろっか。皆に心配かけちゃうし」
「そうだな。そろそろ行くか」

本来だったらバスを使う距離なのだが、どちらもそんなことは言わなかった。
夕焼けでオレンジ色の空の下、俺とシャルロットは行きよりも少し離れた距離で並んで歩く。手はつないでなかった。心の距離が離れたわけではない。念のため。

「今日はすげえ楽しかった。来てくれてありがとな」
「それはこっちのセリフだよ。すごく楽しかった。さそってくれてありがとね」
「そのお礼と言ってはなんだが、はい、これ」

俺は持っていた買い物袋の中からペンギンのぬいぐるみを取り出してシャルロットに渡す。シャルロットの目を盗んでおみやげやさんで買っておいたのだ。

「え、これって・・・」
「ペンギン好きって言ってただろ？アクセサリはさっき買ったから、

今度は部屋におけるもの、と思ってさ。・・・もしかして子供っぽくて嫌だったか？」
「ううん、すごく嬉しいよ。大切にするね、一夏」
そう言って微笑んだシャルロットは、ふと何かを思い出したかのようにあ、そうだと言って自分の鞄をあさりだした。
「はい、これは一夏に」
そう言って取り出したのはクラゲのぬいぐるみだった。青と白のしましまでデフォルメされたかわいらしいやつ。
「ホントは寮に帰ってから渡そうと思ってたんだけど、今渡したほうがいいよね。男の人にぬいぐるみっていうのもどうかと思ったんだけど、あんまりいいのがわかんなくてさ」
「いやいや、すげえうれしい！ありがとう！ってかいつの間に買ってたんだ？」
「一夏がどっか違う場所見に行った時に、今だ！って。一夏こそいつ買ってたのさ」
「シャルロットが見てない隙にパパっと行って買ってきた」
「ということは、僕たち同時に相手のプレゼントを買ってたのかな」
「そうみたいだな」
顔を見合わせて笑う俺とシャルロット。シャルロットは両手でペンギンのぬいぐるみを抱いて。俺は左手に買い物袋をぶら下げて、右手にクラゲのぬいぐるみを抱いて。
・・・なんかすげえいい雰囲気だ。これは今言っちゃうか？ていうかもう帰り道なんだから今しかねえだろ！
そう思って俺は勇気を振り絞る。

「あのさ、シャルロット」
「なに？」
「俺、記憶喪失になって実はかなり不安だったんだ。自分が誰かもここがどこかもわからなくてさ。でもシャルロットが部屋にきて、いきなり泣き出しちゃって。逆に落ち着いたんだよな。そのかわり、もっと違う気持ちが出てきてさ、この子を守りたいっていうか支えてやりたいっていうか、側にいたいって気持ちが強くなったんだ」
シャルロットは黙って聞いててくれる。俺はもう半ばヤケになりながら思いをぶちまける。
「あの時俺は勘違いで告白したかもしれない。あの時の気持ちはシャルロットの言うとおり刷り込みだったのかもしれない。でも俺が今シャルロットを好きなのは本当だ。今日一日一緒にいてそれがわかった、確信した。だからシャルロット、俺と付き合ってくれ！」
頭は下げない。頼んで付き合うんじゃなくて好き合って付き合うのだと信じているから。
シャルロットは一瞬驚いた表所をしたが、すぐに笑って
「僕でよければ、喜んで」
そう言ってくれた。
こうして、俺とシャルロットは恋人（仮）から正式に恋人になった。
「でも、皆はどうしよう」
「皆って？」
「他の人達になんて説明しよっかなって」
「わざわざ恋人になりましたーなんて報告しなくてもいいんじゃな

いか？」
「そうかな？」
「そうだよ。それになんかそういうのって恥ずかしいだろ」
「一夏は僕と一緒にいるのが恥ずかしいの？」
「いや、そんなわけないだろ。そういう意味じゃなくてだな」
「ふふ、わかってるよ。まあ一夏がそうしたいって言うならそれでいいか。僕もふたりだけの関係っていうのにはちょっと憧れてるしね」
「おう、そうだろそうだろ」

そんな会話をしていると、ＩＳ学園が見えてきた。

「そろそろついちゃうな。んじゃ、改めてこれからもよろしくな、シャルロット」
「こちらこそ、これからもよろしくね、一夏」

さて、寮に到着っと。とりあえず、部屋に戻ってシャワーでも浴びてのんびりするか。そんなことを考えていると向こうからすごい勢いで走ってくる集団が見えた。

「「「「一夏（さん）！！！」」」」

当然というかなんというか、箒、鈴、セシリア、ラウラの４人組だった。彼女たちは俺達の目の前で停止すると、ラウラが俺の服をおもいっきり掴んできた。

「た、ただいま、ラウラ」
「ああおかえり一夏。ところで、今日はいったいどこで何をしていたんだ？」
「い、いや別に特には・・・」

「まあいい。洗いざらい吐いてもらうぞ。ついてこい。シャルロット、お前もだ」
「ははは・・・」
こうなることがわかっていたんだろうシャルロットは苦笑いを浮かべながら、俺はラウラに強制的に連行されながら、シャルロットとラウラの部屋に連れ込まれた。
訂正。今日はまだしばらくのんびりできそうにない。

でーとのけっかは（後書き）

途中のダイジェストの部分も本当はイベントとして書こうと思ってたんですが上手く書けなかったので断念。
あと読み返してて気づいたんですがペンギンと水族館ってなんの関係もないですね。
なんかもう色々とごめんなさい。

あいえすくんれん

目を覚ますと目の前で何人もの女子が寝ていた。何を言ってるかわからないと思うが俺だってわからない。
状況がよくわからなかったが目を覚ますと共に頭が活性化して昨日の出来事が思い出せてきた。

時間はデートから帰ってきた直後にまで遡る。
ラウラに目で脅され、箒に日本刀（！？）で脅され、仕方無しに出来事をほとんどしゃべってしまった。だがシャルロットに告白してオッケーされたということは隠し通すことができた。なぜそこまで、と思うかもしれないが男が一度やると決めたことをこんな簡単に覆すことはできないのだ。
とまあここまでは良かったのだが、機嫌取りにと買ってきたおみやげを渡したところ、そのほとんどが食べ物なわけで、じゃあついでにここでお茶していこうって流れになって、更にはクラスメイトたちの分も一緒に出して呼べる人は呼ぼうという話になった。なぜかはわからん。
そして時刻にして午後９時。最初は俺達６人だったはずのメンバーは総勢５０人という大所帯となり、誰かの部屋じゃあ狭くて無理ということで食堂を使わせてもらい、勿論俺たちのおみやげだけではとても足りないので皆がお菓子を持ち合って、お茶会というより一種のパーティが始まってしまった。
ていうかクラスの人数はるかに超えてるじゃねえかよおおおという俺のツッコミは当然スルー。
かなり騒がしくなっていたはずなのに千冬姉さんはなぜか止めに来ないで、代わりにきた山田先生はのほほんさん達によって巻き込まれて、最終的には酒はないはずなのに酔っ払ったかのように誰かに絡んでは仕事の愚痴をブツブツ言い続けていた。

俺もここまできたら一緒になって楽しむしかないと腹を決めて遊んでいたらいつの間にか寝ていた。ていうか全員寝ていた。なぜわかるかというと目の前でたくさんの女子が眠っているから。参加した全員ではないかもしれないがここにいる全員が寝ていた。俺は普段の習慣で朝早く起きてるから今日も最初に起きれたらしい。

「ていうか、これは・・・ヤバイだろ」

千冬姉さんに見つかったらどんなことを言われるか想像もしたくない。本来注意するはずの山田先生は向こうのテーブルで眠ってるし。早く何とかしないと。

とりあえず左右で俺に寄りかかって寝てるラウラとセシリアを起こすことにした。

ここで今起こして痴漢扱いされないかな？でも起こさないほうがあれだよな。

「ラウラ、セシリア。朝だぞー起きろー」

「ん・・・んん」

ラウラは俺の言葉がうるさかったのか俺の身体から離れて逆方向に丸くなる。逆にセシリアは俺の方に身体を寄せてきた。なぜに！？ていうか胸が当たってます！

一瞬このままでもいいかあと思ったがそれはまずいだろ。最初にセシリアから起こそう。肩に手をかけて軽く揺する。

「セシリアー。朝だぞー」

「ん、なんです・・・の、って・・・一夏さん！？」

突然大声を出すセシリア。その声につられて何人かが目を覚ます。

「何だ・・・騒々しい」
「ふわぁ～。おりむーおはよー」
「え、織斑くんなんで私の部屋に・・・ってここどこ！？」
「あ、そっか私昨日あのまま寝ちゃったんだー！やだー！」

そこからどんどん連鎖していく朝の騒ぎ。おいおいどうすんだよ。救いを求めて山田先生の方を見ると、起きたらしいが何故か固まっていた。いや、なぜかも何も無い。自分の失態に固まっているんだろう。本来怒るはずの立場なのに生徒と一緒になって遊んで、眠って。今千冬姉さんに見つかったら一番怒られるのは俺達生徒じゃなくて山田先生だろう。それがわかるから固まっているのだ。思考停止して逃げているんだろう。
だがこの騒ぎを早々に何とかするためには（一応）先生である山田先生の手を借りるのが最も手っ取り早い。俺は少し離れている山田先生に届くように結構な大声で話しかける。

「山田先生！これどうしますか！」

その声にピクッと反応するとこっちを見てくる。俺は正気に戻って何とかしてという思いを込めて頷く。山田先生も頷き返してくれる。お、立ち上がった。

「皆さん！とりあえずは早急に後片付けです！それがすんだら部屋に戻りすぐ学校の準備をしてください！じゃあ、片付け始め！」

その後の山田先生のテキパキとした指示もあり、一般生徒が食堂を使い出す時間にはなんとか片付けが終わった。その途中で来た食堂のおばちゃんからはついでにテーブルもふていておいてと雑巾が渡されたが、この時間まで後始末ができなかった自分たちが悪い。おとなしく従った。

それにしてもこんな騒ぎになったのに一回も千冬姉さんが顔を出さなかったな。何かあったのだろうか。

そして教室。皆何事もなかったかのように登校してるが寝不足で辛いはずだ。俺も辛い。

「でも昨日は楽しかったね、一夏」

「そうだなシャルロット・・・念のため聞くけどどっちのことを言ってるんだ？」

どっちとは勿論デートのことかその後のパーティのことかである。

「どっちもたのしかったけど、勿論デートのほうが楽しかったよ」

「そうか。それを聞いて安心した」

ここで皆で騒いだほうが楽しかったとか言われたら泣いちゃうかもしれん。にしても千冬姉さん遅いな・・・と、きたきた。

「お前ら！今日も１限からＩＳの訓練だ。とっとと着替えて第一アリーナに向かえ。以上」

うわ、なんか機嫌悪いのか？いつもより荒々しいぞ。

「それと織斑。来い」

名指しされてしまった。まさか今朝の件がバレてるのか？だったら何で俺だけなんだよ！

そう思いながら千冬姉さんと共に廊下に出る。

「織斑、結局記憶はまだ戻っていないのだな？」

「はい。でもだいぶ慣れてきたんで生活には問題ないです」
俺の心配は杞憂だったようだ。てことは今朝のこと知らないのか？
「大有りだ馬鹿者。先週言っただろう。今日までに戻らなければこれから記憶が戻らないことも考え、ＩＳの訓練を再開すると」
「あ、そうでした」
何で忘れてたんだ。これじゃ先週の俺の決意が台無しじゃないか。かっこよく決めたつもりだったのに。
「今日はお前は別メニューだ。基礎からやってもらはなくてはならないからな。専用機持ちから1名お前に付かせる。とりあえずはＩＳスーツに着替えてアリーナへ向かえ」
「わかりました」
言われたとおりにスーツに着替えてアリーナに出る。
「あ～、おりむーも一緒にやるんだね～」
「ようのほほんさん。でも俺は別メニューらしい。まあ何も覚えてないから当然だけど」
「そうなんだぁ。じゃあどうするの？」
「なんか専用機持ちの中から誰かがコーチしてくれるらしいけど」
このクラスではあの４人以外で一番仲の良いのほほんさんと喋りながら千冬姉さんが来るのを待つ。４人もいないし。
「ふぅん。じゃあ今頃向こうは大騒ぎかもねぇ」
「へ？なんで？」
「専用機持ちの誰がコーチするかでもめてるんじゃないかな～？」

「ああなるほど」
「ちなみにおりむーは誰にコーチして欲しい？」
「うーん、シャルロットかな。教えるの上手そうだし、優しく教えてくれそうだし」

彼女だし、とは勿論言わないけれど。
そうこう言っているうちに千冬姉さんと４人がやってきた。今回もクラス別なので鈴はいない。

「織斑、誰に教わりたいか決めろ」
「え、俺が決めていいんですか？」
「ああ。こいつらに任せておいたら一生決まらん」
「じゃあシャルロットで」
「ありがとう一夏！」
「なぜだ、一夏！」
「納得いく説明を求めますわ！」
「お前は私の嫁だろう！なぜ私を選ばん！」
「黙れ馬鹿共！それでは訓練を始める。デュノア、一夏を連れて端の方へ行ってくれ」
「わかりました」

こっちを睨みつけてくる３人が気になるが気づかないふり。端に移動して早速訓練を始める。

「じゃあ一夏、ＩＳを展開しよう。できる？」
「こないだやり方は資料で読んだ。とりあえずやってみる」

頭の中で白式のイメージを思い浮かべる。資料で見た知識しかないが大丈夫だろう。

「いくぞ・・・来い、白式！」

その途端俺の身体が光に包まれる。そして包まれてる僅かな時間で頭の中に流れこんでくる何か。
ＩＳを操作していた記憶は全部消えているはずなのに、ＩＳに包まれた途端ついさっきまでＩＳを操っていたかのように操作方法がわかる。

「頭は忘れてもＩＳは覚えてるってやつかな」

自分の姿を確認する。
純白を基調とし、赤と黒のラインが血管のように全身に分布している、中世の騎士のようなフォルム。これが俺の専用機、白式。

「これが白式か・・・記憶はないはずなのに、懐かしい感じがするな」

そう言って指をグーパーさせながらシャルロットを見ると、なにか驚いた顔をしていた。

「ん？どうしたんだよシャルロット。展開できたからって驚いてるのか？」
「い、いや、そうじゃないよ一夏。そうじゃなくて、その白式、どうしたの？」
「どうしたって、なにが・・・」

そう思い自分の体を見て、違和感に気づく。
赤と黒のラインが血管のように全身に分布している・・・？俺が見た資料ではそんなもの無かったはずだ。

「どうなってんだこりゃ」
ためしに体を動かしてみるが特に問題はない。思ったとおりに動く。
「一応、織斑先生に報告してくるね」
そう言ってシャルロットは自分の専用機（ラファール何とかだった気がする）を展開し千冬姉さんのところへ飛んでいく。ぼーっとしてるとすぐに千冬姉さんがこっちにやってきた。
「織斑、何だその姿は」
「なんだと言われましても、こっちも何がなにやら」
「性能自体は問題ないのか？」
「まだ動いてないんでわからないですけど、多分大丈夫かと」
「そうか。記憶を失ったことで白式の姿が変化したのか・・・？」
そういって少し考えこんで
「まあいい、問題が起きたらすぐに報告しろ。デュノア、予定通り織斑の訓練をしてやれ」
「はい」
そう結論づけた。
千冬姉さんが離れていくのを見送ってから訓練を再開する。
「ほんとに何も異常はないの？」
「多分。少なくとも今のところは何も感じないな」
「じゃあとりあえず訓練にしようか。飛べる？」
「おう。なんでかわかんないけどＩＳに乗った瞬間操り方が理解できたというか、思い出したというか」

「じゃあＩＳについては問題ないの？」
「多分。まあやってみよう」
その後の訓練ではなんの問題もなくＩＳを操ることができた。以前とほとんど変わらないってシャルロットが驚いていた。もちろん俺も驚いている。

「この調子なら放課後のＩＳ訓練も再開して大丈夫そうだね」
「放課後に訓練してるのか？」
「うん。前までは皆が日替わりで一夏と１対１で特訓してたんだよ」
「へえ、でもそれなら大丈夫だな。なんなら今日からでもいいぜ」
「それは許可できない」
「あ、織斑先生。どうしたんですか」
「いやなに、織斑が普通に飛べているのでこっちに戻れと言いに来たんだが、放課後の訓練といったな」
「はい。だめなんですか？」
「その場合教員がいないからな。万が一があったら困る。まあそう長くは待たせん。ＩＳの専門家に聞いて異常がなければそれでいい」
「ＩＳの専門家？」
「まあしばらくは教員の前以外でＩＳは使うなということだ。わかったら他の専用機持ちと混ざれ」
教師にそう言われては逆らえない。俺達は３人と合流すると同じ訓練を始めた。結果は最下位だったがまあ十分じゃないか？

学校が終わり、織斑千冬はひとり考えていた。それはもちろん彼女の大切な弟、織斑一夏の事である。

（あの愚弟がとうとう彼女を作ったか・・・）

千冬はラウラから盗聴受信機を没収した後、つい誘惑に耐え切れずそれを使ってしまった。そして聞いてしまったのだ。一夏がシャルロットに告白し、それが了解されるところを。

（ふん、あいつめ。何が私が幸せになるまで彼女なんか作らないだ。簡単に忘れおって）

彼女が自分で一夏に女を作れと唆していたことや、一夏が忘れた理由が記憶喪失だということ。それはもちろん千冬も理解しているがそれでも心のなかのモヤモヤしたものは晴れない。そのせいで昨日は柄にもなく学校で一人酒なんぞをしてしまったわけだが、そのおかげで一夏や山田先生達の命は助かったのだ。

（と、そんな愚痴を言っている場合じゃないな）

彼女がもともと考えていたことは、一夏の白式のことだ。

（記憶によってＩＳの見た目が変化するのか、それ以外の理由なのか。まあ気は進まんがあいつに聞けばわかるだろう）

そう思い携帯電話を取り出す。電話をかけて１コールも終わらないうちにそれが取られた。

『はいは～い！皆のアイドル、束さんだよ～！ひっさしぶりだねぇちーちゃん！』

電話相手のテンションに思わず切りたくなるがひたすら我慢。要件だけとっとと済まして早く切ろう。

「質問がある」
『なにかななにかな！？なんでもきいてよちーちゃん！』
「実はな、先日一夏が記憶喪失になってしまったのだが、今日白式を起動してみたらその見た目が変化していた。これがどういう事か説明できるか？」
『へぇ・・・いっくんが記憶喪失にねえ。ちなみにいつなったの？』

さっきまでとは束の雰囲気が少し変わったことに気づいた。一夏のことと聞いて真面目に考えてくれたのだろうか。それならばありがたいんだがなと思いながら質問に答える。

「先週の火曜日だ」
『ははあ、なるほどね～。・・・ＩＳと記憶の関係性か。ちょっと実物を見てみないことにはなんとも言えないかなぁ』
「・・・まさかお前」
『うん。ちょうど今忙しくて即行でとは言えないけど、明日にはＩＳ学園にいくよ』
「はあ・・・。一応関係者以外立入禁止なんだがな」
『おいおい、ちーちゃん。ことＩＳにおいて私以上の関係者なんているのかい？だからこそちーちゃんも私に電話してくれたんでしょ？』
「まあこちらから頼んだことだからな、仕方ない。せめて来る前に連絡しろ。後が面倒だ」
『おっけーおっけー！ちーちゃんの頼みなら喜んでさ！』
「それでは任せたぞ。ではな」
『またねー！愛してるよちーちゃ』

言い切る前に切ってやった。頼んでおいてその対応もどうかと思うがあいつに対する場合はこれで正しいのだ。

だがこれでＩＳの一番の専門家が来る。白式の異変の理由も解決してくれるだろう。
だから今の千冬にできることは、束が来たときにいかにして騒ぎを少なくするかを考えることだけである。
その時の面倒を考えて、一瞬束を呼んだのは早計だったかとも思ったが弟のことを頭に思い浮かべその考えを振り払う。

（あいつがは記憶まで無くして、それでもようやく自分の幸せをつかんだんだ。ならば姉としてサポートできることはしておかなくてはな）

そして昨日のアレを思い出し、また少しブルーになりかけたが頬を叩いて自分に気合を入れる。
とりあえず自分にできることをしよう、そう心に決めて机に向かい合う。

この行動がどんな結果につながるのか、この時の千冬には知る由もなかった

あいえすくんれん（後書き）

６話にしてやっとＩＳを登場させることができました。
戦闘シーンもそろそろ入れる予定ですが正直自分のスキルでどこまで書けるのか非常に不安です。
どうしよう・・・。

はじめてのばとる

放課後、俺とシャルロットは上手く二人きりになることができた。
というか部屋でのんびりしていたところにシャルロットが訪ねてきてくれたのだ。

「それで、どうしたんだ？」

お茶をいれながらベットに座っているシャルロットに尋ねる。

「用事が無いと来ちゃダメって言ってる？恋人同士なのになー」
「いやいやそうじゃねえって。用事があるなら聞くし特になくてきてくれたんならうれしいし」

お茶を置いてシャルロットの隣に座る。

「あのぬいぐるみ、ここに置いておくの？」

と、ベットの上に置いてあるクラゲのぬいぐるみをさして言う。

「ああ、宝物だからな。シャルロットはどうしたんだ？ペンギンのやつ」
「僕のは机の上に置いてあるよ。ラウラに聞かれたときごまかすのが大変だったよ」
「ん？それも秘密なのか？」
「まあ一応ね。やるとなったら徹底的に」

そんなふうに穏やかな空気の中で話していると、不意にシャルロットが肩を寄り添わさせてきた。

「僕ね、今すごく幸せだよ。こうして毎日皆といられることが、一夏とこうやって過ごせることが、すごく幸せ。これも一夏のおかげなんだよ。一夏は忘れちゃったんだけどね、僕は一夏に救われたんだ」

そしてシャルロットが語りだしたのは、自分の昔話。
母親が死に、デュノア家に引き取られてからどんな生活だったか。
ＩＳ学園にどんな目的で入ってきたのか。そして一夏の言葉でどれだけ救われたか。
それを語るシャルロットの顔は本当に幸せそうで、俺は想像もつかなかったシャルロットを救ったのは今の俺じゃなくて昔の俺だ。じゃあシャルロットが惹かれたのも昔の俺であって今の俺じゃないんじゃないか・・・？そんなことを考えてしまう。
そんな不安が顔に出ていたのか、シャルロットは続けて言う。

「でもね一夏。昔の一夏が好きだったのはそうだけど、今の一夏だって大好きなんだよ。デートをして好きなのを再確認したって言ってくれたけど、僕だってそうだよ。デートをしてて思ったんだ。一夏がもし前の一夏と違ってたとしても、僕が好きなのは今の一夏なんだって」

優しく俺の頬に手を当てるシャルロット。

「だからそんな顔しないで。僕がこんなことを話したのは不安にさせたいからじゃないよ。ただ知っておいてほしかったんだ。僕が一夏に最初に惹かれた訳を、今の一夏にも」
「シャルロット・・・」
「好きだよ、一夏」

シャルロットが顔をこっちに向けて眼を閉じた。
これはなんだ？行けってことか？・・・恋人同士だし、ためらう理由はないよな。
俺はそっと顔を寄せ、シャルロットにキスをした。
唇が離れてからもしばらく向い合って見つめ合っていたが、ふとシャルロットが我に帰ったかのように真っ赤になり、
「あ、もうこんな時間！そろそろ戻らないと遅くなっちゃうし、ま、また明日ね、一夏！」
そういって部屋の外へかけ出していった。
こうして俺の（記憶上は）ファーストキスは非常に良い感じで終わったのだった。

翌朝、俺が食堂に行こうとすると千冬姉さんに放送で呼ばれたので寮長室へと向かった。
ドアを開けると、うさ耳をつけた謎の女性がいた。
「はろろーんいっくん！お久しぶりだね～！」
「え、と、すいません。俺昔の記憶がなくて・・・どちらさまですか？」
「ガガーン！いっくん、私のことだけは愛の力で覚えてると思ってたのに・・・」
「えぇ！？」
そんな相手がいたのか！？聞いてねえぞ！だとしたらシャルロット

はどうすりゃいいんだよ！

「アホなことを言うな、話が進まん」

「えぇ～。でも割とショックだよ？事前に話を聞いててもいっくんから知らない人扱いされるのはちょっと心に来るものがあるな～」

と、千冬姉さんから助け舟が出された。よかった、冗談だったのか・・・。

「それで、えっとこちらの方は一体・・・？」

「はいはーい、自己紹介しちゃいまーす！この私が、篠ノ之箒の姉にしてＩＳの開発者、篠ノ之束さんでーす！」

はくしゅー、と独り盛り上がる束さん。そうか、話は聞いていたけどこの人がそうなのか。

「一夏、お前の白式の異常をこいつに見せる。とりあえず広いとこに移動するぞ」

そういって歩き始める千冬姉さん。３人しかいないから姉モードなのかな？一夏って呼んでたし。

道中束さんに記憶喪失になった感想だのＩＳに乗ったときの感覚など色々質問された。そしてついたのはメンテナンスルームと名付けられたかなり広い部屋。ＩＳがここでメンテされたりするんだから広いのは当然だろう。

「とりあえずはここを使う。一夏、白式を展開しろ」

「わかりました。来い、白式！」

いちいち叫ばなくてはいけないのかはわからないがとりあえず叫ん

でおく。
そして展開される白式。もちろん昨日と同じく赤と黒のラインがひかれている。

「じゃあこれはお前に任せる。問題ないな？」
「うんうん。私に任せておいてよ、ちーちゃん」
「じゃあ一夏。お前は教室に行け。授業はいつも通りうけろ」

そう言われて時計を確認するとＨＲまで残り１０分を切っていた。
これじゃ今日の朝飯は抜きだな。

今日のＩＳ訓練は１，２組合同模擬戦。最初に一般生徒がアリーナをいくつかに分けて模擬戦を行い、その後専用機持ちの生徒が模擬戦を行う。
最初の専用機持ちの仕事は先生の補佐と生徒への助言だ。
もっとも、今専用機を束さんに預けていて更に実戦経験もない（覚えてない）俺がやれることはないので端っこの方でおとなしくしている。
と、２時間ほどかけて一般生徒の模擬戦全試合が終了した。

「よし、専用機持ち以外は上の観客席へ行け。これから専用機持ちによる模擬戦を始める。織斑、お前も今はＩＳがないんだ。上へ行っていろ」
「わかりまｓ『ちょおおおおおおおっとまったあああああああああ！！』
「「！？」」

何だ、今の声は！？上か！？

上を見ると、上空から落っこちてくるものが・・・あれは、

「にんじん！？」

ちゅどーんと豪快な音を立てて巨大なにんじんの形をした物体が落下してきた。そしてそれが開き、中から顔を出したのは

「姉さん！？」

箒の驚いたような声が上がる。そういえば束さんがきてること言ってなかったな。

「貴様、一体何をしているんだ・・・？」

「いやいや、いっくんが訓練できないんじゃかわいそうと思ってこの束さん自ら白式を届けに来てあげたのさ！」

千冬姉さんのマジギレオーラもなんのその。束さんは俺にウインクしてきた。

「大丈夫！ちゃんとメンテし終わったから！だからちーちゃん、そんな怒らないで、アイアンクローするのやめて」

右腕で頭掴まれて中に浮いてるのに平然としてる・・・。普通にアイアンクローで人を浮かせられる千冬姉さんもすげえし、どっちも恐ろしい。

「というわけで！いっくんに白式を返すから模擬戦に参加させてあげて！そしてついでに私にそれを観戦させて！」

すごいにこやかスマイルで千冬姉さんにそう持ちかける束さん。千

冬姉さんはめんどくさそうに溜息をつくと

「あまりうろちょろするなよ」

諦めたのだろう、そう返した。

「うん、おとなしくちーちゃんのそばにいるよ。じゃあいっくん、こっちに白式あるからおいで」

と、にんじん型のなにかから白式が出てきた。まだラインが残ってるな。

とりあえず乗ってみると、身体が光に包まれた。そしてそれが消えると白式の姿が資料で見た真っ白なものに戻った。おおー、なんて皆が驚嘆の声をあげているが自分はそれどころではない。

なにか違和感がある。最初に白式に乗ったときに違和感を感じなかったのは記憶がなかったからか？そしてその白式を普通だと思っていたから通常の白式に乗ったときに違和感があるのか？そう思ったがどうしてもこの服を後ろ前逆に来たときのような違和感が気になる。束さんが問題ないというから問題ないんだろうが少し不安になる。

「一夏さん？顔色がすぐれないようですけれど大丈夫ですか？」

いつの間にそばに来たのだろう、セシリアに心配されてしまった。

「ああ、大丈夫だよ、ありがとう。束さんもありがとうございます。これで模擬戦に参加できる。今まで見てるだけで暇だったんだ」

そう虚勢をはることにした。

「よし、では最初に篠ノ之と凰が模擬戦を行う。他の者はピットに引っ込め」
「ちーちゃんがんばってねー！」
束さんがそう声をかけるが箒はちらっと見て無愛想に頷くだけだ。仲が悪いんだろうか。とりあえずピットにひっこんで二人の模擬戦を観戦しよう。

その試合は鈴の勝利で終わった。
最初は赤椿の性能を活かして箒が優勢に攻めていたが、エネルギーが減っていくとその勢いも衰え、代わりに鈴が優位になっていった。あの箒の二本の刀による連撃を上手くいなし、回避が難しいだろう攻撃も上手く致命傷を避け、箒のエネルギー不足による勢いの減衰を見るやいなや即座に反撃に打って変わった判断力は驚くべきものだ。鈴もそれなりにダメージを受けていたが、快勝と言えるだろう。
「次、織斑とデュノア、行け」
そしてどうやら次は俺の番らしい。シャルロットと共にアリーナへ出て、互いに向かい合う。
「初めての戦闘だよね？大丈夫？」
「ああ。まあ身体が覚えてるってやつだ。大丈夫だろ」
軽く言葉を交わし、試合が始まった。
俺の武器は雪片弐型という刀一本だけだ。だからとりあえず接近しないと話にならないんだが・・・

「くそっ、近づけねえ！」

一定の距離を保って射撃武器でちくちくとシールドエネルギーが削られていく。俺の単一仕様能力である零落白夜はシールドエネルギーを使って攻撃する技だから削られると発動した瞬間に負けになることもあるらしい。多分シャルロットもそれを狙っているんだろう。弾切れを見計らって接近しようとしても即座に別の武器に持ち変えられていて隙が生まれない。

このままシールドエネルギーが削られていくと勝ち目がなくなってしまう。だが零落白夜は一撃必殺。一発当てればいいんだ。だったらここは覚悟を決めて瞬時加速を使いダメージ覚悟で突っ込んで一撃決めるほうが得策だ。

相手の弾切れを待って・・・今だ！

一瞬弾幕が途絶えたのをみて瞬時加速を発動する。一気に距離を詰めて、これなら行ける！

「いっけええええ、零落白夜あああああああ！」

が、

「そろそろ来ると思ってたよ」

俺の攻撃はシャルロットが展開した物理シールドによって止められてしまった。

嘘だろ！？何の前触れもなく使ったはずの瞬時加速をよんでたってのかよ！

そしてそのシールドの裏から取り出されたそれを確認する。巨大なパイルバンカー、灰色の鱗殻。あれを食らったら終わりだ、やばい。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

攻撃直後の硬直で固まっている身体を奮い立たせる。
瞬時加速を使って退避するしかない。だが普通に下がっただけじゃ何の解決にもならない。だから・・・

「回り込めええええええええ！」

瞬時加速を使って、曲がる。それも円を描くように。

「え！？」

シャルロットの驚く声が聞こえる。そりゃそうだろう、普通直線にしか進めないはずの瞬時加速を使って自分の後ろに回り込まれたんだから。自分でも驚いてる。だがこれで・・・

「終わりだあああ！！」

零落白夜でシャルロットの後ろ姿を切り伏せる。しかし、シールドエネルギーをかなり減らすことができたが、まだ終わってなかった。自分のシールドエネルギーが尽きかけていて、途中で強制的に零落白夜が解除されたのだ。自滅しないようにすむ機能だろうか、ありがたい。が、ここで決着をつけられなかったのは痛いな。俺の残りシールドエネルギーは1しかないからな。1って・・・。
だがそうとは知らないシャルロットは反撃をせずに離れてくれた。

「すごいね、今のどうやったの？」
「わかんねえ。俺も無我夢中だったから」

向かい合ったシャルロットが聞いてくる。さっきの瞬時加速による回り込みのことだろう。

「でも今のチャンスを逃しちゃったのは痛いね。もう油断しないよ」
たしかに。だが俺も男としての意地がある。諦めるわけには行かない。
覚悟を決めて突撃する。

が

俺とシャルロットの間に突如何かが落下してきて割り込んできた。
「な、なに！？」
「なんだ！？」
そこに現れたそれは、蜘蛛のような姿をしたＩＳだった。

はじめてのばとる（後書き）

束さんはキャラが全然安定しませんが書いていて一番楽しいですね。筆が乗ります。
逆に戦闘シーンは書くのが辛いです。でも次回も戦闘の続きです。

次回以降更新のペースが少し落ちるかもしれません。ご了承ください。

あらくねしゅうらい

一夏とシャルロットの試合を見ながら、千冬は尋ねる。

「あの瞬時加速と零落白夜の強制終了はお前の仕業か？」

「そうだよ。面白いものを見せてくれたお礼にちょっと便利にしてあげたんだ」

そういって画面の中で向き合っている二人を見る束。

「でももうそろそろ決着だね。零落白夜が停止したってことはエネルギーが殆ど無いだろうし」

そう呟いた瞬間、突如上空から何かが落下してきた。

「なんだあれは！？」

「あっちゃー、もしかしてつけられてたのかな・・・」

驚く千冬と対照的に冷静な束。

「お前、あれがなにかわかるのか！？」

「見ての通りＩＳでしょ。私って追われてるからさ。はぁ、バレないように用心したつもりなんだけどなあ・・・やっぱりにんじん型飛行船で飛んでいって白式を届けたのがまずかったのかなあ」

間違い無くそれだと思いながら、内心の怒りを今は押さえてアリーナの二人に連絡する。

「非常事態だ。お前らは今すぐそこから退避。すぐに教員で制圧に

向かう」
『そうしたいのはやまやまですけど・・・』
『こいつ、生徒のほうを狙ってやがる！』
画面を見てみれば、たしかにその蜘蛛のようなＩＳは足についている銃口を観客席にいる生徒たちの方へ向けていた。
「くそっ！少し時間を稼げ！」
『『了解！』』
そう言って後で待機している専用機持ち４人にも声をかけようとしたが、いない。
「もう皆いっちゃったよ」
「あいつらめ、独断先行だぞ」
そして緊急信号を出し、少し一息ついて考える。
（あの蜘蛛形のＩＳ、そういえば報告があったものと同一か？）
学園祭の時に一夏を襲ったＩＳ。あの時は生徒会長がいたからなんとかなったが、１年だけでは分が悪いかもしれない。しかも試合の直後でボーデヴィッヒとオルコット以外のＩＳはダメージを受けている。
ＩＳがない今の千冬は、祈るように画面を見続けることしかできなかった。

「シャルロット！シールドエネルギーは後どれくらいだ！？」

「あんまりない！一夏は？」
「1だ」
「1！？なにそれ、聞いたことないよ！」
「とにかく、俺は零落白夜を使えないから、そのつもりで頼む」
「ていうか、それしかないなら下がってなよ」
「そういうわけにもいかねえだろ！いくぞ！」

敵は足についてる銃口を客席の方に向けている。一刻も早く制圧しないと。
客席では一般生徒がパニックを起こしている。あれだとすぐには避難できないだろう。
シャルロットに攻撃を誘導してもらい俺はヒットアンドアウェイで攻撃を食らわないように攻める。
取合えずセシリアが来るまでの数分はこれ大丈夫だろう。
そう安心した矢先、

「え！なにこれ！？」

突然敵ＩＳの中心部からワイヤーのようなものが出てきてシャルロットのＩＳの手足を縛り付けた。

「あんなもんまで付いてんのかよ！」

かなりの力らしくシャルロットは動くことができそうもない。しかも８門の銃口は全てシャルロットの方へ向けられている。

「くそ！間に合えええええ！」

この距離だと敵に近づいて射撃を止めさせることもできないし、ワイヤーを切ってシャルロットを開放できるという保証もない。だが、

あの蜘蛛野郎とシャルロットの間に滑りこむくらいはできる。
そう思ったときには身体が動いていた。シャルロットの方がシールドエネルギーがあるから耐えられるとか、自分のシールドエネルギーが1しかなかったこととか、そんなことは忘れていた。

「ぐっ・・・があ！！」

8門の銃口から繰り出される攻撃をまともに受けて、吹き飛ばされる。痛い。ＩＳの防御機能を貫通しまくってる。
身体がまともに動かないので目を動かしてシャルロットの無事を確認する。

よかった、無事だ。

そう安心した途端、体から力が抜けて、そのまま意識を失った。
最後に、シャルロットの叫び声が聞こえた気がする。

「一夏ああああああああ！！！」

目の前で自分をかばって攻撃を受けた一夏を見て、シャルロットは叫んだ。シールドエネルギーが尽きかけていたんだ。ＩＳの保護機能がまともに働くかわからないし、もしかしたら命に関わるかもしれない。

「よくも・・・よくも一夏をおおおおおおおお！」

よくも一夏を。
殺す殺す殺す殺す殺す殺すころす殺すコロスころすコロスコロ

スころす殺す！！
スクラップにしてぼろぼろにしてぐちゃぐちゃにして跡形もなく消し去ってやる！
修復不可能になるまで傷めつけて中の人間もバラバラにして元の形が分からなくして

自分の怒りで『何か』が起こりそうになった瞬間、

「あ、え？」

目の前で自分を縛っていたワイヤーが切断され、見覚えのある機体が乱入してきた。

「あかつばき？」
「大丈夫かシャルロット！」

それは箒の赤椿だった。持っている刀でワイヤーを切断してくれたらしい。

「一夏は鈴が運んでいる。心配は後だ、まずは奴を倒すぞ！」
「あ、うん」

気がつけばセシリアとラウラは既にあのＩＳと戦っている。
それを見ながらもシャルロットは呆然とするしかなかった。

自分は今、何を考えていたんだ？

その疑問がシャルロットを縛り付ける。
たしかにあのＩＳを止めるのが正解だが、今箒が止めに来てくれなかったら、多分あのＩＳの中の人まで殺していたんじゃないか？

現実的には自分は縛られて身動きできなかったわけだけれど、きっと『何か』が起きてその状態を脱し、即あいつを殺していたんじゃないか？
そんなことしちゃいけないのに、そんな事するつもりじゃないのに、殺していただろう。

自分が怖い。

「待て貴様！逃げるなっ！」

ラウラの叫び声が聞こえる。どうやら敵は撤退したらしい。
３人は敵を追いかけていくが、しかしシャルロットはそれでも動けなかった。

「結局相手の目的も突然撤退した理由もわからずじまいか」

今回学園に強襲したＩＳのデータを見ながら千冬はつぶやく。

「やはりあのＩＳはアメリカから奪われたアラクネで間違いないそうです。ただアメリカにあった時と多少装備に違いがあるみたいです。向こうにも技術者がいるんでしょうね」

同じくデータを見ながら山田が千冬に報告する。
アラクネ、アメリカで開発された第二世代型。学園祭の時にもＩＳ学園に侵入したが生徒会長更識楯無により撃退されている。報告によるとその時の操縦者は我が強く人を挑発するような言動の人物だと聞いたが今回は一言も発していない。別人なのだろうか。

「まあお前らも逃げられたことはあまり気にするな。たいした被害が出ていないからよしとしよう」

側で待機している5人に言う。

オルコットとボーデヴィッヒは過去にもあのＩＳを逃がしてしまったことがある。なので今回は他の人以上に落ち込んでいた。デュノアも目の前で恋人が撃たれいまだに意識を取り戻していない事でかなり沈んでいた。篠ノ之と凰は3人ほどではないがそれでも普段の威勢のよさは欠片も見えない。

とにかく今のこいつらに必要なのは休息だろう。

「とりあえずお前らの仕事はもうない。あとは大人の仕事だ。今日はもう休め」

先程の騒ぎで授業は中止、午後からは各自学園内で待機としている。寮内でおとなしく休ませていればこいつらも元に戻るだろう。

そう考えた千冬だが、それは甘かった。彼女たちが挨拶をして集まっていた部屋から出て向かう先は寮の部屋ではなく校内病院。

自分の怪我一つない疲れているだけの身体なんてどうでもいい。確かに落ち込んではいたが落ち込んでるだけでは何も解決しない。今の力で駄目なら更に努力して力を増やせばいい。そう思えるだけのメンタルを彼女たちは既に持っていた。

だが一夏のことだけは別だ。

自分の好きな男が怪我をし意識を失って、それでも平気な女なんていない。

だから織斑一夏の病室を訪れ、意識を失っている一夏を見て、胸が張り裂けそうになった。

「・・・ごめんね。ごめんね、一夏。ごめん・・・ごめんなさい」

「・・・別にお前のせいではない。あのＩＳがやったのだ」

「ううん、僕のせいだよ・・・あそこであんな攻撃に引っかからなければ」
「そんなことを嘆いても仕方ないだろう。そもそも、私たちがもう少し早く助けに行ければこんなことには」
どん底に沈んでしまった彼女たちの空気は、手を叩いて声を上げるセシリアによって打ち消された。
「やめましょうみなさん！こんなジメジメしてる姿、一夏さんに見られたら笑われてしまいますわ。それにシャルロットさん、一夏さんに言うならごめんなさいじゃなくてありがとうではなくて？」
そう言って気丈に振る舞うセシリアに４人も感化されていった。
「そう、だね。うん。一夏が起きたら助けてくれてありがとう、ってお礼言わなきゃね」
「ああ、あそこで自らの事を考えずに人を守ることを優先するとは、さすがは私の嫁だな」
「だから、一夏がいつあんたの嫁になったのよ！」
「それにしても、明日から訓練メニューを倍にした方がいいようだな」
「そうですわね。今回のこれはさすがに悔しいですわ」
医者から一夏の命には別状がないことを聞いて、しばらくたってから病室をでた頃には元通りとは言わないまでも以前までの笑顔を幾らかは取り戻せていた。

あらくねしゅうらい（後書き）

アラクネの性能が原作と違うかもしれませんが、山田先生の「多少装備に違いがある」のセリフで納得してください。向こうの技術者が変えたんです、多分。

記憶上書

俺が目を覚ましたとき、目の前には真っ白な天井があった。
ここは・・・病院？
何で俺こんなところにいるんだ？

ベットに寝かされていた上体を起こして周囲を確認する。うん、普通の病室だ。
とりあえず状況を整理しよう。昨日はちょっと熱っぽくて、部屋で普通に寝たはずだよな。もしかして俺が寝た後みんなで病院に連れてきてくれたのか？そんなひどくなかったと思うけど。
そんなふうに考えていると、病室のドアが開いた。

「あ！一夏！目を覚ましてくれれたんだ！よかった・・・」

そういって目に涙を浮かべるのはシャルロット・デュノア。ていうか泣くことないだろ。

「ああシャルおはよう。もしかして俺、寝てる間に熱が上がってたのか？」

だとしたら病院に運んでくれたことに感謝しなきゃな。そう思って尋ねると、シャルは一転驚いた表情に変わっていた。

「おい、どうしたんだよ。あ、自分で熱が上がったことに気づいてなかったからか？いや、苦しいとそういうのも覚えてないんだって、多分」
「いや一夏、熱って何の・・・それに、なんで僕のことシャルって・・・」

「え？だってシャルはシャルだろ。そうあだな付けたら喜んでくれたじゃないか」
「いや、でも、だってそれは・・・」

――それは記憶を失う前のことではなかったか。だってあれから一夏は自分のことをずっとシャルロットって呼んでたから。ということは考えられる可能性はただ一つ。
記憶が戻った。
でも、ということはもしかして――

「ねえ、一夏・・・昨日のこと覚えて、ないの？」
「昨日？覚えてるぞ。ちょっと体調崩しちゃってて、あ、でも何で病院にいるのかは覚えてねーや」
「一夏、じゃあ・・・日曜日のこと、覚えてる？」
「日曜日は特に変わったことはなかったと思うけど。寝てたら箒がきて、訓練に付き合わされて、途中でラウラとか鈴もきて」
「そっか・・・うん、わかった。じゃあ織斑先生を呼んでくるね。ちょっとまってて」

そういってシャルは部屋を出て行く。

「あいつ、何があったんだ？」

なんか様子がおかしいし、しかも泣いてなかったか？
その涙が最初に自分を見たときの涙とまったく別の意味の涙だということをなんとなく理解したときにはもうシャルは走り去ってしまった後だった。

「あとで話聞いてみるか。力になれるかもしれないし」

（なんで今さら）

記憶が戻ったのはいいけれど、先週のことをすべて忘れてしまっているなんて・・・こんなこと全然嬉しくない。

（なんで今さら）

日曜と月曜で一夏と向きあって、僕は今の一夏を好きになって、一夏は僕を好きで、それでよかったのに。
記憶を無くしても頑張る一夏とそれを支える僕でよかったのに。
なんでこんなことに。

（今さら記憶なんて、戻ってほしくなかった）

原因不明の記憶喪失だからいつ戻ってもおかしくないって言われていたけれど、こんなのあんまりだ。なんで今さら記憶なんて、

「デュノア？あいつのところに行ったんじゃなかったのか？」
「織斑先生・・・」

前から歩いてきた織斑先生に声をかけられた。そうだ、どうしたら良いか相談してみようかな・・・。

「織斑先生、あの、一夏が目を覚ましていて、それで、記憶も戻ってました」
「なんだと？ふむ、それはよかった。私も少し顔を出してくる。お前は他の連中に教えてやれ。皆喜ぶぞ。ああ、だがあんまりはしゃぐなよ、うるさいからな」

そう言ってさっきより若干足早に去っていく織斑先生。
よかった？・・・ああ、そうか。よかったんだ。無くしてた記憶が戻ったんだから、喜ぶべきことなんだ。なのに、全然喜べない。
僕にとっては一夏の記憶より一夏が弱っているときに浸け込んで得たような関係のほうが大事だったんだ。

「なんて嫌なやつなんだ、僕は」

三回目の涙が出てきた。最初は目を覚ましてたことが嬉しくて。2回目は一夏が先週のことを忘れてしまっていたのが悲しくて。そして今は一夏の回復を祝福できない自分が嫌で。
少し落ち着いてからじゃないとまともに皆に会えない、ましてや一夏になんて。少し一人になれる場所にいよう。この時間ならどこがいいかな・・・。

シャルが出ていって数分たった。ここにいても仕方ないし部屋に戻ろうかな、でも千冬姉を呼んで来るって言ってたしな。
そんなふうに迷ってると本人がやってきてくれた。

「一夏」

と、珍しく少々緊張してるかのように声をかけてきた。

「おはよう、千冬姉」
「む、そう呼ぶということは記憶が戻ったというのは本当らしいな」
「それシャルも言ってたな。何の話だよ」
「なんだ、昨日までのことを覚えていないのか。・・・ということ

は日曜日のこともか、なるほど、デュノアの様子がおかしかったのはこれか」

後半がよく聞こえなかったけど、昨日までのことってなんだ？まさか俺は記憶喪失というやつなのだろうか。そんなばかな。

「千冬姉、まさか俺、記憶喪失なのか？」

「逆だ。お前は昨日まで記憶喪失だったんだ、一週間ほどな。そして今、記憶が戻ったお前はなぜかその間の記憶がないようだな」

千冬姉は先週あったらしい出来事を説明してくれた。俺が記憶喪失になって、でもＩＳは操縦できて、そしたら学園祭の時のＩＳが襲ってきて、とかいうにわかには信じがたい話だった。まあ千冬姉がこんな嘘つくわけないからな、本当だろ。

「まあ大体わかったけど、結局日曜日のことってなんだったんだ？」

「私に聞くな。その件において私は第三者だからな。必要があれば当事者が話してくれるだろう」

とまあ日曜日のことについては教えてくれなかった。

その後、千冬姉は仕事があるということで出て行ったが俺は異常がないかを精密検査された。

そんなこんなで一時間後、異常がないなら学校に行けとのことで俺は教室へ向かった。

体感的にはつい昨日行ったばかりだけど実は一週間ぶりなのか。いや、一応学校にはいってるからそうじゃないのか？でもその記憶もないしなあ。

と、教室についた。今日は座学だけらしいからみんな真面目に授業うけてるな。中学の時に遅刻したことがあったけどその時の気分だ。入りづらい。まあ入るしかないんだけど。

「おはよーございまーす」
「あ、織斑君。もう起きて大丈夫なんですか？」
「もう全然問題ないです」
「そうですか、でもあんまり無理はしないでくださいね」

山田先生が授業を中断して心配してくれる。まあつったってもしょうがないから席に座ろう。ってあれ？シャルがいないな。
それから１０分ほどで授業が終わり休み時間になった途端、箒たちが突っ込んできた。まあくるだろうとは思ってた。

「一夏！もう身体は大丈夫なのか！？」
「一夏さん。無事でよかったですわ。で、シャルロットさんとは何をしていらしたの？ずいぶん遅かったですけれど」
「というか、シャルロットはどこに行ったんだ？」
「身体はもう平気だぞ、医者からのお墨付きだ。検査してたから遅くなったんだよ。んでシャルがどこに行ったかは俺が聞きたいぐらいだ」

３人の質問に律儀に答える。ていうかなんでシャルと一緒にいると思ってたんだ？

「実は昨日、明日の朝見舞いに行くのはいいとしても、あまり大勢で行くのは迷惑になるから、誰か代表一人が行こうという話になったのだ」
「もちろん、私が行くつもりでしたのですけれど・・・」
「ふざけるな、嫁の見舞いに行くのは夫の勤めだ」
「と。まあこのように話が進まなかったのでゲームでもして決めようということになってな。それで勝ったのがシャルロットだったから見舞いに行ったと思うのだが。こなかったか？」

「きたけど、意識と記憶が戻ったことを皆に伝えに行くって出ていったぞ」
「ふむ、意識と記憶が・・・記憶が！？」
「どういう事ですの一夏さん！」
「記憶が戻ったのか！？」

すっごい食いつかれた。あれ、シャルは伝えに行ったんじゃないのか？ていうか学校にも来てないし。なにかあったのかな。
泣いてたのも気になるし、行くか。
俺は立ち上がる。

「ちょっとシャルを探してくる。話はそれからだ」
「あいつは欠席だ。寮の部屋で休んでいる。だから席に付け」
「げぇ！千冬姉！」
「織斑先生と呼べ。いいから座れ、授業だ。目の前でさぼりは見過ごせんぞ」

しょうがないので座る。
だけど学校に連絡してるなら問題ないかな。あとで部屋に見舞いに行くか。

そして授業が終わり、昼休みになると箒、セシリア、ラウラ、ついでに2組からきた鈴に詰め寄られて事情を説明することになった。
俺が説明して欲しいくらいなんだけどな。

記憶上書（後書き）

ＩＳ７巻読みました。
簪、いいキャラでしたね。
登場させてみたいけどそのためには展開を変更しないと・・・。
出せたら出します。

下準備中

人気のない倉庫の隅でうずくまる。
先日の思い出を一夏がなくしてしまったことが悲しくて。
一夏の記憶が戻ったことを喜べない自分が悲しくて。
あれからどれくらい時間がたっただろうか。
いまだに自分の心は一夏が先日までのことを忘れてしまったことを嘆いている。
本来の一夏に不満があるわけじゃない。
でも、覚えてて欲しかった。
もし、今の一夏の記憶に、先週までの記憶を足せるなら。
そんなできもしないことを考えながらただただ無駄に時間を過ごす。

「やあそこの金髪。何を悩んでいるんだい？」

突然の声に驚いて顔を上げる。扉が開いた音も誰かが近づいてきた気配もなかったのに。
そこにいたのはあの篠ノ之博士だった。こんな寂れた倉庫に何で彼女が？

「お姉さんに相談してみなよ、なにか力になれるかもしれないよ」

なにせ私は天才だから。
そう言って笑う彼女が僕には救いの女神のように見えた。
彼女なら、あの天才篠ノ之束なら、もしかしたら何かできるかもしれない。
だから僕は彼女に打ち明けた。一夏の現状を、僕の心情を。
それをすべて聴き終えて、彼女は一層笑みを深くした。

「なるほどなるほど、いっくんの今の記憶に無くした分の記憶を植えつけたいわけだ」
「できるんですか？」
「できるよ。できるけど、そのためには君の専用機が必要だ」

作業は1時間ほどで終わった。と言っても篠ノ之博士特製のパッケージをインストールするだけだったが。

「はい、次いっくんと戦うときにこの装備で行けば大丈夫だよ」

博士の説明してくれたことは僕には半分も理解できなかった。
ＩＳのコアにあるらしいバックアップを利用して記憶を戻すために相互意識干渉を起こす必要があり、そのための装備がこれなんだそうだ。
１２本のワイヤー（彼女はＣＨケーブルと呼んでいた）は触れた相手の波長を読み取り、じぶんの波長を変え、強制的に相互意識干渉を起こす。
相互意識干渉で記憶が戻る理由も説明してくれたがそっちは完全に理解できなかった。

「じゃあ私はこれで行くけど、今回のことはあんまり人には言わないでよ？勝手に人のＩＳをいじったのがバレたらちーちゃんに怒られちゃうからさ」

そう言い残して篠ノ之博士は去っていった。
あの篠ノ之博士の特製パッケージ・・・世界中の人が欲しがる逸品だろうな。これは言われるまでもなく人には言わないほうがいいかも。でも、これがあれば

「一夏と昨日までの関係に、戻れる」

別に忘れてることを思い出させるだけだから悪いことじゃない。
それに篠ノ之博士が一夏に害を為すこともないだろうし。
後は一夏と試合ができるようにするだけだ。
希望ができたおかげでだいぶ心が落ち着いてきた。もう休むって言っちゃったから学校にはいけないから部屋で大人しくしてよう。
僕は高ぶっている心を落ち着けてから倉庫を後にした。

俺はシャルの部屋の前にいた。お見舞いというやつだ。
ラウラはアリーナの方で訓練中なのでこの中はシャルだけだろう。
体調を崩してるなら助けがあったほうがいいだろうし手伝えることがあったら手伝おう。そう思って扉をノック。

「シャルー、起きてるかー？」
「あ、一夏？入っていいよ」

中からは普通にシャルの声。何だ、元気そうじゃないか。
部屋に入るとジャージ姿のシャルが本を読んでいた。

「おいシャル、学校休んだってのに元気そうじゃんか」
「あー、さっきまでちょっと熱っぽかったんだけど、もう治っちゃった。一夏は大丈夫？記憶が戻ったんだよね、なにか違和感とかない？」
「まあ一週間の記憶がないってのは気持ち悪いけどな。教室でも皆に驚かれたぞ。ていうか、皆に教えといてくれればよかったのに」
「ごめんね、部屋出てすぐに気分が悪くなっちゃって」
「ならしょうがないな。にしても今朝はどうしたんだ？」

元気そうなので本題に入る。今はいつも通りだけど無理してるのかもしれないし、俺にできるのなら力を貸したい。

「今朝って？」

「ほら、泣いてたじゃないか。なんか困ってることがあるなら言ってくれよ。力になれるかもしれないぜ」

「あー、あれね」

苦笑いを浮かべるシャル。あれ、ほんとに何でもなさそうだな。

「別にたいしたことじゃないよ。記憶が戻ってよかったとか、もっと強くならなきゃとか、そんなことを考えてただけだよ」

「そうだったのか？」

「そうそう。大丈夫だよ、何か困ったことがあったら一夏に話すから」

「おう、そうしてくれ」

「あ、そうだ。代わりと言ってはなんだけど今度模擬戦しようよ。昨日は途中で妨害が入っちゃって、決着がつかなかったからさ」

「あ、そうか。シャルと戦ってる時に乱入されたっていってたな。まあ試合ぐらいならいつでもいいぜ。と、言いたいところだけどしばらくは無理だな。わりい」

「え、なんで？」

「白式のダメージレベルがCを超えてるんだってさ。だからしばらくはＩＳ展開はしちゃ駄目って言われた」

「ああ、そっか・・・」

すごいがっかりされた。よっぽど白黒つけたかったんだろうな。でもあの負けん気の強いセシリアと鈴が大会参加をおとなしく諦めるぐらいの重要事項なのだ。おいそれと破るわけにもいかないだろ

う。それにシャル自身に教わったことだしな。

「じゃあどうしようもないね。でも、直ったら試合しようね」

「おう。でもしばらく訓練はできそうもないし、明日からどうすっかな」

「じゃ、じゃあ一緒にあそびにいかない？」

「あー、それもいいな。皆で放課後にどっか行くのも」

「そうだよね・・・みんなで、だよね・・・一夏のばか」

「ん？なんかいったか？」

「ななななんでもないよ！」

そんなこんなで数十分後、あまり長居しても迷惑だろうと思い部屋に戻ることにした。今のとこは元気そうだけどまた体調悪くさせちゃったら悪いしな。

自分の部屋につき、扉を開け――――閉める。

・・・？

もう一度開ける。

「おかえりなさい、一夏くん。久しぶりね」

「・・・ただいまです」

何故か俺の部屋でリラックスしてる我らが生徒会長更識楯無さんが柔和に微笑みながら挨拶してくれた。いや、なんでいるんだよ。

「いやー、一夏くんの記憶喪失が直ったと聞いて居ても立ってもいられなくてね。こうして駆けつけたわけよ」

そう言って広げた扇子には『快気祝』の文字。それってむしろ俺がするんじゃないの？まさか暗になんかよこせとでもいってるんだろ

うか。

「心配をかけまして申し訳ありません。でももう大丈夫ですよ。楯無さんもちゃんとわかりますし」

「ほんとだよ。一夏くんに会いに行って、・・・すいません、どなたですか？って言われたときにはショックで三日は寝込んだのよ！」

「・・・」

実際にそれだけか弱いなら周りの人間があれだけ振り回されることもないのになあ。

「なんか失礼なこと考えてるでしょう？」

「いえそんなまさか」

「でも、心配したことは本当だし、そのせいで仕事が増えたことも本当なのよ？あんまり騒ぎにしたくないから話が学園内だけでとどまるように根回ししたりしてね。一夏くんは副会長だってことを忘れてて生徒会室にも来てくれないし」

「それはもうなんていったらいいか。明日からはきちんと手伝いますよ」

「というわけで私はもう疲れちゃってさ。一夏くん、自慢のマッサージでお姉さんを癒してー」

ああなるほど、目的はそれか。まあ今まで迷惑かけてたのは本当だろうし、それくらいならお安い御用だ。

「わかりました。じゃあそっちのベットに横になってください」

「はいはーい、それじゃあよろしくね」

俯せになっている楯無さんの背中を揉んでいく。うう、柔らかい。いや、先輩は俺を信頼して任せてくれたんだ。煩悩退散。

「あー、本当にマッサージうまいわねぇ」
「まあ何度もやってますから」
「それにしても一夏くんもぬいぐるみなんか持ってるのね」
「ぬいぐるみ？」

ほらこれ、とこちらに見せてきたのはディフォルメされたクラゲのぬいぐるみだ。ぬいぐるみなんて持ってた記憶はないぞ。まさかまだ記憶に不備があるのか。
と、そこまで考えて思い至る。
昨日までの空白の一週間の中で買うなり貰うなりしたんだろうな。自分で買ったんならいいが貰いもんだとするならそれを覚えてないのはくれた人に失礼だ。ううむ、やっぱりちょっとの期間でも記憶がないのは不便だな。

「一夏くんはクラゲが好きなの？」
「まあ嫌いじゃないですけど」

けれど別段好きというわけでもない。なぜクラゲ？記憶がなかった頃の俺はそんなに暗かったのだろうか、クラゲだけに。

「・・・一夏くん？それは全然面白くもうまくもないわよ」

何も言ってないのに！

そんなくだらない会話をしながらマッサージは終了した。その後楯無さんにしては珍しくおとなしく帰っていったので本当に疲れが溜まっていたのかもしれない。勿論帰り際に明日は生徒会室に来るようにと念を押していくのは忘れてなかったけれど。
でも、これでやっと一人だな。とりあえず俺の記憶のない一週間の

間に持ち物が減ってたりしないか確認しよう。
そう思って部屋の中を漁っていると、部屋の扉がノックされた。

「はーい、開いてるからどうぞー」
「入るぞ」
「あれ、千冬姉。どうしたのさ？」

中にはいってきたのは千冬姉だった。なんか疲れた顔してるな。もしかしてこれも俺のせいか？

「一夏、束の姿を見なかったか？」
「束さん？きてるの？」
「ああ、お前のＩＳを見てもらったといっただろう。それから姿が見えなくてな。まだどこかにいるとは思うんだが、なにか問題を起こす前に身柄を拘束しておこうと思ってな」
「・・・」

束さん相手だから仕方ないのかもしれないけど扱いが酷いな。

「いや、見てないよ。俺もさがすの手伝おうか？」
「いやいい。お前はおとなしくしてろ。まだ病み上がりだろう」

そう言い残して去っていった。俺のせいじゃなくて束さんのせいで疲れてるっぽいな。いや、でも束さんを呼ぶことになったのは俺が原因か。結局俺のせいだな。
冗談じゃなく快気祝いでもした方がいいかもしれない。皆にも心配かけただろうし。
とりあえずそのことは明日以降考えることにして家探しを続けた結果、減ってるものは特になくてむしろぬいぐるみとかブレスレットとか見覚えのないものがいくつか増えてた。出所がわからない分あ

る意味減ってるのより厄介だぞ・・・。

下準備中（後書き）

ちょっと無理矢理感もありますがやっと会長を出せました。
最新巻見ると会長より3年生のほうが強そうな印象を受けましたが気のせいですよね。
ということでこの小説内で会長は千冬姉に次ぐチートキャラとなります。
早く活躍させたい。

三回目

家探しも終わり、さてそろそろ寝るかというときにまたも来客があった。
まあ今度は先ほどとは違いノックなんてなく突然扉が開かれたのだが。

「やっほー！いっくーん！」
「・・・束さん、千冬姉がさがしてましたよ」
「ほうほう、ちーちゃんったら私のことが恋しいんだね！愛されちゃって困っちゃうなー」

もう何も突っ込むまい。
そのままのテンションで部屋に入ってきた束さんは俺の布団にダイブすると、足をバタバタさせながら嬉しそうにしている。

「で、何か用ですか？」
「いやいや、いっくんの記憶が戻ったと聞いて居ても立ってもいられなくてね。こうして遊びに来たわけさ！いやーいっくんから、この美人で素敵なお姉さんは誰ですか？なんて言われたときはショックだったよー」
「そうですか」

なんかデジャブ。ていうか記憶喪失でもそんなことは言ってないだろ。・・・いや、別に束さんが美人じゃないと言ってるわけじゃないぞ？

「まあ真面目な話をすると、健康診断みたいなものだよ」
「健康診断？」

「そうそう、記憶が戻ったばっかりで混乱してないかなっと思って」
「混乱はしてませんけど、やっぱり一週間記憶がないのは辛いですね」
そう言ってふと思う。
「束さんなら俺の先週の記憶戻せるんじゃないですか？」
「ん？何でそう思うのかな？」
「え？だって俺の記憶戻してくれたのって束さんですよね？」
束さんの足のバタバタが止まる。こっちをぽかんと口を開けて少し驚いたような目で見てくる束さんはいつも以上に幼く見える。
・・・ていうかなんか反応返してください。沈黙が辛いです。
「すごいねいっくん。よくわかったね・・・」
そうつぶやく束さんだが、え、そこ驚くとこか？
俺の知り合いで医者でも原因不明な記憶喪失をどうにかできそうな人って束さんぐらいしかいないし、何より束さんがいじった後の白式に乗った直後に記憶が戻ったのだ。敵にやられた衝撃で記憶が戻ったとも考えられるがそれより束さんが理由の方が説得力がある気がする。
そう説明すると束さんは満足したように
「そこまでわかるなんて、さすが私！」
なんて喜んでいた。
まあ確かにさすが束さんだとは思うがそれを言うのは俺じゃないか？
「で、できるんですか？」

「ムリだね」
改めて尋ねると即答された。
「なんでですか？この記憶は戻ったのに」
「先週の記憶は完全にデリートしちゃったからなー」
「デリート？」
「まあ1個の個体に2つの記憶があるなんておかしいからね。最初の原因の方はともかく直せたのはバグ技使ったみたいなものだから。またなんかのバグで記憶が反転して私のことを覚えてないいっくんなんかに戻ったら嫌でしょ？だからそういう事がないように余計な記憶の方は完全に消しちゃったから戻すのは無理だね」
「ああ、そうなんですか」
まあ確かにまたなんかの理由で記憶喪失になるのも困るし、そうなるくらいなら完全にそっちの記憶を消してもらったほうがいいのかな？
「とと、そんなことを話しに来たんじゃないんだよおねーさんは」
「じゃあ何をしに？」
「だから言ったでしょ、健康診断だよ。と言ってもいっくんのじゃないよ、白式のだよ。いっくん、右手だけでいいから白式展開してくれない？」
言われて展開した俺の白式をふむふむと怪しげ機械で眺めだした束さんだったが、5分もすると
「何も異常なーし、つまんなーい」
と言ってまた俺のベットにだいぶしてジタバタし始めた。

いや、それでいいんですよ、束さんが面白いと大抵周りの人間が被害をうけるんで、という本心は勿論言わない。一応は記憶喪失を直してくれた恩人だしな。

「じゃまあやることも終わったしちょっとちーちゃんのところにでも行ってくるよ。それじゃあいっくんまたねー」

と、しばらくゴロゴロしていた束さんはふと立ち上がりでていってしまった。相変わらず嵐のような人だった。

まあ、もう寝るか。楯無さんと束さんという相手していて疲れる人No．1，2と連続で相手した（どっちが一番かはご想像にお任せする）し、今日はいろいろあったし、もう限界だ。

俺はベットにばたんきゅーするとあっという間に眠ってしまった。

夢をみた気がする
俺の一番大切な人と二人で話し合ってる夢
俺はそいつのことしか考えてなくて
俺はそいつのことしか見てなくて
俺はそいつのことだけを思っていた
そんな暖かくて幸せで
だけどどうしようもなく寂しい
そんな夢をみた気がする

「一夏！起きろ！」

突然扉が開かれると同時の大声で目を覚ます。こちらに向かってくる足音が聞こえる。

「まったく、いつまで寝ているんだ。昨日は色々あっただろうが今日も学校だぞ。早く起きないと遅刻する」

そこにいたのは俺のファースト幼馴染、篠ノ之箒だった。
わかってるよ、と返事をしながら体を起こして伸びをする。うん、疲れは結構なくなってるな。

「で、どうしたんだ箒？」
「どうしたもこうしたもあるか。お前が何時まで経っても食堂に来ないからこうして起こしに来てやったんだ」

は？と思い時計をみる。・・・やばい、普段なら食堂で朝食を食い終わっててもおかしくない時間だ。

「うわあ！もうこんな時間かよ！すまん箒、すぐ行く！」
「ああ、そうしろ・・・っておい！わ、私の眼の前で着替えるんじゃない！まったく、先に行っているぞ！」

顔を真っ赤にするほど怒りながら部屋から出ていってしまった。
まあ今のは俺が悪い。配慮に欠けていた。
いつもの3倍のスピードで着替えながら箒に感謝と謝罪の念をテレパシーで送る。

でもこりゃ今日は朝食抜きだな。
そう思ってかばんの中に学校で食べれるようにカロリーメイト的な何かを入れておく。休み時間にでも食べよう。
とりあえず教室にダッシュだ！

結論から言うと間に合わなかった。
走っているところを織斑先生に見つかり注意を受け、それ以降は早歩きを使い教室にたどり着くと既に山田先生が出席をとっているところだった。
恨むぞ、千冬姉。

朝のＨＲが終わり、今日の一時間目は座学なので次の時間まで数分の余裕がある。よし、カロリーメイト的なアレを食べよう。と思っていると声をかけてくる人が一人。

「一夏さん、今日は朝御飯に居らっしゃらないようでしたので、実は私おにぎりなんかを用意しましたの」

セシリアである。
セシリアはお弁当箱に入った見た目だけなら完璧なおにぎりを二つほど持って立っていた。
いつの間に用意したんだそんなもの。
たしかに俺は朝飯を食べてないので本来であれば歓迎すべきはずのことなんだが・・・。

「なあ、セシリア。このおにぎりってどう作ったんだ？」
「もちろんご飯を握ってですわ。でもそれだけではなくて実は少し工夫を凝らしましたの」

素人の工夫って一番やっちゃだめなんだって！普通でいいんだって！
え？おにぎりはどうやったってまずくなりようがないだろだって？
たしかに俺もそう思う。けどセシリアには前科があるんだ。結構良い野菜を使ったはずの生野菜サラダをまずくしたという前科が。・・・あれ以来どんなものであってもセシリアの料理は信用できなくなってしまった。まあそれでもうまいって言ってしまったせいで今こうなってるわけだが。
助けを求めようと周囲を見る。箒の方に目を向けると何故か目があったがすぐにそらされてしまった。助けは期待できない。ラウラは・・・ん？なんか睨みつけてくるんだが、怒ってるのか？シャルの姿は見当たらない。他のクラスメイトの反応は2通り。セシリアの料理を知っている数少ない人は哀れみを込めての苦笑い、知らない人はなんか羨ましそうに見てくるな。そんなにセシリアの料理が食べたいんだろうか。

「一夏さん？どこをみていらっしゃいますの？」
「ああ、わるい。えっと、おにぎり、だったな」

そろそろ現実逃避も限界のようだ。覚悟を決めて目の前に差し出されたおにぎりを受け取る。
・・・そうだ、たとえ結果がどうであってもセシリアが俺のために作ってくれたものじゃないか。だったら俺はその気持を大切にしたいし、それを踏みにじることなんてできない。
覚悟を決めておにぎりを取り出して・・・いざ！
ぱくり。

「あまっ！」

これ塩じゃなくて砂糖が入ってる！ベタ過ぎて逆にびっくりだ！

「ええ、日本では基本的におにぎりには塩ですが、特別な人に渡すときは塩の代わりに砂糖を入れるのが伝統だと聞きまして」

頬を染めながら日本人の俺すら知らなかった伝統を教えてくれるセシリア。

そんなことを教えてくれたのはどこのどいつだろうな。まさかチェルシーさんが間違った知識を教えるとも思えないし、他のクラスメイトにしたってそうだ。とりあえずその犯人はいつか絶対ぶん殴る。

「えっと、塩と砂糖を間違えたわけではないんだな？」

「はい。この私がそんなミスを犯すわけありませんもの」

そうらしい。後何で顔が赤いんだ？やっぱりミスをしちゃったことを恥ずかしがってるけど後に引けなくなっただけじゃないのか？

そんなことを思いながらなんとか気合で大体半分くらいまで行ったとき、突然味が変わった。しょっぱくなってきたな。ああそうか梅干し・・・じゃないぞこれ！

「何でケチャップが入ってんだ！？」

「梅干しが見当たらなかったのでなんとか赤くしようと思ったんですけれど、それくらいしか赤いのがなくて・・・」

その見た目だけは良くするみたいなことをやめてくれればもう少しマシなものができるだろうに。まあケチャップ自体はご飯に合わないわけじゃない。チキンライスなんかもあるわけだし。でも如何せん量が多いのだ。まんべんなく薄くケチャップがあるならいいが、小さじ一杯ぐらいの量が真ん中にべちょりとあるせいでひたすらしょっぱい。その上周りの砂糖と混ざっているせいで・・・。

「もしかして、お口にあいませんでしたか？」

不安そうにそう聞いてくるセシリアに、まずいなんて言えるわけもなく。

「いや、そんなことないぞ。結構いいんじゃないか？」

こうして今日もまた自分の首を閉めていくのだった。

その後気合で二つ目のおにぎりも完食したところでちょうど授業が始まってしまい、口直しする暇もなく気持ち悪い状態のまま１時間を過ごすこととなった。

その後お昼に鈴が持ってきてくれた酢豚は涙が出るほど美味しかった。そのことを鈴に伝えると赤くなりながら

「そ、そんなに嬉しいの？・・・どうしてもって言うなら、毎日作ってきてあげるわよ？」

と言ってきたのでさすがに毎日酢豚はなあと思ってそれは別にいいと答えたらＩＳを部分展開して追い掛け回された。理不尽だ。

三回目（後書き）

更新が予想以上に遅くなってしまいました。次はもう少し早くできるように頑張ります。

行事開催（前書き）

今回から原作7巻に突入します。
なぜいまさら原作？と疑問に思った方、説明はあとがきの方に書きましたのでそちらを御覧ください。

行事開催

全学年専用機持ちタッグマッチ

途中で中止になった様々な学校行事、学園を強襲した謎のＩＳ、これら二つを受けて学校側が提示した新たな行事である。
イベント中止により各界へのアピールの機会を失い、信用が低下しつつあるＩＳ学園。それを何とかするために各界の重鎮を呼び再度アピールの機会を作り、また専用機持ちの技能向上もはかるという趣旨らしい。タッグであるのは不慮の事態に対応する際にも一人より二人という非常に単純な理由だ。

「というわけなのよ。勿論一夏くんにも参加してもらうわ」
「その頃には白式のダメージも回復しているはずです」
「がんばれぇ、おりむー」

上から楯無さん、虚さん、のほほんさん。
昨晩言われた通り放課後生徒会室にむかい聞かされた話がそれだった。
途中訓練に誘ってきたラウラを振りきった際なぜ私の時だけ！と良くわからんキレ方をされたのはなんでだろうな。

「他の生徒には明日の朝のＨＲで発表されるわ。一夏くんの調子が良くないようだったら参加させないことにしようと思ったんだけど、昨日は元気そうだったし大丈夫よね？」
「大丈夫です。気を使ってもらわなくても学校行事には参加しますよ」
「それはありがたいんだけど、実はその件で一夏くんには頼みたいことがあるのよ」

「頼みたいこと？」
楯無さんは珍しいことにしばらく言いづらそうに口ごもっていたが、やがて意を決したように俺の目を見ながら
「お願い！私の妹と組んで！」
手を合わせてそうお願いしてきた。
「妹・・・ですか？」
「そう、この子なんだけどね」
そう言って差し出した携帯電話の画面には楯無さんとよく似た、けれど楯無さんが浮かべそうもないような陰りのある表情を見せる少女がいた。
「簪って名前なんだけどね・・・その、言いづらいんだけど、この子ちょっと・・・暗いのよ」
「そ、そうですか」
ストレートに言うなあ。
「でね、この子も一応専用機持ちなのよ。だから今回のこれに参加させようと思ってるんだけど」
「けど？」
「この子専用機を持ってないのよ」
「はあ？」
専用機持ちなのに専用機を持ってない？

「簪ちゃん、日本の代表候補生なんだけどまだ専用機が完成してないのよ。一夏くんのせいでね」
「え！俺ですか！？」
何でそこで俺が出てくるんだ！
「簪ちゃんの専用機の倉持技研、つまり」
「ああ、白式の方に力を入れちゃったからそっちの方まで手が回ってないと」
「そういうことなの。あの子、自分で専用機を完成させようと頑張ってるんだけどね。それに協力してあげてほしいの」
「なるほど。別にいいですけど、俺機械のこととか詳しくないですよ？」
「そこは大丈夫。私も陰ながら協力するし、本音もいるから」
「のほほんさん？」
聞けば彼女はＩＳの整備の知識もあるらしい。来年の整備科エース候補なのだとか。
「それじゃあお願いね。あ、後、私の名前は極力出さないでね」
「え？どうしてですか？」
「えっと、それは・・・その」
言いづらそうに口ごもる楯無さん。なるほどこれは
「妹さんとあまり仲が良くないんですか？」
「うぅ・・・」
やっぱり。箒と束さんもそんな感じだよなあ。そういえば少なくとも昨日一昨日と束さんは学園にいたわけだが箒と会ったんだろうか。

あとで聞いてみよう。

「わかりました。じゃあなるべく自然な感じで誘ってみますね」

「頼むわね」

ということで更識簪の名前を頭に入れておく。ところで、

「タッグマッチかぁ。人気者のおりむーは一体誰と組むんだろうねぇ」

「だから今簪お嬢様と組んでもらうようにお願いしたんでしょう」

「ああそっかぁ」

というのほほんさんと虚さんの会話が聞こえてきたんだが、のほほんさんは今まで何を聞いてたんだ？

翌日、楯無さんの言っていたとおりタッグマッチのことが朝のＨＲで発表された。そしてそのＨＲ終了後の休み時間。

「一夏。タッグマッチだが、組む相手はだれにするつもりだ？」

「一夏さん。ぜひタッグマッチでペアを組んでくださいまし」

「一夏。お前は私の嫁なのだからもちろん私と組むんだろう？」

３人が同時に詰めかけてきた。鈴が２組はアリーナでの授業だからきていないのと、シャルがこなかったのが救いか。多分シャルはまだ決着が付いていない俺と組むのは抵抗があるんだろう。ていうか別に俺と組むって約束してたわけじゃないし、誘われなくてもおか

しくはない。

「順番で言えば私のはずですけれど？」
「ふん。今そんなもの関係あるか」
「待て。そもそも私は昨日順番を飛ばされているんだ。ここは私だろう」

だからとりあえず目の前で言い争いしてる三人を何とかしてくれ。順番とか何の話だ。

「まあまあ、おりむーも混乱してるみたいだし少し落ち着きなよぉ」

と、ここに救いの手が差し伸べられた。ナイスだのほほんさん！そうか、今回の件にはのほほんさんも噛んでるらしいからな、こういう所でもアシストしてくれるのか。

「それに、おりむーにはもう心に決めた相手がいるんだよねぇ？」
「「「なんだと！！」」」

一斉に俺を睨みつけてきた3人。だが確かにその通りだ。俺が組む相手はもう決まってるからな。

「おい一夏、その話はほんとうなのか？」
「ああ、そうだな。もう決めているぞ」
「なっ！」

質問に答えたら箒が固まってしまった。なんなんだ？
するとそこにのほほんさんが寄っていって何かをささやく。うーん、声が小さくて聞こえん。
少し4人で軽く言い争いが続いたが話がまとまったのか3人がこっ

ちを向いて

「待っているぞ！」

「待っていますわ！」

「信じているぞ、一夏」

と宣言してくれた。

これは簪さんのことを応援してくれたってことなのか？簪さんを表舞台に引っ張ってくるのを信じている、戦場で待っているぞ、とそういうことかな。

・・・ああ、そこまで言われちゃなんとしてでもやらなきゃって気になるよな。よし、燃えてきた！

「ああ、待っててくれ！必ず伝えてみせる！」

簪さんへタッグマッチの誘いを！

その言葉に満足したのか三人とのほほんさんは自分の席に戻っていった。

3時間目と4時間目の間の休み時間に鈴が押しかけてきたがのほほんさんが何かを囁くと

「ま、まあせいぜい楽しみにしててあげるわ。あんまり待たせんじゃないわよ！」

と、少し顔を赤くしながら俺を激励してくれた。まああいつのことだ、素直に俺を応援するのは照れくさいんだろう、付き合いは長いんだしそのくらい手に取るようにわかる。それでも応援してくれる

のがあいつのいいとこなんだろうな。

そして昼休みになった。

皆からあそこまで応援されたんだ。俺はやらなきゃならない。

1年4組へと向かい、近くの女子に話しかける。

「あの、すいません」

「はーい、って、織斑君!?一体4組なんかに何の御用でしょうか!?」

すげえびっくりされたぞ。まあ今まで4組とは授業が一緒になることも少なかったし仕方ないか。

「ええ!?織斑君!?」

「うわー本物だー!」

「これって生?これって生!?」

「うそうそ!なんでなんで!」

そしてわらわらと集まりだす女子たち。参ったなこりゃ。まあとりあえずとっとと要件をすまそう。ウーパールーパー扱いもいい加減慣れたけどいいもんじゃないしな。

「えっと、更識簪さんっている?」

「え、あの?」

そう言って静かになった女子たちが道を開く。その先の一番後ろの窓際の席にいる子、見せてもらった写真通りの子だ。こんだけ騒がしいのに一切こっちに感心がなさそうだな。そのかわり空中投影型のディスプレイを凝視しながらキーボードをすごい速さで叩いている。

「えっと、もしかして、朝説明されてた専用機持ちタッグマッチのパートナーに更識さんを選んだ、とか？」
「まあそんなとこだ」
俺の返事に周囲の女子がざわめきだす。そこで話されている言葉は・・・あんまり聞いていて気持ちのいい内容じゃないな。
「悪い！じゃあ俺あの子に用があるから！」
会話を打ち切るためわざと大きな声を出して簪さんのところへ。
適当に近くの席の子に頼んで椅子を借りて簪さんの目の前へ座る。
そんな俺にまったく目も向けないでひたすらキーボードで何かを打ち込んでいる簪さん。
「えっと、簪さん、だよな。俺は織斑一夏。初めまして」
そう言うとピタリと指の動きが止まる。そしてゆっくり顔をこちらに向けて
「・・・知っている」
とつぶやいた。初めて反応してくれた！ちょっとうれしい。
「・・・私には、あなたを殴る権利がある・・・」
「う、やっぱりそのこと怒ってるか？俺がどう思ってたにしてもそのせいで迷惑かけちまったのは事実だもんな」
あの件は俺が望んだことじゃないんだが、そんなこと簪さんにしてみりゃ関係ないよな。どうであろうと俺のせいで専用機が出来てい

ないのは事実なんだし。

「・・・でも、疲れるからやらない・・・」

「いや、それでいいならいいけどさ。別に殴ってくれてもいいぞ」

「・・・用件は？」

「おお、そうだった。今度のタッグマッチ、俺と組んでくれないか？」

「イヤ」

即答だった！今までは間を持っての返事だったけど今のだけはきっぱりと断られた！

「そんな事言わずにさ、頼む！」

「イヤ。・・・それにあなた、組む相手には困ってないはず・・・」

「いや、それは・・・」

ううむ、どう言えばいいんだ・・・。楯無さんにおねがいされました、なんて説明できるわけないし・・・。

普段だったらここらで鈴が暴走してすべてを有耶無耶にしてくれそうな気がするけど、幸か不幸か鈴は俺のことを応援してくれてるしそれもないからな。自分で理由を考えないと。

「やっぱり、専用機持ち同士仲良くしたいじゃないか」

「・・・私は今、専用機を持ってない・・・」

あ、そうだった。しかもその原因が俺だから、やばい、ちょっと怒らせちゃったか？

「そんなの関係ないって！俺は専用機とじゃなくて簪さんと仲良くなりたいだけなんだから！」

もう自分でも何を言ってるかよくわからない。さっき自分で専用機持ちだから仲良くしたいって言ったのに専用機なんか関係ないってなんだよ・・・。
勢いでいってその矛盾に気づかせないようにしないと。

「・・・私、と？」
「ああそうだ！俺は簪さんと仲良くなりたい！だけどそのためには互いのことを知らなすぎるだろ？だからタッグを組むんだ！最初は息があわないかもしれない！だけど立ち塞がる強敵たちを倒しながらだんだんとつながる絆！そしてつかむ優勝！燃えるだろ！？」
「え・・・？ああ、うん・・・」
「だろ！？だから簪さん、いや、簪！」

簪さんの方を掴む。こうなりゃヤケだ。もうどうにでもなれ！

「俺と組んで、タッグマッチ、優勝しようぜ！」
「・・・でも、私の専用機は今・・・」
「それは俺も協力する！一人じゃ無理でも二人ならなんとかなるかもしれない！」
「でも、今までずっとこういうのさぼってきたし・・・」
「だから！今回は俺と一緒に出よう！大丈夫！俺がサポートする！」
「でも・・・」
「平気だって！何も心配することも怖がることもない！俺に任せろ！」
「私で・・・いいの？」
「当たり前だ！簪だからいいんだ！俺と共に戦おうぜ、簪！」
「・・・」

・・・俺は何を言ってるんだろうな？ただもうここまで来て止めら

れないし、突っ走っちまったほうがいいだろう。
簪は少し迷ったような表情を見せていたが、やがて決心がついたかのように頷いてくれた。

「・・・わかった。そこまで言うなら、自信はないけど・・・やってみる」
「本当か！ありがとう簪！よしじゃあ早速ミーティングだ、食堂に行こうぜ！購買のパンより学食の定食のほうがうまいぞ！チーム結成記念に奢るからさ！」
「え、ま、ちょ・・・」

あまりの嬉しさに簪の手をとって学食へダッシュ。結構時間も過ぎちまったけど急げば今からでも十分間に合うはず！
途中簪の足がもつれて転びそうになったため上手く抱き上げて胸の前でかかえる、いわゆるお姫様抱っこの状態にチェンジ。周りの女子がなんか言ってたが急がないと時間がなくなってしまうので無視して走り去る。
学食について簪をおろすと息を切らしながら顔を真っ赤にして怒られてしまった。いやまあ確かに女の子を突然抱きかかえるのはよくなかったな。反省。

「んじゃまあ飯くおうぜ。簪は何食べたい？」
「・・・はあはあ・・・まだ話は終わって・・・ない、のに」
「ジャンボカツカレーでいいか？」
「・・・肉は、嫌いなの・・・」
「じゃあなんにする？海鮮丼とか？」
「・・・うどんが、いい」
「オッケーうどんだな！よし、トッピングを全部つけよう。卵にかき揚げにあげ玉に油揚げに海老天にからあげに、っと肉は嫌いなんだったな」

「そ、そこまではいい・・・！でも、かき揚げは欲しい・・・かも・・・」
「了解！じゃあかき揚げうどんに、俺はチキン南蛮定食にしようかな。簪は空いてる席探しといてくれ」
「うん・・・」

そんなこんなで俺達は昼飯を食べた後、放課後にパートナー申請をすることを約束して教室に戻った。よし、放課後からは簪の専用機作りの手伝いだ！がんばるぞ！

行事開催（後書き）

今回の件ですが、当初の予定でもオリジナルイベントとしてタッグバトルは行う予定でした（もっともその時のパートナーは簪ではありませんでしたが）。しかし原作最新巻にてタッグマッチのイベントが新たに行われたので、新キャラを出すにもちょうどいいしこれを利用しよう、と思いつき予定を若干変更しました。
もちろん原作とは展開も変える予定ですし、本来の内容ともそこまでの変更はないので作品としての問題はないと思います。もしなにかご意見や不満点がありましたら感想か作者に直接メッセージをお送りください、考慮します。
なお、原作は読んでいること前提で書きますので、原作7巻でされている説明はカットする可能性があります。こちらの方は言ってくだされば きちんと説明するように努力します。

各組状況

＜ラウラｓｉｄｅ＞

心に決めた人がいる、そう聞いたとき私の心は怒りに包まれた。
お前は私の嫁だろう、なのになぜそんなことを言うのだ、と。
しかし本音から聞かされた言葉で正気に戻った。

『おりむーはその人に気持ちを伝えようと思ってる。それが誰かはわからないけど、多分皆の中の誰かだよ。だから、ね？最後の決定権はおりむーにあげよ？』

そう言われてしまえば何も出来ない。
セシリアや箒はそれでもまだなにか言っていたが私はそれで納得した。確かに専用機持ちしかいない場で選ぶのなら私たち5人のうちの誰かしかいないだろう。他にいるとすればせいぜい楯無先輩ぐらいだろうか。だがもう既に心に決めた人がいるのならば私たちが今更誘ったところで返事は変わらないだろう。
ならば一夏が自分を選んでくれると信じて待つしかない。
そもそもなぜ私は怒っていたんだ、一夏は心に決めた相手がいるといっただけで私じゃないとは言っていないではないか。私は信じている、一夏を。
だがもし一夏が私以外のものを本気で好きだというのなら・・・そのときは・・・ふん、私を選ばなかったことを後悔させてやるだけだ。

そう思っていた。

だが、やつが選んだのは名前も知らない女であった。

「行くぞ！シャルロット！」
「いつでもいいよ、ラウラ！」

私のワイヤーソードの動きに合わせて、シャルロットが武器を使い分け攻撃を仕掛ける。相手の対処が追いつかなくなったときに私のレールカノンで止めを刺す。これが私とシャルロットのコンビの基本行動だ。
今日も互いの連携を更に合わせるための特訓を行う。
・・・一夏は私を、私たちの誰をも選ばなかった。何を思ってあの女と組んだのかは知らん。ただ一夏があの女を選んだ。その事実が私の心に重くのしかかる。
だから私は私を選ばなかったことを後悔させるためこうしてシャルロットと共に訓練に励んでいる。
・・・だが、今さらあいつを後悔させたところで何かが変わるんだろうか？
もし一夏がタッグパートナーとしてだけではなく、あいつを選んだのだとしたら・・・。

「ラウラー？ぼーっとしてどうしたの？」
「ん？・・・ああ、すまん。呆けていた」
「もー。しっかりしてよね」

シャルロットに注意を受けて我に返る。
私は何を悩んでいたんだ。一夏が何を考えていようがとりあえず今は目の前のことを考えなくては。本番までそこまで長いわけでもないんだからな。
・・・それにしても、シャルロットはまったく気にした様子がない

のだが、一体どうしたのだろう。

＜鈴ｓｉｄｅ＞

「おりむーはぁ、もう組む人は決めてるんだってぇ」
「え！？誰なのよそいつ！」
「それはわからないけど、このクラスの人じゃないって聞いたよぉ」
「え！？そ、それって・・・」
「１組じゃないってことは・・・りんりんのことだよねぇ！」

あの時本音と一緒にキャー！なんて騒いでた自分を蹴り飛ばしたい・・・。
ええ、たしかに一夏が組んだ相手は１組じゃなかったわ・・・。でも、まさか、なんで・・・。

「何で４組なのよーーーー！！！！！」

何で４組なの！？１組じゃないなら２組でいいじゃない！何で２と３すっ飛ばして４にいくわけ！？理解出来ないわ！

「ほんとにその通りですわ」

側でブルー・ティアーズの整備をしているセシリアがつぶやく。
今、私とセシリアはあのおかしくなった一夏をぶん殴って後悔させてやるためにタッグを組んでいる。近中距離がメインの私と遠距離が得意なセシリアなら結構バランスはいいと思う。
でもまだ足りない。

「一夏をどん底にまでたたき落とすための何か・・・」
「一夏さんを心から後悔させるための何か・・・」

ただチームワークがいい、タッグとして強い、それだけじゃあのバカ一夏は後悔なんてしてくれない。だから絶対に完膚なきまでにたたきつぶす。だからそのために必要な切り札をセシリアと二人で考案中。

「そういえばセシリアってビームを操れるのよね？」
「まあ、多少は出来ますわね」
「それじゃあ私の双天牙月にぐるぐるーって巻きつけてビームサーベル！とかは？」
「・・・そこまでの制御はできませんわ。ていうか意味不明ですの」

とまあこのように真剣に議論し合って、必ず圧倒的な切り札を産み出してみせるわ。
首を洗って待ってなさい！一夏！

＜楯無ｓｉｄｅ＞

一夏君はうまく簪ちゃんと組めたようね。
それじゃあ私は箒ちゃんと組もうかしら。

「ほーうーきーちゃん♪」
「うわ、更識先輩！驚かせないでください！」

ついつい気配を消して後ろから飛びついてしまった。
それにしても剣道場で真剣を持って居合練習はどうかと思うわ箒ちゃん。剣道部の子が自主練に来ようと思っても真剣振り回してる人がいちゃ入りづらいでしょう？やるなら人目につかないところがいいと思うわ。
そういう思いを込めて少し皮肉を言ってみる。

「こんなところで真剣による居合かあ、気合入ってるわね」
「ええ、まあ。これでも戦国時代を生き抜いた血筋ですので」

そういう問題じゃないわ！違うのよ箒ちゃん・・・。ここがＩＳ学園でどこの国にも属さないからいいものをもし外で真剣持ってたら今の世なら銃刀法違反なのよ？それはわかってるわよね？
まあ私も武装はしてるんだけどね。でも一目で分かる真剣みたいなのじゃなくて普通の人が見たら武器とは思わないようなものが私にとっての武器だから問題ないわ。
と、いけないいけない。私は箒ちゃんの趣味に文句を付けに来たんじゃなくてパートナーに誘いに来たんだった。

「じゃあわかったわ。箒ちゃんは私と組みましょう」
「ええ！？なにがわかったんですか！？ていうかどうして・・・」

何がわかったのかは自分でもよくわからないけどいつも私そんな感じだから問題ないわよね。・・・時々いつもの自分が分からなくなるわ。どんなキャラなの、私って。

「お願い！私組んでくれる人がいなくて困ってるの！だから、ね？」

これは本当。２年にはもう一人専用機持ちがいるんだけどあの子いっつも三年生のダリルちゃんとイチャイチャしてるから組めないの

よね。あの二人のコンビネーションは凄まじいから今回もペアを組むんだろうし。・・・タッグマッチにしたけどあの二人にかなうペアっているのかしら？シングルスなら負ける気はしないけどダブルスだと・・・ちょっとねえ。まあそこは私がどれぐらい箒ちゃんと息を合わせられるかにかかってるわね。

「ま、まあそういう事なら構いませんが」

「ありがとう、箒ちゃん！」

まあありがとうも何も今ペア申請してない人って私と箒ちゃんしかいないからこのままぼーっとしてれば強制的に組まされてたんだけどね。でもそれよりもこうしたほうがいいわよね。

というわけでペア申請をして、その後にフィジカルチェックをした翌日、私と箒ちゃんは訓練をするため第三アリーナにきてるわ。それじゃあ早速始めましょー。

「その前にちょっといいですか？」

「何かしら箒ちゃん？」

「いえ、友達と一夏のことについて話し合いまして」

「あらあら、恋の相談かしら」

「いえ違います。一夏が私たちの誘いを無下にして違う女と組んだことについてです」

うぐ、その件についての真犯人が私って知ったら箒ちゃんどうするかしら。やっぱり怒る？

「一度一夏には痛い目にあってもらったほうがいいという結論になりまして。私たち大会で一夏をボコボコにしようと思ってるんです」

・・・一夏くんには犠牲になってもらうわ。男の子だもん、女の子のことぐらい簡単に受け止めてくれるわよね？簪ちゃんのことは守ってあげてね。

「だから大会で勝つために今から特訓をするんでしょう？」

「ええ。たしかにそれもそのとおりなんですが、出来ることは全てやっておこうということで、そのためのあてが１つあるんですよ。一応パートナーに許可を得てからと思いましてまだやってないんですが、いいですか？」

「まああんまり危ないことじゃなければいいわよ」

「ありがとうございます、それじゃあ・・・」

そう言って箒ちゃんはポケットから取り出した携帯電話で何処かに電話し始めた。

盗み聞きの趣味はないから内容は聞いてないわよ？その間私は紅椿の機動性と火力に合ったレイディの使い方について考えてたわ。昨日も部屋で考えてたんだけどＩＳを装備して考えたほうが浮かびやすいのよね。

「はい、もう大丈夫です。それでは訓練、よろしくお願いします」

お、終わったみたいね。それじゃあ訓練、頑張りましょー。

＜ダリルｓｉｄｅ＞

「何が気に入らねえってこのイベントが学園でもともとあったやつじゃなくて生徒会で企画したものだってのが気に入らねえ」

「ていうかそもそもなんでタッグなんでしょうね。一般生徒もいるならともかく、専用機しかいねえなら二人にする必要ねえと思うんスけど」
「はっ。おおかた、シングルスだったら私が圧勝でつまらないわー、とか思ったんだろ」

手元の専用機『ヘル・ハウンド・ｖｅｒ２．５』をいじりながらパートナーであるフォルテと共に愚痴る。内容は主にあの馬鹿（楯無）についてだ。

「だいたいあいつは昔からそうなんだ。人の迷惑も何も考えずに周りを振り回して、巻き込まれるこっちの身にもなれってんだ」
「そんなに嫌なら本人に言えばいいじゃないッスか。あの人ならやめてくれるんじゃないッスか？」
「いや別にいやってわけじゃねえんだけどよ・・・」
「うわ、でた。先輩のはっきりしない事なかれ主義」
「あんだよー、やんのかフォルテてめー」
「だから何で私だけには強気なんスか。・・・まあやらないでおきましょ。私たちで戦っても互いのこと知りすぎてて面白く無いッス」
「ま、そりゃそうだ」

フォルテとはこいつが入学してすぐ知り合った。同じ専用機持ちってことで顔合わせしたんだが結構話があってすぐ仲良くなっちまった。そっからの大体一年半くらいしか付き合いはねえが今ではこいつが一番仲がいいし、よくわかる。・・・三年にも友達はいるぞ？まあ少なくともそれより前から付き合いのある楯無なんぞよりずっと話が合う。あいつは何考えてんのかよくわかんねえし、めんどくさいことが嫌いな私をめんどくさいことに巻き込むし。

「そもそも専用機持ちになったのもなんかの間違いなんじゃねーか

なー」
「またそれ言ってんスか。諦めてください。先輩の腕前は天下一品ッスよ、平凡とは程遠いッス」
まあいつもの通り愚痴を漏らすといつものとおり返されるという流れができるぐらいにはこいつとは気が合う。だからこそ世にも珍しいＩＳのペアとして周りからは認識されちまったんだろう。
これ一体で小国ぐらいなら簡単に滅ぼせるくらいのパワーを持っているＩＳ。だから通常は一体あれば十分でタッグを組むなんてのはあんまりない。せいぜい訓練でやったり作戦を共にするときに連携をするくらいだ。
だが私たちは違う。私もフォルテもペアでこそ真価を発揮するＩＳだ。もともとそういう作りになっていたわけじゃない。お互い出身国も今代表候補となっている国も違う。けれど、仲良くなった後試しにペアの練習をしてみたら、なんかすげえ歯車が噛み合った感じがした。
私が一人でＩＳを使っててなんか足りないと思う部分をしっかりとフォルテがカバーしてくれた。逆にフォルテに不足していたものを私がしっかりとカバーできた。
完全に偶然だ。狙ったわけじゃない。だが、まさに私はこいつと組むためにこの学園に来たんだとさえ思ったほどだ。まして操縦者同士も結構話が合うならなおさらな。まあフォルテには言わねえけどよそんなこと。恥ずいし。

「はい、こっちは終わりましたよ、先輩」
「ああ、こっちももうそろだ。・・・おっけ、メンテ終わり。ちょっと飛んでくるか」
「いいッスね。久しぶりにイージスの練習とかしましょうよ。せっかく会長が気を効かせてくれたんスから」
「ああ、そうだな。後悔させたろうぜ、私たち相手にタッグ戦を挑

んできた愚かさをよ」

コンビネーション名『イージス』。誰がつけたかは知らねえが結構なあだ名じゃねえか。
たしかにシングルスなら楯無なんかにゃ逆立ちしたって勝てねえ。けどダブルスなら別だ。むしろダブルスなら誰が逆立ちしたって勝たす気はねえ。
平凡が好きな私が何の因果かＩＳの専用機持ちなんつう特別なことをやっていて、更にそのなかでも珍しい専用機持ちのペアだ。人生何があるかわからんね。
だが、専用機持ちになったことは後悔しても『イージス』になったことを後悔する気はない。

「んじゃまあ学園最強様に目にもの見せてやりますか」

この行事の目標は、楯無以外には一撃も喰らわない。楯無にはあいつの特性上それは難しいから時間だな、１５分以内でケリを付ける。

「んじゃ先輩。まずは今回の目標を決めましょうよ。会長以外にはノーダメ、会長には１０分以内で勝利ってことでどうッスか？」
「って、私よりかっこいいこと言ってんじゃねえよ！」

まあでもフォルテができるとおもうんなら私たちなら出来るんだろうさ。オッケー、会長は１０分以内にぶっ潰す。
あとでシングルスにしとけばよかったって泣きべそかいても知らねえからな。

各組状況（後書き）

今回は準備期間中の各ペアの様子をそれぞれの視点から書いてみました。
後半になるほど書きやすかったです。

ていうか原作だとダリルとフォルテの情報が少なすぎてほぼオリキャラみたいな感じに・・・。しかも自分の中で勝手に二人の裏設定とか考えてたり（ダリルと楯無は小さい頃から顔見知り、フォルテは楯無のことをいろんな意味で疎ましく思っている、等）してたらなんか無駄に愛着が湧いてきちゃいました。
いつかこいつらメインでなんか書いてみたいですね。

開幕・タッグマッチ

いよいよ明日がタッグマッチ当日になった。
俺の機体が完全回復したのが5日前で簪の機体が完成したのがつい昨日だ。だから2人でチームとして練習できるのは今日が最後だったんだが、タッグマッチ出場者は全員放課後に生徒会議室に来るようにとの知らせがあったので仕方無しにそこに向かっている。

「はあ、これじゃあんまり機体に乗れないな」
「うん・・・。ごめんね、私が遅くなって、一夏の足まで引っ張って・・・」
「は？いやいや、簪の機体って予定より早く完成したじゃんか、遅くなんかないだろ」

そう、最初の予定ではギリギリまで機体調整をし、まともな連携は練習なしのぶっつけ本番の予定だったのだ。そしてそれを俺は了承している。だから今回の簪の活動は褒められこそすれ責められるものではない。

「でも、みんなにも手伝ってもらったのに・・・」

最初の数日は簪一人でやっていたが（俺は知識不足で何の役にも立たなかった）、のほほんさんが一緒にやってくれたことをきっかけに2年整備科の黛薫子先輩とその友達が手伝ってくれた。

「そのおかげで最初の予定よりもっと改良できることになって、それで時間をかけちゃったんだろ？それを踏まえても予定より早いんだし、簪はすごい頑張ってたぞ」

よしよしと頭を撫でる。簪は少しネガティブだったり人見知りなところがあるが、そういう時はこうやって頭を撫でてやると落ち着くらしい。こないだ覚えた。

「それに、簪のおかげで白式のエネルギー効率もかなり良くなったしな。誰にもそんなこと言われたことなかったから助かったよ。ほんとにありがとな」

「別に・・・パ、パ・・・パートナーだから・・・」

「ああそうだな、簪は最高のパートナーだぜ」

顔を赤くしながらイヤイヤと頭を振り出す簪。ははは、小動物みたいで可愛いな。

よくわからんが簪は長時間頭をなでられるのが嫌らしい。こないだも頭を撫でながら喋ってたら途中でイヤイヤされたしな。でも頭を撫でられること自体が嫌な訳ではないんだそうだ。

イヤイヤしてる簪は可愛いけど嫌がられるのは本意じゃないから嫌がられる前に手をどけようと思うんだがあんまり早くどけると逆に不機嫌になる。うーむ、タイミングが難しい。

そんな会話をしているうちに生徒会議室へと到着した。扉をノック。

「はーい、どうぞぉ～」

のほほんさんの声がしたので中に入る。

室内には楯無さん、虚さん、のほほんさんのいつもの生徒会メンバーに加えて、箒、鈴、セシリア、ラウラ、シャル、黛さん、それとたまに整備室で見かける専用機持ちの先輩二人がいた。

「はい、それじゃ皆集まったわね。今日の私は参加者側だから説明は虚ちゃんからしてもらうわ。よろしくね」
「わかりました会長」
俺達が手近な席に座ったのを見て、箒の隣りに座る楯無さんと教室の前の方で立っている虚さんがそう切り出した。
「それでは私から説明させていただきます。今回皆さんを呼び出したのは、明日のタッグマッチの試合の順番についてです。この大会に参加するチームは全部で5チーム、トーナメントでは優劣を決めるのが難しいため総当たり戦で進めたいと思います」
パシャリ、とカメラで説明する虚さんを撮る黛さん。・・・なるほど、どうして生徒会でも専用機持ちでもない黛さんがいるのかと思ったが、新聞のネタにするためか。楯無さんも面白いからって理由で許可したんだろうなあ。
「第一アリーナと第三アリーナを使い、同時に2試合行います。その時1組休憩と言う事になりますが、その時他のチームの試合を見学することは特に禁止になっていません。なので早く休憩組になったほうが相手の戦法がわかるため有利になってしまいます」
試合を見るっていっても観客席の方に入る余裕はないからモニターでだろうな。もしくは機体の整備でもしてるかもしれない。
「なのでその時不平不満を出さないために今回対戦相手をくじ引きで決めることにしました。各チームの代表者にこのくじを引いてもらいます。その後そこに書かれている番号を私に報告してください。明日の開会式で対戦組み合わせを発表します。なお公平性を出すため、その作業の間、つまりこの会が終了し明日の開会式まで、会長

が生徒会室に立ち入ることを禁止します。これにより会長自身も明日の発表までその結果を知ることはできません」

おー、なんか結構本格的なんだな。

「それでは代表者を決め、このくじを引いてください。早い者勝ちです」

「では私が行こう」

真っ先に手を上げたのはラウラだ。隣のシャルに許可を得てから前に行き、くじびきの前に立つ。

「早い者勝ちだからな、早いほうが有利なのだ・・・ふふふ、それに気づかぬとは」

・・・なんか勘違いしてるぞ。くじ引きはいつ引いても確率的には同じだからなー。

「これだ！」

そう言って伸ばした手に握られてる番号は、？。

「うーむ、中途半端な数字だな。私としては1が良かったのだが」

単なるくじびきだから数字も特に意味はないと思うぞ？

「それじゃあ次は私がいくわ！さあ箒ちゃん、行ってらっしゃい！」

「ええっ！私ですか！？」

やっぱり楯無さんは箒と組んでたんだな、強敵そうだ。

「それでは失礼して・・・破っ！」

掛け声と共に引いた番号は、？。

「やったわね箒ちゃん！一番大きい数字よ！」

「え、ええ。そうですね」

無駄にはしゃぐ楯無さんとそれについていけてない箒。・・・相性はあんまり良くなさそうだが、大丈夫なのか？

「んじゃ先輩、引いてくださいッス」

「あんだよ私に押し付けんなよめんどくせーな」

とか言いながら引いた先輩ペアの番号は？。

鈴・セシリアペアは？だった。

こうしてぼーっとしてる間に俺と簪がくじを引く必要もなく？と決定された。まあ残り物には福があるっていうからな。

その後虚さんから当日の流れを軽く説明され解散となった。

「よし終わった！簪、早く練習しに行こう！」

「う、うん・・・」

終わるやいなや簪の手をとってダッシュ。が、途中簪が転びそうになったのでまたもお姫様抱っこにチェンジ。この流れも実はもう５回目ぐらいだ。簪もいい加減慣れたのか最初の時は怒っていたがもう何も言わない。ただやっぱり恥ずかしいのか顔を赤くしてるけどな。でも仕方ないだろ、このほうが早いんだから。

俺は白式が回復してから基本的に一人で訓練していた。もちろん、簪の方に男手が必要なときはアシストしに行ったし、簪のテスト飛行の時には一緒に飛んでいた。けれど大体の時間は一人だった。
その時に俺が重点的に練習したのは瞬時加速だ。
どうやら束さんのおかげで俺の白式は強化され、瞬時加速を使って曲がることができるようになったらしい。最初は半信半疑だったが、実際使ってみると結構曲がれる。これで戦略の幅も増えたと喜んでたんだが、これはなかなか制御しづらい。最悪変な方向に曲がって壁にぶつかって自滅もあり得る。本番でそんなことにならないように俺は瞬時加速で曲がる練習を繰り返ししてきた。そのおかげでずいぶん制御はできるようになったと思う。
そして今日は初めてのタッグ練習だ。
今まで一緒に飛んでいた事は何度かあったが、それはまだ簪の機体が完成されていなかった頃の話。まともな連携の練習はできなかった。だから連携技をするのだとすれば今日中に仕上げなければならないのだが・・・。

「だから、ここで俺の零落白夜で決めたほうが一気に削れるだろ？」
「でも、それだと外れたときの隙が大きいから・・・山嵐でも十分威力はあるし・・・」
「でもその時俺が近くにいると邪魔だよな。俺は雪羅の荷電粒子砲でサポートするか？」
「一夏、遠くからじゃ射撃当たらないから・・・へたっぴ・・・」
「悪かったな！」

白式と打鉄弐式の相性が思ったより良くない。ていうかそもそも白式と相性のいいＩＳって紅椿以外で何があるんだろうな。シャルと組んだ時もとりあえず片方を倒してからもう一人と戦うっていうう単純極まりない戦法だったし、そもそもあれはシャルが俺に合わせてくれてただけだろうし。

「じゃあ俺のイグニッション・ブーストΩで・・・」
「オメガ？」
「ああ、俺の瞬時加速が曲がるのは知ってるだろ？それに名前をつけたんだ。Ωって書くと、ほら、なんか、回りこんでる軌道みたいに見えないか？」
「・・・・・・」

結局その日の連携訓練が終わったのは夜遅く、しかもそこまで捗らずに終わってしまった。
だけど俺も簪も本番に強いタイプだし大丈夫だろ！

翌日、開会式の時間となった。
俺は生徒会役員として前の方にのほほんさんと一緒に座っている。
虚さんは司会、楯無さんは会長として開会の挨拶をしている。
さすが会長、カリスマのある堂々とした、それでいて美しい雰囲気を漂わせている。
と感心していたのに、

「それはそれとして！今日は生徒全員に楽しんでもらうために、生徒会である企画を考えました！名づけて『優勝ペア予想応援・食事券争奪戦』！」

なんでそこで今までの雰囲気を台無しにするようなことをするかなあ・・・。
一般生徒の皆さんは、わあああああっ！なんて嬉しそうに騒いでるけど、・・・いいのか？
俺の微妙な雰囲気を察したのか楯無さんは俺の方を向いてウインクした後、職員が座っている方を顎で指す。

・・・誰も反対してないな。根回し済みか・・・。
千冬姉だけが頭痛を感じているかのように頭を抑えていたのが印象的だった。

「おりむーが全然生徒会に来ないから～、私たちだけで多数決とって決めちゃいましたぁ」

のほほんさんがしてくれた説明に顔をしかめる。
くっ、そういえば整備室とアリーナばっかりで全然生徒会には顔を出さなかったな・・・。もう少しこっちにも気を配っていればこんなことには・・・。
沈む俺と対照的に盛り上がる一般生徒。皆が楽しめるほうがいいんだからこれでいいんだ、そう思おう、うん。

「さて、それじゃあ今日の対戦表を発表するわ！実は私も初めて見るのよ」

そういって大型の空中ディスプレイが楯無さんの前に現れる。そこに表示されたのは・・・

第一アリーナ　第三アリーナ　休憩
1回戦　？—？　？—？　？
2回戦　？—？　？—？　？
3回戦　？—？　？—？　？

４回戦　？―？　　？―？　　？
５回戦　？―？　　？―？　　？

？…　　凰・鈴音　＆　セシリア・オルコット
？…　　ダリル・ケイシー　＆　フォルテ・サファイア
？…ラウラ・ボーデヴィッヒ　＆　シャルロット・デュノア
？…　　織斑一夏　＆　更識簪
？…　　篠ノ之箒　＆　更識楯無

という表だった。
なるほど、あの時引いた番号ごとに分けているわけか。とすると俺達が休憩できるのは４回戦の時で、最初の相手は・・・

「げえっ！」

箒と楯無さんのチームだ。
しょっぱなから大本命との戦いか・・・。だがまあどうせ後で戦うんだ。いつ戦ったって何も問題ない！
だけど心配なのは簪だ。
あいつは今までの行事とかにずっと不参加だったせいでまともに戦闘をしたことがなかったらしい。それなのに、自信を付ける暇も実戦の空気に慣れる間もなく楯無さんか・・・。
他の生徒と一緒に並んでいるはずの簪を探すが、見つからない。

どうせ試合前には合流できるんだ。その時に声をかけておこう。

「それでは選手の皆さん、各待機場として指定されたピットへ向かってください。一般生徒の皆さんはもう少しその場で待機していてください」

司会である虚さんの声を聞きながらそんなことをぼんやりと考えていた。

開幕・タッグマッチ（後書き）

簪の機体作成風景はほとんど原作と変わりないのでカットしました。ただ、パートナー申請をした時期が原作よりも早いので打鉄弐式の完成度は原作よりも高いです。具体的にはミサイルのマルチ・ロックオン・システムが完成されてたりしてます。

ついでに、タッグマッチ前日の一夏と楯無さんの会話を簪が聞くイベントは起きていません。

そして次回からは苦手な戦闘描写が数連続で続きます。

・・・なんでこんな戦闘が多い形式にしちゃったんだろう・・・。

あと、丸数字って機種依存らしいんですが読めますかね？読めてないようだったら教えてください、訂正します。

一回戦

第一アリーナと第三アリーナは隣接しているため移動の手間は少ないが、唯一の男子である俺は着替えるために第四アリーナまで行かなくてはならない。これが結構遠回りしないといけないため、少し急ぐ必要がある。簪の様子も見ておきたいしな。

そう思っていざ行こうとすると、後から声がかけられた。

「あ、いたいた。織斑くーん！」

「黛さん、どうしたんですか？俺今から中距離ランニングしなきゃいけないんですけど」

「これこれ、さっきのやつのオッズなんだけどね」

と見せられた紙は、一番は楯無さんと箒、その次は2，3年の先輩タッグ、シャルとラウラの組と鈴とセシリアの組はほぼ同列。俺と簪はダントツ最下位だった。

「これがどうかしたんですか？」

「どうって・・・悔しくないの？舐められてるのよ？」

「そりゃ、簪は今まで行事に参加してなかったから実力がわからないですし、俺もただ男ってだけでどっかの国の代表候補ってわけでもないですし、仕方ないですよ。それに、今舐められてるならこれから見返せばいいんです」

「おおー、かっこいいこと言うわね。それじゃこっちに笑顔ちょうだい」

「え？」

カシャリ。笑顔を向けるどころか何一つできぬまま写真を撮られた。

「はい、写真もオッケー、コメントもさっきので十分ね。それじゃ私全員のところに回らなきゃいけないから、もういくわ。機体作りは私も協力したんだから、無様な結果は許さないわよ？」
「ええ、見ていてください。がっかりはさせないつもりです」

俺の言葉を聞いて満足気に頷いた後、ダッシュで走り去ってしまった。相変わらず行動力の塊のような人だ。
ていうか新聞部は黛さん以外いないのか？いつも一人で頑張ってるイメージがあるんだが。

第四アリーナまで行って着替えてから第三アリーナのピットへ向かう。正直試合前にこんなに走らせないで欲しい。
ピットの前まで行くと、簪が黛さんから取材を受けていた。あれって本当に全員にやってるんだ、一人で。

「それじゃあ簪さん、最後に一言ちょうだい」
「え、えと・・・が、がんばります・・・」
「えー、もっとかっこいいこと言ってよー。人気は一番低いけど、一番注目されてるのは簪さんの組なんだからね」
「え、えぇ・・・？なんで・・・」
「そりゃ今まで一度も行事に参加しなかった専用機持ちが行事初参加で、しかもそのペアが世界唯一の男なんだからね、当然でしょ」
「う、うぅ・・・」

簪と黛さんは一緒に作業をやってて結構仲良くなったみたいだな。
それ自体はいいことなんだが、今は簪が困ってるな。ちょっと助け舟を出すとするか。

「はいはい、黛さん。あんまり俺の簪にプレッシャーかけるのやめてくださいよ」
「「俺の？」」
「え？どうかしましたか？」

同時にこっちを向いて反応された。いや、俺の（パートナーである）簪にプレッシャーかけるなって言っただけなんだが。

「俺の・・・俺の・・・俺、れ・・・俺の・・・」
「その発言は是非とも記事にしたいけど、今はタッグマッチが優先か・・・しばらく保留になっちゃうわね」
「二人とも、何ぶつぶつ言ってるんですか？ほら簪、そろそろピット入って最終調整だ。黛さんもそろそろ違うとこ取材しに行ってください」

突然何かを唱え始めた簪の手を掴んでピットの中へ。黛さんは、それじゃあがんばってねー、と言って去っていった。

「い、一夏・・・その、俺のって・・・」
「ああ、物扱いしてごめんな。でもそれ以外うまい言葉が見つからなくって」
「そ、それって・・・」
「お、試合開始まで後１０分しかないぞ。心の準備はできたか？」
「・・・できてる」

ん？なんかいきなり不機嫌になったぞ。でも元気そうだし大丈夫かな。これなら俺の作戦もできるかもしれない。

「なあ、簪」
「なに・・・？」

「相手は楯無さんだが、大丈夫か？」
「・・・平気。一夏がいるから・・・」
「そうか」

俺がいるからっていう理由はよくわからないが、本当に大丈夫そうだ。それなら・・・。

「簪、俺考えたんだけどさ」
「何・・・？」
「楯無さんとまともに2対2で戦っても勝てる見込みは少ないと思うんだ」
「・・・うん」
「だからまずは弱い方、箒から倒そうと思う」
「いいんじゃないかな・・・」
「それで最初に、箒と楯無さんを引き離すのに簪に手伝って欲しいんだ」
「・・・なにをするの？」
「楯無さんに攻撃して欲しい。それで俺は箒に攻撃する。そうすれば簪と楯無さん、俺と箒で1対1みたいな戦いができる」
「・・・え？私が・・・あの人を・・・？」
「ああ、俺って実は楯無さんの戦闘を見た回数って少ないんだ。でも簪はデータとかの参考に見たりしたんだろ？」
「あ、あれは・・・そういうのじゃ・・・」
「逆に俺と箒は何度も戦ってる。だから相手の機体の特徴とかもよくわかってる。ただ、箒は俺の瞬時加速Ωは知らない。だからその分有利に戦えると思うんだ」
「え・・・でも・・・」

勿論それだけじゃない。
楯無さんは結構妹が気になってるっぽいからな、俺と戦うより簪と

戦う方が楯無さんとしては本気が出しづらいと思う。それに楯無さんは妹との仲直りも望んでいるはずだ。もしかしたら戦闘を通じてなにか会話できるかもしれない。そうすれば楯無さんのことだ、うまく簪と仲直りしてくれるに違いない。
簪だって別に楯無さんのことが嫌いなわけじゃないはず。ただ妹としてコンプレックスがあるだけなんだ。だから楯無さんと互角とは言わないまでも、それなりの勝負が出来ればその気持ちも薄まるはず。
こんなことを考えてるなんて簪には教えられないが、我ながらいい作戦なんじゃないか？

「無理にとは言わない。でも、これがうまくいけば勝てる可能性が高くなるんだ」
「・・・わかった」

簪は了承してくれたが、やっぱり怖がってるな。でもこうでもしないと楯無さんと向かい合う機会なんてないだろうし、我慢してくれ。

「でも一夏・・・早く来てね・・・」
「ああ、頑張るよ」

こうして俺と簪の作戦は決まった。試合開始と同時に俺が瞬時加速で箒に斬りかかる。簪は楯無さんに攻撃を仕掛ける。なるべく俺は二人から離れるように誘導して、楯無さんが箒に手助けできないようにする。あとは時間との戦いだ。俺はなるべく早く箒を倒して、簪のもとへ向かう。簪はその間楯無さんを引きつけておいてもらう。いい作戦とは言えないが、そこまで悪くもないだろう。あとは全力でやるべきことをやるだけだ。

「よし、そろそろ時間だ。行こうぜ、簪」

「・・・うん」

アリーナへ出て規定の位置まで移動する。箒と楯無さんは既に待機していたようだ。

「頑張ろうぜ簪、これが俺たちの始まりの第一歩だ」

『うん、でも、無理はしないでね』

「そっちこそ」

プライベート・チャネルを使って簪の様子をみる。楯無さんを目の前にしても大丈夫そうだ。これなら行ける。

『これより、タッグマッチ第三アリーナ第一戦を行います、準備はよろしいですね？』

「大丈夫だ」

「問題ない」

放送委員のアナウンスに答える俺と箒。

『それでは開始まで・・・5，4，3，2，1』

ビイイイイイ

というアラームと共に瞬時加速を使って箒へと斬りかかる。まあ当然紅椿の剣で防がれたけどな。

その勢いを利用して楯無さんと箒の距離を遠ざける。横目で楯無さんの方を見ると予定通り簪が楯無さんに仕掛けている。楯無さんもとりあえずは簪とやることに決めたっぽい。よし、最初はこれでいい。

そのまま箒に向かって雪片弐型を叩きつけ続ける。

「くそっ！いいかげんにしろっ！」

展開装甲で推進力を上げて距離を取られてしまった。だが、十分楯無さんからは離れることができた。

一旦攻撃の手を休めることができたのですぐに雪羅を呼び出す。試合開始前に持てる武器は事前申請した物一つだけなので、それ以外は試合中に取り出すしかない。

「今度はこっちから行くぞ、一夏！」

箒も今まで1つしか剣を持っていなかったが、今の間にもう一つを呼び出して二刀流となっていた。紅椿の基本装備は二刀流だからな。

箒はどうやら自分の展開装甲全てを推進力に当てるつもりらしい。

確かにエネルギーシールドは俺の零落白夜相手では意味が無い。エネルギーソードに変えるのはここぞというときに、ということか？

「これでもくらえ！」

そう言って箒は何も無いところに剣を空振りする。ん？なにやって・・・

「うお！」

あぶねえ！雪羅のバリアシールド展開がぎりぎり間に合った。

紅椿の剣はレーザーを飛ばして中距離戦闘もできるんだったな・・・忘れてたぞ。

「はあ！」

「うわっ！」

しかも今の防御してる間に後ろに回り込まれた。これも何とか防げたから良かったが、やっぱり推進力に展開装甲を当てた紅椿は異常に速い。
そのまま俺と箒は近距離での斬撃戦を始めるが、やっぱり向こうのほうが有利だ。これは、あの手を使ったほうがいいか？

「どうした一夏、こんなのものか！」

余裕の表情で攻撃し続ける箒。よし、だいぶ油断してるな。

「はあっ！」
「う、うわっ」

箒の勢いのついた一撃を見計らいわざと体制を崩す。体の軸がずれた。ニヤリ、と笑う箒が目に映る。

「これで終わりだ！」

その俺に向かって腕や周辺の展開装甲を攻撃に当ててエネルギーソードを展開した一撃を決めようとする。だが、それを待っていた。

「箒、好きだ！」
「はあ！？」

突然の俺の言葉に箒の動きが止まる。剣を振り上げた隙だらけの姿で。
箒は恋愛とかには疎そうだからな。突然仲の良い男に告白されたら混乱して思考が強制終了するはず、という俺の予想はあたったらしい。あんまり使いたくはなかったが真剣勝負なんだ、搦手を使って

でも勝ちに行きたい。

「勿論友達としてな！」

「は！？」

そのまま瞬時加速Ω、斜めを向いている今の状態から瞬時に相手の後ろに回り込む。通常の瞬時加速なら向いてる方向に進むから明後日の方角に飛んでいってしまうが、Ωを使えば方向転換をすることができる。

「しまっ「零落白夜あああああ！」」

単一保有能力を発動させ、隙だらけの箒に斬りかかる。よし、これでシールドバリアーを無視して一気に箒のエネルギーを削ることができ・・・あれ？

・・・俺の攻撃が、箒の展開装甲のエネルギーシールドに防がれている。

んなバカな！？俺の零落白夜は相手のエネルギーを無視して攻撃できるはずなのに、何で・・・。

そこで気づいた。零落白夜が消えている。発動自体はしたはずなのに、攻撃の直前に消えてしまったようだ。

瞬時加速Ωの話を聞かされたときにもうひとつ聞かされたことを思い出す。零落白夜での自爆を防ぐために自分のエネルギーが1になった瞬間に強制的に零落白夜が消える仕様にしたという話。だが、俺のシールドエネルギーはまだまだ残っている。・・・まさか誤作動か！？このタイミングで！？

「フ、フフ、フフフフフフフフ」

不気味な笑い声を聞いて我に返る。やべえ、なんか箒滅茶苦茶怒っ

てないか？

「この私をあんなふうにからかったんだ。当然覚悟は出来ているんだろうなあ・・・？」

ゆらぁっとこっちを向く箒。なんか身体からオーラが見えるぞ、真っ赤な鬼みたいな。

とりあえず雪羅を構える。勿論シールド状態で。

「その腐りきった性根をたたき直してやる！」

「う、うわあああああああ！！！」

そのまま二刀でシールドごと両断される。すごい威力だ。って、シールド破壊どころか絶対防御まで発動しやがったぞ！どれだけ力が込められてたんだ！

その勢いで吹き飛ばされる。これはまずいぞ、今の一撃で決めるつもりで挑んだのに、逆にこっちが大ダメージを受けちまった。しかも無駄に箒の怒りは買っちまったし。

再び雪羅を構え直す。今は荷電粒子砲状態だ。何故か箒はこちらにこないので狙いを定めて、

「うわ！」

と、突然後ろに何かがぶつかってきた。箒は目の前にいるのに、一体何が・・・

そう思って振り向いた俺が見たのは、ボロボロになった簪の姿だった。

「う、うぅ・・・」

「そん、な・・・」

苦しげにうめき声を上げる簪を前にして、俺は呆然とするしかなかった。
楯無さんは簪と仲直りがしたかったんじゃないのか？それをなんでこんなふうに・・・

「箒ちゃんと一対一なら勝てるとでも思った？簪ちゃんが相手じゃ私が本気を出さないとでも思った？」

今度は上からかけられた声に我に返る。楯無さんだ。

「だとしたらふざけてるとしか言えないわね。一夏君には少しがっかりだわ」

息も絶え絶えな簪とは対照的にほぼ無傷な楯無さん。いつものように堂々とした声で俺に話しかける。

「生徒会長である私が私情を挟んで手加減するわけには行かないでしょう？」
「大丈夫か！？簪！」

だが俺としてはそれどころではない。簪のほうが心配だ。ＩＳ自体にも結構ダメージがあるし、残りエネルギー量もそう多くない。このままともに戦うのは無理そうだ。

「あ、でも私に立ち向かえるぐらい自信がついたのね、簪ちゃん。それはすごく嬉しいわ」
「簪！」
「う・・・い、ちか・・・？」

よかった、ちゃんと意識はある。多分初めて絶対防御が発動するくらいの攻撃を受けた衝撃で意識が一瞬飛んでしまっただけだろう。楯無さんが手加減してくれるという当ては外れたが実の妹に怪我をさせたかったわけじゃなかったようだ。

「ごめんね・・・一夏・・・」

「え？なにがだよ」

「・・・私、できなかった・・・」

そこで初めて、簪が泣きながら震えていることに気づいた。そして、自分の愚かしさにも。

簪は最初から言っていたじゃないか、行事に出るのが不安だって。それに俺はなんて答えた？俺がサポートする？守る？できてないじゃないか。俺がやったことは強い相手を、簪にとっては恐怖の大王みたいな相手を押し付けただけ。それで俺は正しいことをしたと思い込んでいたんだ。

なんて馬鹿なんだ。不安じゃないわけがない。大丈夫なわけがない。それでも簪が頑張る気になれたのは、自惚れじゃなければ、多分、俺がいたからだ。それなのに俺は簪と別々に戦うような真似をした。パートナーだなんて言いながら、楯無さんと仲直りするためとか言いながら、結局俺は簪のことを何も考えてなかったんだ。

俺がやるべきだったのは、パートナーとして簪と一緒に戦うこと。それだけだったのに。

「俺こそゴメン、簪。遅くなったけど、今からでもお前のことを支える。だから許してくれ」

もう簪の気持ちをないがしろにしたりしない。俺は簪と共に戦う。さすがに今すぐに簪が復活するのは無理そうだけど、もう少ししたら行けるはず。だからそれまでは俺が頑張るとしても、それからは

チームとして、二人で楯無さんに挑もう。
上でこちらの様子を見ながら待っていてくれた楯無さんの方を向く。
いつの間にか箒も楯無さんの側に飛んでいた。

「あら？さっきよりはいい目になったわね」
「ええ、目が覚めました。だから今からすることは俺の罪滅ぼしです。簪と一緒に戦って、あなたに勝ちます」

雪片弐型と雪羅を構える。狙うのは瞬時加速による接近、それに対応される瞬間にΩを使って別方向から一撃加える。零落白夜は・・・発動しない。まだ誤動作は続いてるみたいだ、これも変なこと言った罰だな。でも、それでも俺はやる。やってやる。

「行くぞ、白式！」
「あ、でもそろそろ終わりにするわ」

そういいながら楯無さんは真上に向かって右手を突き出す。
何をやるつもりだ？だがなにか起こす前に攻撃すれば関係ない。

「次の試合に影響が出ない程度の威力にしてあげるわね。私も次に響かせたくないし」

楯無さんの言葉をまたずに瞬時加速を使う。が、推進力全開の紅椿に止められた。そのせいで一瞬動きが止まったが、反撃しようとするとすぐに離れられてしまった。でもこれで俺と楯無さんを遮るものはない、もう一度瞬時加速で・・・。

「威力は全力時の５分の１ぐらいにしてあげるわ」

だけど、その一瞬が命取りだった。楯無さんがやろうとしていた何

かはもう完成してしまっていた。

「《ミストルティンの槍》」

その瞬間、視界が真っ白に染まった。

一回戦（後書き）

後半の一夏の心情描写がなんかうまくできなかった・・・。
もっと文をうまく書けるようになりたいです。
ミストルテインの槍を人間が乗ってるＩＳが食らったらさすがにまずいんじゃないかって意見は、威力を抑えてるから大丈夫という方向でお願いします。

二回戦・上

気づいたら保健室に運び込まれていた。
とりあえず時間を確認すると、１回戦が始まる時間から１時間ほど経過した後だった。
あの試合が何分ほどで決着がついたのかはわからないが、それでも分かることが２つある。
俺達があの試合で負けたことと、後３０分ほどで２回戦が始まるということだ。
身体を起こす。うん、楯無さんが言ってたとおり、次の試合に響かない程度の威力に抑えてくれたらしい。特に身体に問題はない。

「一夏、起きたの・・・？」

カーテンに仕切られた向こう側から簪の声がする。
すごく、弱々しい、試合前まであった僅かな自信が欠片も見当たらない、そんな声だった。
これが俺の浅はかな行動の結果なのか。もし二人で一緒に戦っていればこんな事にはならなかったのか。せめてあそこであんな簡単にやられなければ。
そんな後悔で頭の中がいっぱいになった。

「一夏・・・？」
「あ、ああ。大丈夫だ。もう起きたよ」

そんな思いを悟られないようにできるだけ明るく声を返す。
後悔しても何もならない。俺がやるべきことは簪と共に戦うこと、簪との約束を裏切ったことを償うことだ。そのためにも次の相手、鈴とセシリアだったか、には絶対に負けられない。

カーテンを開けて沈んだ顔でこちらを見ていた簪の傍へ行く。

「一夏・・・私、もうやだよ・・・」

そうつぶやく簪の目は赤かった。多分泣いていたんだろう、何もできずに負けてしまった自分の情け無さと、なかなか目を覚まさない俺を心配して。

「もうやめたい・・・出たくない・・・」

そう訴える簪を見て心が痛むが、ここで棄権するわけにはいかない。このままじゃ俺が簪に対してひどいことをしたってだけで終わってしまう。簪が更に自信を無くして終わってしまう。それだけは避けたい。だから俺はその言葉に頷くわけにはいかない。

「簪、すまなかった。もう二度とお前を裏切ったりはしない。簪と一緒に戦う。だから俺にもう一度だけチャンスをくれ。簪も、俺と一緒にもう一度だけ戦って欲しい」

そう言って頭をさげる。簪にとっては酷かもしれないが、それでも戦って欲しい、そう祈りを込めて。

簪は最初迷っていたが、それでも最後には

「・・・わかったよ。私も、本当はまだ諦めたくない」

そう言って笑ってくれた。

明らかに頑張って作った笑顔だったが、それでも俺にはすごく力強く見えた。

第三アリーナに行くと、既にセシリアと鈴も来ていた。

『一夏、さっきの試合観てたわよー。ほんとひっどいことするわねえ』

プライベート・チャネルを使って鈴が話しかけてきた。ひどいことというのは先程の簪のことだろうか。

「ああ、悪かったと思ってる。だけどもうあんな事はしない」

『あんた、あいつが何であんなに怒ってたか、理由はわかってるの？』

怒ってたという感じじゃなかったが、まあ理由はわかってる。

「俺が約束を破っちまったからだ。だから鈴に勝って簪に償わなきゃな」

『はあ？かんざし？』

「ああ、そうだ」

『簪って横のそいつよね？』

簪の方を指さす鈴。おい、人のことを指さすなよ。状況が分からないで簪が怖がってるじゃんか。

『なんでそいつが出てくるのよ？あ、あんたまさか怒ってるのって簪の話だと思ってんの？』

「え？ちがうのか？」

『んなわけないでしょ！箒よ、箒！だいたいなんでそいつが怒るの・・・はっ！』

何で箒が出てくるんだよ。楯無さんならまだしも箒はこの件には何の関係もないだろ？

って、どうした？なんか鈴から邪気が出てるぞ。

『あんたまさか、箒に・・・あ、あ、あ、あんな事言ったってことが裏切りになっちゃうような、そんな約束をその子としたってわけ・・・？』

「お、おい、鈴？大丈夫か？」

『大丈夫な訳ないでしょ！あんた私との約束は簡単に忘れるくせに・・・』

「鈴との約束って、酢豚をおごってくれるってやつか？覚えてるじゃんか」

『うるさーい！もういいわ、会長にボコボコにされてたからちょっとは手を抜いてあげようと思ってたけどもうやめるわ！殺す！』

「はっ、よくわからねえけど本気でこいよ。それを倒して初めて俺と簪はまた今まで通りの関係に戻れるんだ」

手加減されて勝ったって何にもならない。全力の相手に全力で勝つから簪もまた自信を取り戻せるし、償いになるんだ。何で怒りだしたのかはわからないけど手を抜かれるよりよっぽどマシだぜ。

『あああああ！今まで通りの関係って何よおおおお！むかつくううううう！！！！！』

でも発狂されても困るんだけどな・・・。

お、なんかセシリアが鈴の傍に行った。さすがに相方の挙動のおかしさに気づいたんだろう。

まあでもセシリアがなだめてくれるなら鈴のことは心配要らないかな。

『一夏さん！鈴さんが言ってることは本当ですの！？』

と思ったそばからセシリアからもプライベート・チャネルで話しかけられた。

「どれのことを言ってるのかわからないんだけど・・・」

『簪さんとしたという約束のことですわ！』

「約束はしたけど」

『な、なんですって！？く、くぅぅ、一番遅れてきたくせにぃ！』

・・・さっきから二人はなんの話をしてるんだ？

「・・・一夏、そろそろ時間・・・」

「お、もう試合が始まるな。それじゃ鈴、セシリア、お互い本気で行くぞ」

簪にいわれて時間を確認すればもう開始時刻間近だ。気を引き締めないと。

『ちょっと一夏、まだ話はすんで・・・』

『そうですわ一夏さん！もっと説明を・・・』

まだなんか言ってる鈴とセシリアとの通信を強制終了。さすがにおしゃべりなんかしてる場合じゃないからな。

向こうにとってはどうだか知らないが俺にとってこれは真剣勝負以上に真剣になるべき試合だ。また変な油断をして簪を悲しませるわけにはいかない。

「頑張ろうぜ、簪」
「うん・・・」
簪はさっきよりは顔色が良くなっているが、それでも一回戦前よりは元気が無いように見える。
もし簪がミスをしても絶対に俺がカバーする。それが支えるってことだからな。

『それでは両者とも、準備はよろしいですか？』
「いつでもいいぜ」
「やってやるわ！」
放送委員のアナウンスに答える俺と鈴。・・・だから何で鈴は怒ってるんだよ。

『それでは開始まで・・・5，4，3，2，1』

ビイイイイイ

というアラームと共に俺は雪羅を展開。簪も自分の武装を展開した。
しかし相手はそうしなかったらしい。鈴が単騎でこっちに突っ込んできた。前回の俺を見ているようで少し苦々しい。
だけどひとりで来るなら好都合だ。いくら接近戦が得意とはいってもさすがに2対1ならこっちが有利だろ！

「行くぞ！零落白夜！！」

零落白夜を構えて白兵戦に持ち込む。簪も自分の刀を取り出して鈴を後ろから攻撃するつもりのようだ。

此処に来る前に確認したら零落白夜は使えるように戻っていた。これでまた使えなかったら俺の主力がなくなっちまうところだったからな、よかったぜ。

――警告！敵ＩＳに狙われています――

「！！」

鈴にだけ集中していたのに、しかも一瞬余計なことまで考えてしまったのに、その攻撃を何とか避けることができたのはさっきの試合の油断による無様な敗北があったからだろう。

突然上空から俺を狙ってレーザーが放たれたのだ。いや、よく見てみれば簪も体制を崩している。向こうもレーザーで狙われたのだろう。

「何呆けてんのかしら！一夏っ！」

「くっ！」

正面から振り下ろされた青龍刀を雪羅のシールドで防ぐ。そうだ、今のレーザーに気を取られている場合じゃない。まず目の前にいるこいつをどうにかしないと。

――警告！――

「なにっ！？」

しかし正面の攻撃は防いだものの、背後から2基のビット、セシリアの『ブルー・ティアーズ』に狙われていた。

シールドで防がれてるのに鈴が青龍刀を押し付け続けてるのはこのためか。俺が後ろのレーザーを避けるためにシールドを解除したら動く前に青龍刀にやられる。このまま動かなければレーザーにやられる。相手が反応できないほどの速さで動こうにも、それが唯一で

きるであろう瞬時加速は正面、つまり鈴の青龍刀がある方にしか動けない。
どう動こうにも一撃喰らうってわけだ。
簪のように遠距離攻撃が豊富な相手には効かない手だが、俺みたいに近距離一辺倒の相手になら効くと思ったんだろう。確かに正解だ。もし俺が以前までの俺だったらな。

「あ！」

鈴の驚いた声を尻目に瞬時加速Ωを使って青龍刀を避けて進む。そのまま簪を取り囲んでいる４基のビットのうち１つを破壊した。
そう、今の俺には瞬時加速Ωがある。これなら瞬時加速を使ってもまっすぐ相手に突っ込む以外のこともできるようになる。今みたいに敵の虚をついた攻撃とかな。

「ありがとう、一夏・・・」
「気にすんな、パートナーだろ。それよりこの攻撃はセシリアか。厄介だな」

セシリアが俺と戦ったとき、俺はブルー・ティアーズの弱点を利用して戦った。
ビットの攻撃が俺の隙のある場所を狙ってくる、つまり攻撃場所を誘導できること。それと、ビットを操っている間セシリア自身は無防備になるというところだ。
しかし、ペアがいる今その弱点はなくなったと言っていいだろう。隙のあるところを見せたりなんかしたら鈴に攻撃されるだろうし、セシリアのところへ近づこうとしても鈴に妨害されるだろうからだ。それにこちらの連携を妨害することも忘れていない。今だって簪が鈴に攻撃をすればあの状態から抜けることは簡単だった。しかしそれが出来ないように俺のところに回していないビットを簪へ遣り、

互いに相手を助けることができない状況をつくりだしていた。
かなり手ごわいペアだ。息もあっている。
だがそれでいい。
ペアとして完成されている相手を倒してこそ俺達のペアとしての結束が増す。簪も自信を取り戻してくれる。

「いくぜ、簪」
「うん・・・」

どうにかするべきはセシリアのビットだ。だがまずは、

「一夏！なにいちゃついてんのよ！死ねっ！」

青龍刀を振り回しながらバーサーカー状態になってる鈴に対処するのが先だな。
鈴の動きにあわせて周囲のビットも動いていく。目に見えてる相手は二人なのにもっと多くの敵を相手にしているかのようなプレッシャーだ。ここが踏ん張りどころだぜ、俺。

二回戦・上（後書き）

終わり方がどうすればいいのかよくわからない・・・。なんか締まらない終わり方になってしまったと反省中です。
正直タッグマッチ全５試合中この試合だけは今だに明確な内容を考えていません。全体の流れぐらいなら考えてるんですが・・・。
なのでどのぐらいの長さになるかわからないので無駄に長くなる前に前後編へ。よって二回戦が次回すぐ終わってしまったら次の話はものすごく短くなるかもしれません。ごめんなさい。

二回戦・下

「死ねっ！」
「うわっ！あぶねえ！」
「きゃっ・・・」

俺と簪の間に割って入るような鈴の攻撃は普通に避けることができる。だがその周囲に展開されている５基のビットから繰り出されるレーザーを避けるのはかなりキツイ。だが、確かセシリアの使うビットは今のところ６基。さっき俺が１基倒したから残り５基。それならセシリアの周囲はガラ空きのはずだ。

「後から来たくせにいいいいいい！！！！」
「え、どういう意味・・・？」
「簪！山嵐だ！」

よくわからないことを叫びながら簪へと追撃する鈴の一撃をΩを使って回りこんで受け止める。ビットから繰り出されるレーザーは俺を狙っているものはなんとか回避し、簪を狙っているものは雪羅のシールドで食い止める。
正直辛いが、簪しか遠距離攻撃はできない。ここで多少のダメージを受けてでもセシリアを倒さないとまずい。なので簪のＩＳ『打鉄弐式』の最大装備、最大４８発のミサイルを発射できる『山嵐』を使う。あれなら全弾命中は無理でもかなりのダメージを与えることが出来るはずだ。
さらに山嵐のマルチロックオンシステムならばビットも同時に攻撃することが出来る。セシリアへの攻撃が何らかの手段で防がれた場合も、操れなくなったビットを破壊できる。王手飛車取りだ。

「わ、わかった・・・」
「よし、囮は任せろ！」
というわけで鈴に向かって攻撃、しかしあまり簪のそばを離れずに。ビットの射線に簪が行かないよう誘導する。それが俺の役目だ。
「行くよ！一夏！」
「おう、行け！」
そして４８発のミサイルが打鉄弐式のミサイルポッドから上空にいるセシリアに向かって発射された。
セシリアもそれに反応しようとしたのか、ビットの動きが止まった。そしてそれにより山嵐のミサイルがビットにも命中する。これでセシリアが健在であっても戦闘力としては激減したはずだ。
そう思って結果を確認しようと上を向いてしまい、その隙に鈴の一撃をモロに食らってしまった。
「どこ見てんのよ一夏。私と殺りあってるって言うのにずいぶん余裕じゃない？」
「たしかにそんな余裕はなかったな。でもいいのか？セシリアのことは気にかけなくて」
「ふふん。セシリア？別にどうでもいいわ・・・よっ！」
「うわっ」
さっきのミサイルにも俺の言葉にも一切動揺せずに攻撃を続けてくる。だが、ビットの支援がない今の状態での斬り合いなら負ける気はしないぜ！
零落白夜を発動させ、少し距離を取る。
「逃げるんじゃないわよ！」

思ったとおり鈴はこちらに突進してきた。その突進をΩを使い闘牛士のように回りこみ、斬る！

「え！？きゃあ！」

よし！あたった！零落白夜の一撃だからいいダメージのはず。よし、さらに追撃を・・・

「一夏！避けて！」

「え？うわ！」

簪の呼び声と同時に上からレーザーが降ってきた。セシリアか。やっぱりあれぐらいじゃ倒すには至らないか・・・。

「ちょっとセシリア、話が違うじゃない！一撃食らっちゃったわよ！」

「お、思ったより簪さんの射撃がダイナミックで驚いただけですわ！もう大丈夫でしてよ！」

なんか二人が言い合っている隙に簪の傍へ。

「ごめん、一夏・・・。ビットは3基落とせたけど、本体への攻撃はあんまり・・・」

「そうか、でもビットを減らせただけで十分だ。にしてもあれだけのミサイルを防いだってのか？」

「う、うん・・・。よくわかんないけど」

「とにかく、一回使ってしまったので、またしばらくは無理ですわ！」

「わかってるわよ！まあいいわ、こっちで一夏を倒せばいいだけだし」

そう言って構え直した鈴の周囲で旋回する2基のビット。よし、2基ぐらいなら二人がかりでやれば問題ないはず。

「よし、行くぜ簪！」

「うん！」

俺自身もエネルギーは減ってきているが、先ほど鈴には零落白夜をクリーンヒットさせた。あれは結構なダメージのはず。簪はほぼ無傷だし、セシリアには多少なりともミサイルでダメージを与えられたはずだ。もうこっちのほうが有利だぜ。

「くっ・・・！」

「零落白夜！」

「夢現・・・えい！」

予想通り鈴は俺達二人の攻撃に押されている。やはりレーザーも2本だけでは牽制にはなるが、脅威にはならない。行ける！

「そうは行きませんわ！鈴さん、もうやれますわ！」

というセシリアの声がした直後、レーザーが俺の背中に向かって放たれた。すんでのところで直撃だけは避けたが、それでも少しダメージを受けてしまった。

なんだ？狙われたのならば警告が出るはず。だが、今のはそれが出たのが一瞬だけだった。警告が出てから被弾まで1秒もなかったように感じた。

「遅すぎんのよ！ちょっと手こずっちゃったじゃない！」
「お待たせしましたわね、鈴さん。でも、フレキシブルもやっと安定しましたわ」
「フレキシブル・・・だと・・・？」
「ええ、私の偏向射撃（フレキシブル）、少々わけあって発動させるまでに時間がかかってしまうのですが、もうその時間も稼げましたわ。さあ、踊りなさい！」

2基のビットが上空を舞う。互いに対処すべきビットは一つずつ、数だけ見れば落とせそうな気もするが、不規則な動きの上に鈴への対処も同時にしなければならなかったので今までその機会がなかった。
さらにセシリアの偏向射撃まで来てしまっては打つ手なしじゃないか？

「って、危ない、簪！」
「きゃあ！」

偏向射撃で曲がってきたレーザーが簪を狙っていたので、その間に割って入る。シールドを展開する時間がなかったので当たってしまったが、簪は無傷だ。

「一夏、大丈夫・・・？」
「ああ。それより、今のセシリアはレーザーを曲げられる。今まで以上にレーザーに注意して、隙を見つけたらとにかく打ち込もう」
「わ、わかった・・・」
「ほらほら、作戦会議なんてしてる暇はないわよ！」

こちらに来た鈴に対応、簪はレーザーを警戒して少し距離をとった

みたいだ。とりあえず俺が前衛、鈴に隙を作るから射撃を頼むぜ、簪。

その後、互いに決定打のないまま、しかし俺のシールドエネルギーはすこしずつ削られていった。
簪の射撃により鈴のシールドエネルギーも少しずつ減らせてはいるが、俺のマイナスの方が大きいだろう。

「ふふん、くらいなさい！一夏！！」

って、レーザーを回避するので鈴に気が行かなかった。だが、これくらいなら・・・

「うわ、あぶね！」
「にゃ！？」
ドゴーン！

・・・今起きたことを説明するとだな、後ろから偏向射撃を使って俺に当てようとしてたらしいレーザーに気づいてオメガを使って避けたら、正面から突進してきた鈴が代わりに命中してしまったんだ。

「ちょ、ちょっとセシリア！何すんのよ！」
「今のは突然鈴さんが突撃してきたんじゃありませんの！私は悪くありませんわ！」

この二人、さっきまでは息がぴったしだったけど、今はそうでもないな。・・・まさか。

「鈴、もしかして偏向射撃状態でのタッグ訓練ってあんまりしてなかったのか？」

「してるわけないでしょ！実戦だったからか今回は割と早かったけど、いつもなんかこの5倍はかかってんのよ？そんなに待つほど暇なわけ・・・あ」
「やっぱり」
「ちょっと鈴さん！何で私達が偏向射撃の時の相性が最悪だなんで教えちゃいますの！？」
「そこまでいってないわよ！」

――一夏は知る由もないが、セシリアのブルー・ティアーズは元々一対複数戦に特化しており、そして偏向射撃を使うときには更にその特色が強まる。ちゃんと練習時間を長くとった通常状態ならともかく、あまり時間を取らなかった偏向射撃状態でのタッグ戦では、十全に活躍できるはずもない。
それでも偏向射撃が使われたのは、せっかく身につけた技を使わないのは嫌だと言って退かなかったセシリアと、話しあってもあまりインパクトのある切り札が思いつかなかったことが原因である。――

やっぱり、二人の連携は偏向射撃に合ってない。この隙を付けば、勝てる！
と、思っていたその時

「えい」
「きゃああ！」

簪が未だに言い争いを続けている鈴に荷電粒子砲をぶっぱなしていた。

「隙を見つけたら・・・撃つ」
「な、何すんのよおおおお！」

怒った鈴が簪に向かって青龍刀を向ける。しかし簪も即座に自分の近接武器である夢現に持ち替えて応戦していた。
セシリアも、さすがにあれの直後では迂闊に偏向射撃を使えないようだ。ただのレーザーで簪を狙うが、そんなの俺が許さない。雪羅のシールドモードで防ぎ回る。
簪と鈴の攻防は、やはりというかなんというか、鈴の方が一歩有利だった。だがそれもここまで、俺が加勢するぜ、簪！

「俺を忘れんなよな！鈴！」

そう言って零落白夜を構えて鈴に斬りかかる。こちらへの反応が間に合わなかったのか、直撃させることができた。
さすがに二度目の零落白夜直撃じゃもうまともに動けないだろう。鈴はもういい。

「次はセシリアだ！」
「な！鈴さん！？・・・コホン、まあいいですわ！ブルー・ティアーズは元々一対多数の戦闘が得意なんですのよ！鈴さんがたとえ居なくなったとしても、まだ負けとは限りませんわ！」
「簪、ビットをとりあえず止めるぞ！」
「・・・うん・・・」

簪も疲れているのか少し元気が無い。だが、後もう少しだ。
俺と簪は周囲のビットを狙う・・・と見せかけて、俺はセシリアに瞬時加速で突進する。

「・・・一夏さん、私と最初に戦った時のことを忘れまして？」

そして、そんな俺を待ってましたとばかりに迎え撃つセシリア。わ

かってる、ミサイルだろ？記憶喪失が治ってる今の俺が、俺の初めての本格的なＩＳ戦闘を忘れてるわけないだろ。

「今の私が使えるブルー・ティアーズは、６基で終わりじゃありませんわ！」

セシリアのスカート状アーマーが外れ、ミサイルが発射された。あの慎重なセシリアが、自分の使えるビットを全部鈴に預けてるとこは考えづらかったからな、予想通りだ。
そして、そのミサイルに当たるのは以前までの俺だけだ。

「最後はあっけなかったですわね」

目の前の硝煙を見てそうつぶやくセシリア。だが、まだ終わっちゃいないぜ。

「忘れたのか？今の俺にはΩがあるんだよ！」
「え？きゃ、きゃあああ！！」

Ωで瞬時にセシリアの後ろに回り込み、零落白夜で斬る。直撃したその勢いで飛ばされたセシリアの先にいるのは、

「春雷・・・」
「なっ！」

２門の荷電粒子砲を構えた簪だ。
打ち出された粒子に貫かれ再度こちらに飛ばされてくるセシリアに巻き込まれないよう、荷電粒子砲の射線上からずれてところで零落白夜を解除する。

「く、シールドエネルギーがもうあんまりありませんわ・・・」
「だから、これで終わりだ！」
「え、まだ続きますの！？」
「くらえ、雪羅カッター！」
「きゃあああああああ」

さっきの二激と比べて非常に地味な攻撃方法だが、今のセシリアの残りエネルギー量を考えて零落白夜だと後の試合に響いてしまうかもと考えた結果、雪羅のクローモードの一撃（雪羅カッター）で止めを刺すことにした。
事実、セシリアのシールドエネルギーはもうほとんどなかったようで、エネルギーが尽きた結果下へと落下していった。
・・って下！？セシリア、無事か？
そう思って急いで下を確認すると、簪がうまく受け止めてくれていた。よかった・・・。

ビイイイイイイイ

『試合終了。勝者、織斑一夏・更識簪ペア！』

わあああああああああああああ！！！

その瞬間、試合終了を告げるブザーと、俺達の勝利を告げるアナウンスと、ギャラリーの歓声が同時に響き渡った。
やった・・・勝ったんだ・・・。

「やったぜかんざしいいいいいいい！！！」

「う、うん！やった・・・やったね、一夏・・・！」

思わず全速で駆け寄って抱き付き合う俺ら。簪なんかセシリアをそのへんにポイしてからだ。

まあ抱き付き合うと言ってもお互いＩＳに乗ったままなので、お互いの身体に触れているわけでもなく、ただ距離的に近くなったというぐらいなのだが。

「はっ！い、いちか・・・ちか・・・近いよ・・・？」

「おう！そうだな！」

なぜか急に顔を赤くする簪。戦っている最中は感じなかった興奮が今きてるんだろうか。

とは言え俺も嬉しくて正直簪が何を言ってるのかよくわからないまま返事を返してしまった。まあ多分、勝てたよやったね！みたいなことだろう。

「ぐぐ・・・負けたのはこっちですけど、こうも目の前でいちゃつかれるとむかつきますわ・・・」

「・・・・」

「鈴さん？どうかいたしまして？」

「・・・なんでもないわ」

いつの間にか鈴とセシリアは合流していたらしい。

「鈴！セシリア！楽しかったぜ！」

「それは勝ったほうだから言える言葉ですわ！・・・でもまあ、私も楽しかったですわよ。一夏さん、次は負けませんわ！」

「ああ、またやろうぜ！」

『はーい、試合が終わったら、アリーナの整備があるので各チーム

ともすみやかに退出してくださーい！』
「やべ！それじゃ、行こうぜ、簪」
「う、うん・・・」
放送委員の催促が入ったのでおとなしく従うことにする。
今回の試合は勝つことができた。簪も試合前までの不安そうな表情とは違った顔になっている。
「よし、この調子で次の試合も頑張ろうぜ！」
「そうだね、一夏・・・」

『そんなの、私だって同じなのに』
その鈴の呟きは、誰の耳にも届くことなく消えていった。

二回戦・下（後書き）

更新遅くなりました。申し訳ありません。
次はもう少し早くできるよう努力します。
最後の鈴のセリフに関しては、次回。

休息

打ち合いの僅かな時間の中、彼女は言った。

『何であんたが一夏に選ばれたの？』

――わからない。

『なにそれ。きっかけとかあったでしょ』

――あったのかもしれないけど、わからない。突然だったから。

『あいつは私達の誘いを蹴ってまであんたと組んだのよ？理由がないわけないわ』

――・・・ごめん。

『謝らないで、余計惨めになるわ。はん、じゃあ一夏があんたに一目惚れでもしたっての？』

――そうなの、かな。

『こっちが聞きたいわよ。だってそうでしょ？もしそうなら私達ってなんだったの？ずっと一夏のことが好きで、今までアピールしてきたのに全然振り向いてもらえなくて、最終的には一夏の一目惚れで負けたなんて、笑い話にもならないわ』

――・・・

『一夏があんたを選んだって言うなら、私にとやかく言う資格なんてないのかもしれない。でも、一つだけ聞かせて。あんたは今何で一夏のそばにいるの？』

――それは、突然・・・

『そうじゃなくて、あんたの気持ちよ。あんたはただなあなあで一夏のそばにいるだけ？別に好きでもなんでもないけど、ただ便利だからそばに置いてるだけ？もしそうなら、私はあんたを許さない』

――ちがう・・・そんなこと、ない。

『じゃあ、あんたは一夏を好きなの？』

――・・・私、毎日がつまらなかった。姉も、周りの人も、自分も、何もかもが嫌いだった。でも、一夏はそんな毎日を変えてくれた。一夏のおかげで、毎日が楽しく過ごせるようになった。一夏のおかげで、私は変われたの。まだ、私が一夏に持ってる感情が恋愛感情なのかはわからない。・・・けど、私は心の底から、一夏と一緒に居たいって思ってる。それは、間違いない。

『・・・なによそれ。そんなの・・・『俺を忘れんなよな！鈴！』

一夏の乱入でその先の言葉を聞くことはできなかった。

「やったな簪！よし、次もこの調子でいこうぜ！」
「・・・うん」
「簪のミサイルもうまく動いてくれてよかったな！」
「・・・うん」
「次の相手は上級生ペアかー。どんな相手なんだろうな」
「・・・うん」
「・・・今日の昼は簪の奢りでいいか」
「・・・うん・・・うん？」
「おお、少し反応が変わった」

簪は試合が終わった直後は普通だったんだが、少し時間がたった今ではなんか大人しくなっちまった。

「なあ、体の調子でも悪いのか？無理はしないほうが・・・」
「だ、大丈夫・・・。やれる、やれるから・・・」
「そうか？緊張してるだけかな」
「多分、そう・・・」

そんな事言ってもやっぱり心配である。でもまあさっきまでと違って試合を怖がってるってわけじゃなさそうだから大丈夫かな。

「・・・ね、一夏」
「ん？何だ？」
「何で一夏は・・・私をペアの相手に選んだの・・・？」
「どうしたんだ突然？」
「ちょっと、気になって・・・」

む、どう答えるべきか。楯無さんのことは内緒にしてって言われてるからなあ。
まあ以前までと同じことを言うのが無難だろうな。

「最初に言っただろ？簪と仲良くなりたかったからだよ」
「あの時、私と一夏に接点はなかったはず・・・どうして・・・？」
「え、ええと・・・廊下で、たまたま簪のことを見かけたんだよ。それで、ちょっと気になって他の人に話を聞いたら代表候補生だって教えてもらってさ。接点がない相手だから、少し話しかけづらかったけど、大会のペアの申し込みなら自然に仲良くなれるかなと思って」

これは理由説明になってるのか？そもそも何で廊下で見かけた程度の人のことを調べるんだ、とか突っ込まれたらどうしよう。
だが俺のそんな心配をよそに簪は顔を赤くしてうつむいただけだった。

「どうした簪？やっぱり体調が良くないんじゃ・・・」
「だ、大丈夫だから・・・。それより、つまり、私を一目見て気になったってこと・・・？」
「ああ、そういうことだ」
「そ、そうなんだ・・・」

む、少しひかれたか？やっぱり不自然かな、でもこれ以外に特に思いつかなかったし、仕方ない。

「ね、ねえ、一夏・・・」
「おう、なんだ」
「私、まだ自分の気持ちがはっきりわかってないの・・・ごめんね」
「え？ああ、そうなのか」

突然何を言い出すんだ？
「でも、このままじゃ一夏にも、皆にも悪いから・・・だから・・・」
「だから？」
「こ、今度の日曜日・・・一緒に、どっか行かない？そこで、答え、決めるから」
「ああ、いいぜ。そういえば休みの日も練習と調整ばっかりでどこにも行かなかったもんな。どこ行こうか？」
「そ、それは、これが終わってから・・・」
「おう、そうだな。とりあえずは次の試合に集中しないとな」

よくわからないけど、気晴らしがしたいってことだろうか。自分の気持ちって言うのは、やっぱり試合が怖いかどうかってことだろう。だからとりあえず楽しみを自分なりに作って、モチベーションを上げて次の試合に望みたいと、そういう事だろ、多分。
それくらいならお安い御用だぜ。

ということなので試合に集中することにする。
けど今回は今までとは違い一度も試合をしたことも試合を見たこともない相手だ。だから対策を打とうにも打ちようがないんだよな。

「だからとりあえずぶっつけ本番するしかないな。次の試合までは２０分ぐらいあるけど、どうする？」
「ＩＳの整備しないと・・・特に一夏は・・・」
「え、なんで？」
「１回戦でも、２回戦でも、一夏のほうがダメージが大きいから・・

・見てあげないと動作不良になるかも・・・」
「ま、まじか。そういえば1回戦でも零落白夜がおかしかったな。2回戦じゃあ平気だったけど」
「そうなの・・・？じゃあそこも見たほうがいいかも・・・」
そんな会話をしながらアリーナ付属の整備室へ行くと、中には二人の先客がいた。

「あ、世界唯一の男だ」
「お、次の対戦相手ッスね」

ケイシー先輩とサファイア先輩である。

「どうも。って、二人とも何でこんなところに？」
「お前な、整備室にいるんだからＩＳの整備に決まってるだろ」
「あ、それもそうですね」
「んなことよりさっきの試合見たぞ。動きが皆ぎこちないんだけど、やっぱりダブルスって慣れてないのかね」
「はあ、そうですね」
「あと私は見てなかったからよく知らないけど、1回戦の織斑一夏偽告白事件。あれはひどいって皆噂してたぞ。私もあれはよくないと思う」
「嘘つかないでくださいよ先輩。それ聞いたとき大爆笑してたじゃないッスか」
「いや、そりゃ笑うだろ」

二人とも何の話してるんだ？っと、そんな事してる場合じゃない。早いとこメンテしないと。

「じゃあ俺らは少し整備したいんでこのへんで」

「おーう、まあお互い次の試合がんばろうや。簪も良かったな、外に引っ張り出してくれるヒーローが見つかって」
「・・・はい」
「あれ？簪とケイシー先輩って知り合いなんですか？」
「まあな。楯無とちょっと縁があって、そのつながりで少し話したことがあるんだ」
「へぇ、そうなんですか」
「・・・一夏、そろそろ」
「あ、そうだな。じゃあ失礼します」
「おー、また後でな。・・・つっても同じ部屋にいるんじゃ締まらねえな。よし、フォルテ。私らは先に外行ってジュースでも飲んでようぜ」
「いいッスね。そうしますか」

そんなこんなで先輩たちは整備室から出ていき、俺達は残った十数分を整備に費やすことにした。
特に目立った異常は見当たらなかったが、結構傷ついていた部品を別のものに変えるぐらいはできたので有意義だったと思う。

「さて、そろそろ試合だ。行こうぜ、簪」
「・・・うん」

次の相手は先輩コンビ、相手にとって不足なしだ！頑張るぞ！

休息（後書き）

オリジナル設定だから書きやすい・・・そんなふうに考えていた時期が僕にもありました。
頭の中で考えるのと文字に起こすのではやっぱり違いますね。全然書きやすくありませんでした。
このまま戦闘シーンを入れようとするといつ投稿できるかわからなくなってきたので先輩との軽い絡みでお茶を濁します。ごめんなさい。

三回戦・上

第三アリーナへ行くと、既に待機していた先輩方二人のうち、褐色肌の方、ケイシー先輩が大きく手を振って話しかけてきた、

「おーい、織斑！向こうの自販機に売ってる抹茶コーラってのがすげー美味いから後で飲んでみろ！」

「抹茶コーラ？・・・それってどう考えても地雷な気がするんですが・・・」

「うるせー！いいからお前も飲んで私と同じ絶望を味わえ！」

「やっぱまずかったんじゃないですか！飲みませんよそんなの！」

試合前だって言うのに緊張感のかけらもない会話だな・・・。

「ちなみに織斑君。私の飲んだ微炭酸ラストエリクサーは名前は面白いけど味は普通だからほんとに微妙な結果になるッスよ」

「だから、そんな変なもの飲みませんって・・・」

サファイア先輩も混ざってこなくていいですから・・・。

「あ、でも一夏。私の飲んだ黒酢トマトは、それなりに美味しかったから・・・オススメ」

「って簪も変なの飲んでたのかよ！」

お前だけはそっち系のキャラじゃないと思ってたのに・・・。

「・・・どうだ織斑、肩の力は抜けたか？」

「え？」

と、がっくりしている時にかけられたケイシー先輩の声に思わず顔を上げる。

「お前、こっちから見ててもわかるくらい体がガチガチになってたぞ。そんなんじゃいい試合なんてできないだろ、もっとリラックスしろよな」

「あ」

確かに言われて気づいた。さっきまであった体の硬さがなくなっている。

鈴チームとの試合のときは相手をよく知っていたから緊張していても普通に戦えていたが、今回は全く未知の相手だ。あんなに気を張っていたんじゃ頭も体も鈍くなって相手に対応することが出来なかっただろう。

まさか、そのことを伝えるためにわざとあんな馬鹿な会話を・・・。

「まあ抹茶コーラを織斑に飲ませたいっていうのは本心だがな」

「いえ、それは飲みませんが」

「でも一夏・・・黒酢トマトが美味しかったのは本当だから・・・」

「ああ・・・後で飲んでみるから・・・」

・・・いや、ないな。

なんかもう普通に会話してたら俺が勝手に脱力したから、先輩としていいセリフっぽいことを言ってみただけのような気がしてきた。

簪にいたっては何でそんなに黒酢トマト押しなんだよ・・・。

「とと、雑談が長くなったな。そろそろ始まるぜ、織斑一夏。まあせいぜい頑張れや」

「世界唯一の男がどの程度か、楽しみッスねー」

む、たしかにもうそろそろだ。緊張し過ぎも駄目だが気の抜き過ぎはもっと駄目だ。
眼を閉じて大きく深呼吸をする・・・よし、落ち着いた。
簪の方に目配せし、頷く。簪も頷き帰してくれる。ちょっと心配だったけど体調も問題なさそうだ。
よし、いくぜ！

『試合開始まで・・・5，4，3，2，1』

ビイイイイイ

開始のアラームと共に俺は雪羅を展開。簪の前方数メートルの場所で相手の様子を注意深く見守る。戦略のわからない相手に特攻するのは得策じゃないし、何より簪を放ってはおけない。
二人は開始早々上空へ飛び立つと、俺らを見下ろし、

「頑張って避けろよ織斑。お姫様からじゃなくて王子様から狙ってやるからさ」

そう言ってから何やら赤いものを打ち出した。
だが大して速くもない。先ほどのセシリアのレーザーと比べたら雲泥の差だ。
余裕を持って避けることができた、が。

「こいつ、追ってきやがる！」

どうやらそれは誘導弾だったらしく俺に向かって曲がってくる。

「私に任せて」

それを少し離れたところから見ていた簪が、俺を追う赤弾めがけてミサイルを放つ。
速度が違うので命中し、それを破壊・・・のはずが。
突然どこからか飛んできた超高速弾により、逆にミサイルが途中で迎撃されてしまった。
と、それを見てる間にもその赤い弾はどんどんこちらへ迫ってくる。
何度曲っても避けても追尾してくる。
まあいいぜ。こういう攻撃はいろんな漫画で見てきた。もちろんその対抗策もな！
上空にいる先輩二人に向け飛び上がる。あっちがどこまでもこっちを追ってくるなら、ケイシー先輩のすぐ近くで避けて、逆にこれを当ててしまえばいいだけだ。

「ダメッスよー織斑君。たしかにそれの対処法は先輩をぶっ飛ばすか先輩に当てるかしかないッスけど、これはタッグ戦なんスから」

しかし、俺のその動きはサファイア先輩の声が聞こえると同時に当たった何かによって弾き戻された。げ、やべえ！そのせいで赤い弾が余計近くに来てる！
咄嗟に瞬時加速を使いある程度の距離を離す。
くそ、さっきはあの赤い弾を先輩に当てようと思ったから瞬時加速を使ってアレを引き離して先輩に近づく事はしなかったが、その場合サファイア先輩に迎撃されてしまう。
だがぶん殴ればあの赤いのも消えるらしいことがサファイア先輩の言葉で分かった。だったら今度は瞬時加速で、捉え切れないぐらいのスピードで突っ込んでやる。いくぜ！

「だからー、それじゃダメだって言ってるじゃないッスか」

が、しかし。
やはり先ほどと同じように何かによって迎撃されてしまいそれ以上近づけない。
くそ、Ωを使って直線だけの動きにならないように注意したはずなのに・・・。
そういえばあんまり実感がわかないけどもう2撃もくらってるんだよな。
ふと自分のシールドエネルギーを確認してみる・・・げ！もう半分くらいなくなってる！？
一体どういう・・・。

「そこで心底不思議そうな顔をしている織斑君、仕方ないから先輩として教えてあげるッスよ。私の『コールド・ブラッド』第一の装備。４門超迎撃砲、通称“マホカンタ”について」
「マホ・・・カンタ・・・？」

頭をひねっていると何やらサファイア先輩の方から説明してくれるそうなので赤い弾を避けながらおとなしく聞くことにする。

「まあ私のマホカンタは魔法だけが相手なわけじゃないッスよ。ただ自分に向かってくる敵や攻撃をある一定の距離に近づいた時に迎撃する。まあその弾の速さが尋常じゃないんでよくわからないうちに弾き返されたって感じる人がほとんどなんスけどね。しかもその判定基準は一定の距離のラインを踏んだかどうかだけなんで、入っているか、じゃないんで、既に入っちゃった相手とかには無意味なんスよね。そんでもって砲門が４門しかないもんッスから同時多重攻撃とかやられちゃうとちょっと厳しいかもしれないッスねー」
・・・説明だけじゃなくて弱点すらも丁寧に話してくれたぞ・・・。

こう言っちゃ失礼だが、この人、ちょっとあれな人なんじゃ・・・・・。

「あ、フォルテてめー。何自分だけ良い人ぶってんだ。だったら私も説明してやるぞ。私の『ヘル・ハウンド』の代表装備、まあそれも“ヘルハウンド”なわけだが、これはな、対象とした相手をずっと追尾して、当たればドカーンの一発技だ。まあ外部からの攻撃に弱いから狙撃とかされたらその場でドカーンだ。撃ち落とすことを狙ってみてもいいぞー」

・・・まさかのケイシー先輩からの説明もきてしまった。いや、尊敬すべき先輩方にこんなことを思いたくないんだが・・・この二人って相当に・・・

「それじゃあ織斑君が私達に決して近づけないとわかった所で、更識さんと一緒に頑張ってみな」

「あ！」

忘れてた！簪は一体何を・・・そう思って辺りを見渡すと、いた。空を飛び回って、いろいろな武器でいろいろな場所から二人に向かって、時には赤い弾、改め“ヘルハウンド”に向かって攻撃をしかけていた。

俺を追いかけているヘルハウンドが簪に当たらないように側にはよらないが、プライベート・チャネルを開き声をかける。

「簪、何やってんだ？」

『あ、一夏・・・マホカンタの発動ポイントと、どんな攻撃でも弾かれるのかを試してたの・・・』

「え？もしかして簪は二人の能力を知ってたのか？」

『知らなかったけど・・・攻撃を見てこうかなって思って・・・さ

っきの説明を聞いて、ああやっぱりって・・・』
「・・・さすが簪だな」

おみそれした。俺が説明聞くまで相手の能力が全くわからなくて右往左往していた横で、簪は冷静に相手の能力の分析を始めていたんだ。すごいな、最初戦闘を怖がっていた簪と同一人物とは思えない。簪もこの戦いを通して成長しているってことだろう。もしそれに俺が少しでも貢献できているなら、それは純粋に嬉しいし、誇らしい。だったら、その簪の成長を無駄にしないためにも。

「それで、結果はどうだったんだ？」

簪の手に入れた情報をうまく活用して、先輩方に勝ってみせる！

『うん、先輩に向けたのも、赤いのに向けたのも、どっちも撃ち落とされた。・・・ミサイルはもちろん、ちっちゃい銃弾も・・・』
「銃弾まで撃ち落とせるってどんだけだよ！・・・ん？赤いのに向けたのも？」
『うん、一夏も最初のミサイル、見たでしょ？』
「ああ、確かに見たけど、でも・・・」

簪と赤いの、つまりヘルハウンドとの間には、明らかにサファイア先輩が言うラインはない。

「どういうことだ？」
『多分、まだ秘密があるんだと思う・・・マホカンタにも、ヘルハウンドにも』

そりゃそうか、いくら何でも敵に対して一から十まで全部説明するわけはないもんな。もしろ中途半端に情報を与えることで混乱させ

る、とかを狙ってくれてるならそっちのほうが納得できていい。

「とにかく、そのあたりも踏まえてもう少し探ってみる必要があるな。なんとかして、マホカンタの壁を抜けないと」

『・・・壁は一回だけ抜けれた』

「え！？まじでか！」

『うん、ミサイルとかじゃ無理だったけど、荷電粒子砲なら一度だけ抜けれた』

「おぉ！」

『・・・理屈はわからないけど、多分マホカンタは普通より軽い銃弾をものすごい速さで飛ばしてるんだと思う。・・・一夏は何回か直撃を食らってるよね？詳しい説明は省くけど、速さと重さで威力が決まるの。だからものすごい速さでも球自体が軽いから普通の弾とそこまで威力が変わらなかったんだと思う。・・・あんなに早くて重さが普通なら、いくらＩＳとはいえ一撃で大ダメージのはずだから』

「な、なるほど」

『つまり、打ち出されてるのは軽いだけのただの弾なんだよ。・・・だから荷電粒子砲を殺しきる事は出来なかったみたい。サファイア先輩に直撃してた・・・はず、なんだけど』

そこで言葉を濁す簪に、思わず上を向く。先輩たちは特に俺達に攻撃を仕掛けるわけでもなく、むしろ見てすらいなかった。何を言っているのかは聞き取れないが、ＩＳに強化された視力で見るかぎり、普通にただ仲良く話しているだけっぽかった。

そこに、ダメージを受けている様子はない。まさか荷電粒子砲を無傷で受けきったっていうのか？

『たぶん、そうかも・・・』

「そういや第一の装備とか言ってたもんな・・・まだまだ装備はあ

るってわけか」

唇を噛み、先輩方を見上げる。と、そのとき、ふと下を向いたサファイア先輩と目が合った。

笑っている。

「・・・上等だ。その余裕の表情を驚きに変えてやる・・・」

迫ってくるヘルハウンドを避けながら、そう決意した。

三回戦・上（後書き）

大変遅くなってしまい申し訳有りません。次はもっと早く更新できるよう努力します。

今回出てきた2体のＩＳの設定は創作ですので、色々変なところがあると思います。
ここがおかしい、ここがわからない等ありましたらぜひ言って下さい。
ちなみに自分は物理学に関してはほとんどわかりません。なのでそこは勘弁して下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0308s/

IS《インフィニット・ストラトス》―install　memory―

2011年10月13日00時55分発行